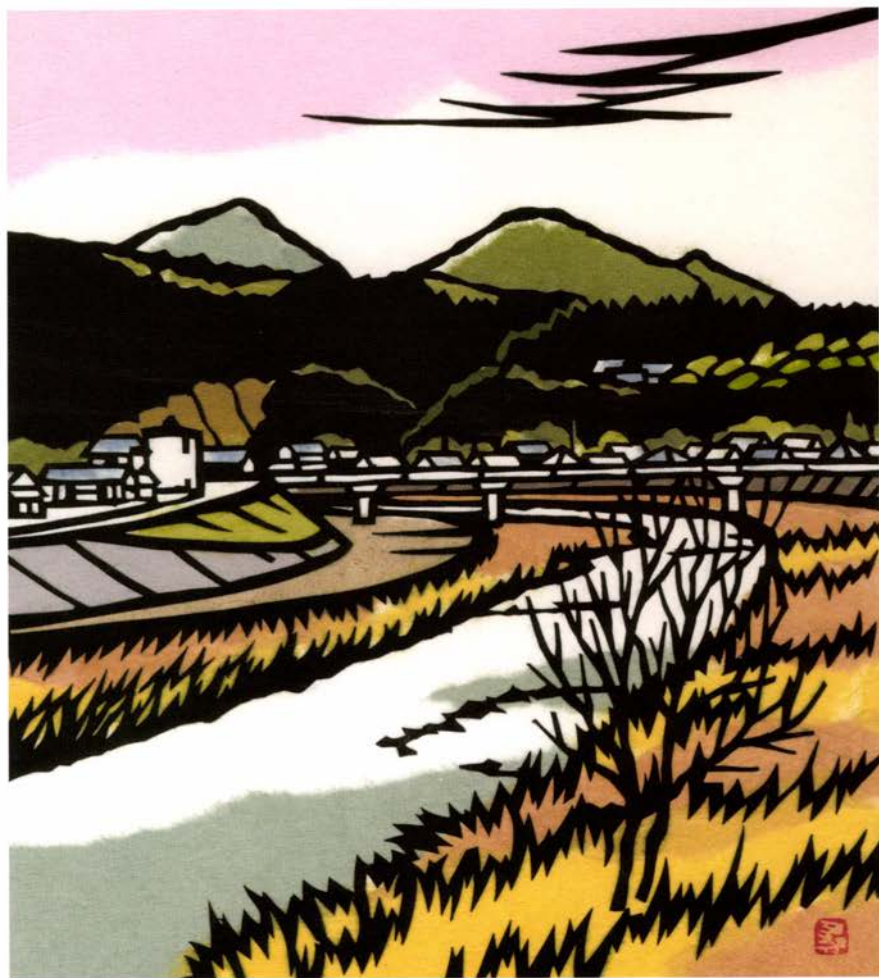


川柳塔

平成二十九年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇八七号



日川協加盟

No.1087

十二月号

第六回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第六回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句 共選）

課題吟 「つくる」 江畑 哲男（番傘川柳本社）
「力」 居谷 真理子（川柳塔社）

「天根 夢草（川柳展望社）
古今堂 蕉子（川柳塔社）

雑詠

矢沢 和女（時の川柳社）
小島 蘭幸（川柳塔社）

投句要領 規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料 一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切 平成三十年二月二十日（火）消印有効
送付先 〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇―

川柳塔社 誌上大会係 宛

TEL/FAX（〇六）六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題特選に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

平成30年 本社句会 開催日程表

会場：ホテルアウィーナ大阪

開催日	時 間	会 場
1月9日（火）	13:00～17:00	金剛の間（東） 4F
2月7日（水）	13:00～17:00	金剛の間（中） 4F
3月7日（水）	13:00～17:00	金剛の間（東） 4F
4月5日（木）	13:00～17:00	金剛の間（東） 4F
5月7日（月）	13:00～17:00	金剛の間（東） 4F
6月7日（木）	13:00～17:00	金剛の間（東） 4F
7月6日（金）	13:00～17:00	金剛の間（東） 4F
8月9日（木）	13:00～17:00	金剛の間（中） 4F
9月7日（金）	13:00～17:00	金剛の間（東） 4F
10月6日（土） 第24回 川柳塔まつり	同人総会 10:00～11:00	生駒 3F
	句 会 11:00～17:00	金剛（中西） 4F
	懇親宴 17:00～20:00	葛城（全） 3F
11月7日（水）	13:00～17:00	金剛の間（東） 4F
12月7日（金）	13:00～17:00	金剛の間（東） 4F

寒中見舞募集

○ 本誌
○ 締切 平成30年2月号掲載
12月20日



川柳塔社事務所 宛

第6回 現代川柳の集い

小島 蘭 幸

乾杯、カンパイ、おめでとう!! 第6回日本現代詩歌文学館館長賞を受賞された梅崎流青氏を囲んで、居酒屋一翔での前夜祭は始まりました。美味しい地酒と郷土料理とおしゃべり、楽しい時間はアツという間に過ぎてゆきます。遠来の出席者のために一席を設けて下さいました佐藤岳俊さんの「北上夜曲」をしみじみ聞いてお開きとなりました。

日本現代詩歌文学館は、岩手県北上市の美しい敷地の中にありました。日程の打ち合わせをして、各賞選考の時間まで、詩、短歌、俳句、川柳が展示してある展示室を見せて頂きました。作品も書も個性豊かで楽しいひとときでした。

いよいよ開会、篠弘館長の挨拶、第6回日本現代詩歌文学館館長賞贈賞式に続いて、句集『飯茶碗』の感想を私が述べさせて頂きました。篠弘館長は、歌人の目で流青作品を深く重く鑑賞されておられま

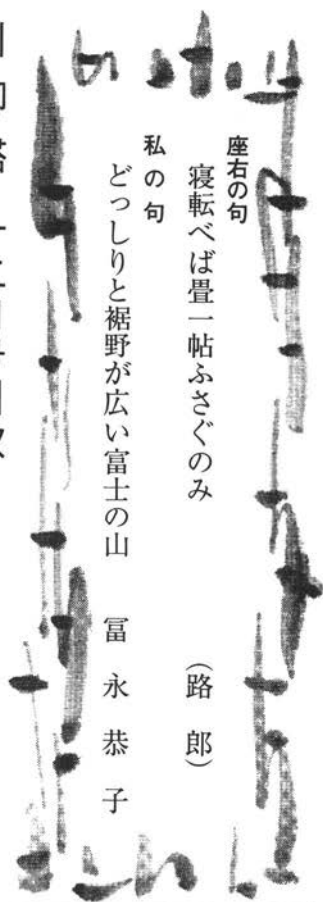
した。川柳に近いのは短歌と言われた言葉にも説得力がありました。

梅崎流青氏の記念講演「次代に残しておきたいもの」は圧巻でした。約一時間、原稿なしで詩、短歌、俳句、川柳を全て覚えておられました。私は壇上に立つと自分の作品でさえ真っ白になりますから凄かったです。

入賞句の発表は佐藤岳俊さんから始まりました。私は宿題「飲む」の披露をさせて頂きました。選者の披露を聞いてみると、やっぱり川柳はいいなあ、大会はいいなあという思いをひしひしと感じることが出来ました。ただ淋しかったのは、出席者が少なかったことです。第1回受賞者の森中恵美子先生は、今回の大会まで連続で出席されています。第7回は四年後に開催されます。多くの皆様の応募、出席を心から願っています。

二〇〇ページあたりできつと離婚する 隆行

台風22号接近の中、帰りは智彦、恵美子先生と大阪までご一緒しました。美味しい駅弁を食べながら、昔話に花が咲きアツという間に帰竹することが出来ました。



座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

私の句

どつしりと裾野が広い富士の山

富永恭子

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「日南市飢肥」

■巻頭言 第6回現代川柳の集い	小島 蘭 幸	(1)
市電川柳から川柳大阪へ	中原比呂志	(2)
川柳塔(同人吟)	小島 蘭 幸 選	(4)
川柳塔の川柳讃歌	木津川 計	(43)
自選集		(44)
句集の森		(46)
■ショートエッセイ「第23回川柳塔まつり」閑話休題	細川 花 門	(47)
温故知新		(47)
水煙抄	川上大輪選	(48)
橘高薫風句抄		(67)
俳風柳多留一二篇研究		(68)
愛染帖	新家完司選	(70)
檸檬抄「頼る」	山口光久・斉尾くにこ共選	(74)
英語 de Senryu ⑦	吉村脩久代	(77)

市電川柳から川柳大阪へ

中 原 比呂志

水の都・大坂は百五十年前、港湾整備の大事業を行い大都市へ飛躍的に発展する基盤をつくった。これに続き明治36年9月、築港Ⅱ花園町間の5キロを大阪市電が営業を開始した。

築港開港百五十年イベントとして、この夏から二階建てチンチン電車をラッピングした市バスが梅田Ⅱ天保山間を運行している。昔なら装飾を施した「花電車」運行というところだろう。

大正10年、この市電従業員達が個人宅や市電託児所などで以交會と名乗り句会を開き、柳誌「みをつくし」を発行していた。実物は麻生路郎寄贈の印を押し、今も大阪市立図書館短詩文芸文庫に保存されている。句会にはもちろん路郎、水府も参加されている。

「みをつくし」は大正13年、路郎発行する「川柳雑誌」に統合して廃刊するが、主幹に路郎をたて、市電従業員であった竹田芦穂、橋本緑雨ほかは非番を利用して編集、支部責任者等の要職を担当して今日に引き継ぐ「川柳塔」のスター

一路集(「強氣」)

初歩教室「ヒント」

川柳塔鑑賞

水煙抄鑑賞

せんりゅう飛行船⁸⁴

■句集鑑賞「川柳塔」の一行詩人・小島蘭幸論

■麻生路郎読本 余滴⁽⁴³⁾

■エッセイ 七五調のリズム

インスピレーション・ナビ 印象吟

十一月本社句会

句会燦燦

各地柳壇(佳句地十選/三宅保州・川崎ひかり)

第32回国民文化祭・なら結果発表

十二月各地句会案内

柳界展望

■編集後記(ひとこと/中川ひろ介)

松岡 篤選 …… (78)

上田ひとみ選 …… (79)

居谷真理子 …… (80)

中居善信 …… (82)

山崎武彦 …… (84)

新家完司 …… (85)

平 宗星 …… (86)

楽原道夫 …… (88)

石橋芳山 …… (90)

大西泰世 …… (92)

弘津秋の子 …… (94)

…… (96)

…… (98)

…… (100)

…… (102)

…… (104)

…… (106)

…… (108)

…… (110)

…… (112)

…… (114)

…… (116)

…… (118)

…… (120)

…… (122)

…… (124)

…… (126)

トを切ったのである。

その一方で、大阪市交通局互助組合報誌にも川柳欄を設けて市電従業員に啓発活動を行っている。

今日の「川柳大阪」の題名は路郎が命名、緑雨は落款まで預かっていたというから二人の信頼度の深さは計り知れないものがある。

かつて交通局川柳部の発足は大正10年とすべきの意見があったが、現存資料にある「昭和16年6月 市電川柳創立大会 天王寺軍人会館で開催」を基点とし、平成30年1月号は柳友のご支援を戴きながら、実に900号の記念すべき年を迎えることになった。

「川柳大阪」の自由投句欄「みをつくし」は、これらの歴史を踏まえて、旧仮名の表記を現在でも用いているのである。市電廃止後は地下鉄へ移行して句会を継続しているが、最盛期一万五千人を擁した交通局職員も今では数千人に減っている。平成30年4月には民営化され大阪市交通局の名称が消えるが「川柳大阪」の名は消えない。

路面から地下に石積む九〇〇個 比呂志

(惜越ながら文中、諸先生、先輩方の敬称を略させていただきましたことをお許しください)



小島蘭幸選

大阪市 平井美智子

走っては転んではかりいる言葉
五分鐘泣けばカボチャも煮える頃
甘柿も渋滞も生る私の樹
生きてゆく深さを思う空の青
お返しのお返しに買う菊もなか
煌めいていよう私は美しい

弘前市 高瀬霜石

大御所と呼ばれるようになった鯉
会社でも家でも我慢比べなり
夏よりも冬が美味なんだとウナギ
煙草^{タバコ}って高いと思う 止めたから
吹雪^{フキ}の晩^{ばん}だけしか遇えぬ雪女
非正規雇用^{ひせいぎ}でどんどん雪が深くなる

大阪市 谷口義

真っ直ぐに立っているのは十二月
いつも通りバスが出て行く十二月
八十からそろそろ解凍が始まる

追伸に座り直した跡がある
風の便り金木犀のあたりから
それから平気な顔で生きてます

男鹿市 伊藤のぶよし

ため息ばかり一人居ばかり郷の秋
海鳴りの町で明日の天気よむ
ゆらり線香父を追う母を追う
懺悔ならあの世とやらでするつもり
ライバルも私も肥えて秋加速
準備など知ったことかと降る雪だ

三田市 北野哲男

老い二人日々好日のほやき合い
ありがたや上半身はまだ若い
前略でぎっくり腰がやって来た
持ち合せ笑顔だけです悪いからず
手を振って後ろ歩きで出た故郷
夏痩せをしない私に秋が来た

札幌市 三浦 強 一

死亡欄見ると私も適齡期
人生の締切りがまだ分らない

同年と語る戦後がよく弾む

一桁の預金利息が畏まる

週一の笑点という脳休め

猛吹雪冬將軍の陣太鼓

松江市 石橋 芳 山

忘れたい衝動汗を流したい

朱の色に染まって月の謀

月を見ろ月に吠えてる俺を見ろ

大阪と浪花で明るさが違う

口惜しさが肋の隙間から洩れる

うれしさを掬えばどこからも和音

神戸市 細川 花 門

興に乗る川柳喜寿をすぎてから

じいじよりばあばの方がお金持ち

秋霖も良いものであるバスの旅

玉入れは参加リレーはご勘弁

唐突な選挙に国が揺れている

逆風が吹くポスターの笑顔にも

大阪市 高杉 力

病院の横に馴染みの飲み屋あり

失恋をしてもポテチを離さない

フレンチのシェフが焼いてるたこ焼き屋

寂しさがくるくるコインランドリー
優柔不断な僕をベンチに置いてくる
ラブソングできない恋をしていない

鈴鹿市 小河 柳 女

中空をぶらりと夢の道を行く

人の流れに川の流れに夢浮かぶ

現世の灯が消えうすはんやりの廊下

変わらない景色幸せかも知れぬ

フライパンの中で秋がこげている

車の波鳥は呆然と見る

三原市 鴨田 昭 紀

遠目には幸せそうなシルエット

真実が沖へ沖へと流される

響き合う和音優しいおもてなし

老々介護いつまで続く剣が峰

望郷が募る赴任地の夕焼け

相和して築く夫婦のメモリアル

八王子市 川名 洋 子

御仏に任せてゆるり下り坂

ゆつくりと肩の荷おろし生きて行く

くしゃみして夏から秋へ入れ替わる

ラブソング急に泣きたくなってくる

口角をあげて幸せ呼んでいる

お隣の門はいつでも閉じている

大阪市 升成 好

添い遂げて今や血よりも濃い絆
あと継ぎに残す家訓の旧漢字
追いついてみたことはないか影法師
真実を味方につけて動かない
若者の一途もしもの文字がない
アカベラの温もりを聴く子守唄

広島市 岸本 清

夏バテも美味しい秋で取り戻す
風任せレンタサイクルしなみ路
この酒場教えてくれた通り雨
メガネ拭く自分の心拭くように
脳活のサブリメントは五七五
にこやかに暮らそうひとつ屋根の下

岸和田市 岩佐 ダン吉

妥協癖時どき空に吠えている
形だけ見れば人間なんだろう
茫洋と見えるが手なんだと思う
条件はつけぬと恐いことを言う
留守電が勝手なことを言うている
スマホとの対話ヒト科の無表情

尼崎市 山田 耕治

月一度会う故淡い恋をする
竹馬が欲しいと聞けば作ります
一人行けばどうかしたかと墓が言う

竹トンボおまえもプラスチックかい
人生のおまけの日日が忙しい
聞分けのよい子の涙抱いてやる

河内長野市 山岡 富美子

変化球よりも愚直な愛で良い
耐えているじかん挑んでいるじかん
五七五みんなライバルみな仲間
液状化ささいな事で老いを知る
句読点コーヒーよりも甘酒で
雑踏を縫ってハンゲル中国語

岡山市 永見 心咲

口裏を合わせ真意にふたをする
衝撃のかたちで落ちているよもや
混沌とした顔で行く投票日
さよならと言えば振り向く人ばかり
落ちこぼれ林檎もそんな目をしてた
波が消すふたり歩いた時間まで

大洲市 中居 善信

謝れば済む無視すれば傷が付く
まだ畑に出ないと鬱になりそうだ
常識を持たぬ男だ手ごわいぞ
演歌だな一両だけの汽車が往く
十月の雨しとしとと慈悲深い
街で住む事に馴染んだ子が独り

和歌山市 古久保 和子

遠い人に想いを寄せて落葉踏む
女の一生吊るすある日の衣紋掛け

南京錠掛けて時間を止めた家
終電を見送り線路濡れている

虫集く今宵の息は柔らかい
買いました三日坊主の日記帳

堺市 内藤 憲彦

カフェオーレ妻が昭和を語り出す

大木になると信じて枝を張る
太極拳続け元気に百歳へ

タラレバで危機を煽って再軍備
パスワード4桁までは大丈夫

目と目が合って息子になったブルドッグ
藤井寺市 鴨谷 瑠美子

揺れている方が明日へ渡る橋
西日受け優先座席空いている

コスモスがゆれるかすかな意思表示
手の平にわたしの履歴書いてある

生涯使える身体ありがたい身体
フライパンだけは自由に操れる

出雲市 岸 桂子

表札はずっと変えないまま生きる

一冊の句集に恋をしてしまう
くたびれた舌は夜には休ませる

雑草の強さ人間頼らない

約束はまだ果たせない墓洗う
夏巡る戦知る人みな老いて

もしもが逆さまに吊つてある平和
君が代を斜めに歌う自衛隊

鮑食にタメ出しをする鯛の目
追い越した途端にアレルギー鼻炎

雨やどりぼんやり立っているもしも
エプロンをはずし女になる時間

西予市 西田 美恵子

試される二つの門が開いている

好きな様にせよと言われてから迷い
ひと休みしましょコーヒーしませんか

風ばかり読んで小さい人になり
懷に母は火を溜め風を溜め

まろやかな味です妻もみそ汁も
高槻市 島田 千鶴子

出ておいでコスモスからの便り来る
廃線の向こうに小さき村がある

きっかけはともあれ君と半世紀
あやかってみたいが遠いその背中

よく笑うあの娘にあげる二重丸
気の弱さ隠し通した厚化粧

さいたま市 星 野 育 子

富山市 島 ひかる

平和賞核は違法の声届く
複雑な気持クローン文化財
コスモスも芒も風に身を委ね
遊具も淋しそう無人の公園
名医言う加齢という病は無い

東京都 川 本 真理子

ここでバス降りてみようか知らぬ町
うれしかったと悲しそうな顔をして
少し舌出して空気を読んでいる
救急車過ぎる頭をよぎる顔
あちらのほうがにぎやかだろうきともう

東京都 まえで とよこ

卒業して就職さきのないあわれ
五年すぎ就職活動らくになり
西へ東へ針のむしろも踏む五年
握手してやつとはじまる道険し
国難を語る気迫に段差あり

横浜市 菊 地 政 勝

バーゲンの好きな財布を妻が持ち
相性を血液型に当てはめる
天候の不順家計簿狂い出す
損得を考えないでお付き合
留守電にして天ぶら料理する

氷山の一角ニッポン中にあると言う
両陛下と植樹祭をもした一人
立山のおかげ台風それて行き
水空気米も魚も旨い郷
何や彼やあつて今年も十二月

犬山市 金 子 美千代

義理で来た知らせ割り切ることにする
あの時はみんなイエスと言ったはず
都会ではやはり気後れするセンス
秋夜長ふつとひとり肌寒し
全没の心得聞いて待つ披露

犬山市 関 本 かつ子

京菓子を開ければ和歌のお出迎え
いい時を思い出してる走馬灯
米作りやめた気楽さから病
美しい手が届きそうおわら盆
世の中がどう動こうが年金日

愛知県 早 川 遯 行

大切な時間妻との差し向い
趣味多忙まだ返せない免許証
抽斗に要らなくなったパスポート
鮎を釣る人を眺めていて飽かず
いい知恵はないか日中韓の海

京都府 榎本 宏子

コスモスを抱いた写真にする遺影
ストック二本持てば富士山登れそう
子の商いのほり調子について説教
他人ならラブラブの仲続くはず
秋の草皆ひかえ目な京言葉

京都市 三宅 満子

何色かわからぬ人は選べない
戦力外三文字で終るプロ選手
魚の骨ささったことない子が育つ
抱きしめた感触残る子は四十路
主婦業も働き過ぎを褒めて欲し

長岡京市 山田 葉子

やっぱりとそやけどに遊ばれている
昨日までを忘れるために降りた駅
悪役をやってくれそうベアを組む
通院の友と楽しむ待ち時間
うっかりの波合うて来て旅続く

八幡市 今井 万紗子

追い風にまあるく乗って喜寿傘寿
錆びついた脳にひと瓶赤ワイン
畦道におすきにどうぞ秋野菜
二人居に大根五本下げてくる
バイキング皿からマナー溢れ出す

大阪府 井丸 昌紀

一心に祈る人には言えぬこと
お茶漬けのブライト宇治茶コシヒカリ
太陽と月絶妙な距離に浮く
山頂めざす理由は後で考える
人畜無害蓋のない玉手箱

大阪市 岩崎 玲子

日にひとつ笑いの種を探してる
絵本からやさしさもらう知恵もらう
リーダーの人柄に惚れお手伝い
ほどほどに欲も情けも出して生き
肩書き取れただのおっさんだから好き

大阪市 内田 志津子

アラートに反応してる僕と猫
譲られて素直に座る歳になり
人間を品定めする鹿の群れ
触れられて見事に飛んだほうせん花
中腹を越えた辺りで緩むネジ

大阪市 宇都 満知子

受け取り拒否できぬ加齢に蹴躓く
メモしておこう信用できぬ記憶力
喉元でブレイキかけた孫自慢
妻 母 祖母時の流れに添って今
ゆったり目の服で心も深呼吸

大阪市 江島谷 勝 弘

なんとかして介護保険が高すぎる
誕生日日本のバラ渡そうか
梨と柿秋刀魚も食べたこれでよし
私にもいつか宣告される日が
日程は妻と子どもが決めている

大阪市 榎 本 日 の 出

美人の湯元のままだと月笑う
意地悪でないと出来ないあのテニス
エダ豆とビールで機嫌おさまった
昭和生れ年長者ですまだ元気
ありがとう自分にそつと言ってやり

大阪市 榎 本 舞 夢

秋風が悲しい知らせ次々と
悩みます見送ることの難しさ
見送って自分の生き方考える
する事が一ぱいあって逝けません
健康で楽しい日日を過すこと

大阪市 大 川 桃 花

平均寿命ここまで来てとまた伸びる
向日葵の筋肉枯れて秋深む
独り散歩カラスに相槌うちながら
食料として見る日が来ると言うバツタ
駄菓子屋の時計昭和の音で鳴る

大阪市 大 治 重 信

ファーストは自分と決めて酒を酌む
ブレイキをかけて娘の恋を見る
星空の落とした数の虫時雨
酒旨い妻は別嬪子は素直
酒を絶ちたばこもやめて敬老日

大阪市 奥 村 五 月

三つ指の妻に最近怒鳴られる
切腹を思えば手術夢みたい
行こうと論吉が騒ぐ給料日
子は巢立ち叱られ役は僕独り
いい人と言われているから苦労する

大阪市 笠 嶋 恵 美

熱中症本当に恐い後を引く
息子夫婦来てくれ花の敬老日
墓まいり息子夫婦に頼んどく
老女三人久し振り会う空元氣
娘のお供最後の旅と思うから

大阪市 川 端 一 歩

わが家系みんな働くのが好きだ
手紙一本書けばいいこととした気持
渋柿をリングが抱けば甘くなる
孤独な人だ昔のはなしばかりする
軍費が五兆を越して震災地

大阪市 熊代 菜月

のどあめをあげてもらって老人会
物忘れだんだん増えてメモが増え
優しさに逢いたくなった友二人
絵手紙で私あなたに逢いに行く
ありがとうつい嬉しくて娘に孫に

大阪市 古今堂 蕉子

道譲る術心得た老いの坂
中庸をキープするのは難しい
反抗期過ぎたか夫素直すぎ
学習力なくて転ぶし探してる
一步出す勇氣と出さぬ知恵もある

大阪市 近藤 正

酉年はさも騒がしき総選挙
国難を導き入れたのは総理
核のゴミまだ積み上げる再稼働
米朝が脅し口論飽きがきた
食材と器が醸す和の文化

大阪市 坂 裕之

元氣だと報告をしてお線香
世話かける人は決まっているらしい
遣り切ったはずが結果が付いて来ん
人のこと心配せずに先ずあなた
足元をしつかり固めいざ前へ

大阪市 田浦 實

ほちほちとやっております言える幸
老いるほど笑顔上手の父を真似
仏の笑み浴びに行きます中宮寺
若冲の心和ます百犬図
里の法事椅子式ですと追記あり

大阪市 田中 ゆみ子

たんと笑った父の歟母の歟
約束はできない明日は明日の風
先に逝く逝かぬでもめる秋の夜半
天高し山に向かつてアエイオウ
もう居ないキャッチボールをする相手

大阪市 津村 志華子

義妹は銀河の舟に乗れたるか
哀しくて淋しい年が暮れてゆく
思い出がじんじん枕濡れて来る
耳底にまだ義妹の声がある
阿弥陀さま義妹のこと頼みます

大阪市 津守 なぎさ

トランプも安倍も解らず乞う平和
歳のせい笑ってすます事ばかり
老健で規則正しい刻きざむ
ありあまる時間貰って感謝する
ゲーム中ルール違反もご愛嬌

大阪市 寺井弘子

若い氣の足を笑った水たまり
すらすらと無理言う母は宝物
一票は十八歳の背をただし
円満の秘訣を保つ車間距離
親看取りやつと一人前になる

大阪市 寺本実

彼岸花揺れて墓参に來いという
せわしさをトランクに詰め旅に出る
血の濃さが憎しみをよぶ遺産分け
弁当はまずウラブタのごはんつぶ
大変だ妻が正座で語りだす

大阪市 栃尾奏子

指切りをひとつ忘れていませんか
十二月です白黒をつけましょう
失恋に死のうだなんてヒト科だけ
さよならは女磨きのステップだ
始まりも終わりもありがとうだった

大阪市 原田すみ子

秋茄子を心残さぬよう食べる
旬過ぎた西瓜の甘さ我が甘さ
一生懸命も死ぬ氣ほどじゃない
閑そうに見えないようにたすき掛け
ハロウィンと騒ぐ日本は神無月

大阪市 平賀国和

人生の覚悟を学ぶ方丈記
信貴山の戒壇巡り幸願う
母の葬儀孫の涙が手向け水
問答は無用と嫌な風が吹く
核禁止被爆者の声響き出す

大阪市 藤田武人

天才にあり凡才にないセンス
高層を配るサンタのスクワット
ひとりごと聞き逃さないパンの耳
新しい風吹き込んだ伝統美
大鉢に盛った煮物にある笑顔

大阪市 藤原千恵子

牡丹餅とお萩の違い会得する
大幅に後ずさりして一歩出る
通りすがり片手で地藏拝む人
投稿欄わかるわかと独り言
知らぬ花カメラに納め華道展

大阪市 吉内タカ子

友笑う九十成れば集いたい
元氣だね友の趣味をば自慢する
歩かねば幸せ逃げる脳が眠る
河内弁互いに癒える立ち話
カタカナ語追いつつ笑顔絶やさない

大阪市 若本安代

陽は昇る くよくよなんてもう終り
寂しいな昭和の色が消えていく
リコーダー優しく聞いている夕陽
月今宵少しの酒と君の笑み
頼りないふりもしてみる老いの知恵

堺市 柿花和夫

前置きの無い乾杯に拍手湧く
昇進し残業代のゼロに泣く
自国主義目指せば辿り着く戦
銭湯が寺小屋だった昭和の子
目札の相手が増える一万歩

堺市 加島由一

ペランダを片付けただけ大掃除
平日は株終末はお馬さん
第九より美空ひばりの「乱れ髪」
君とならシエルターだって悪くない
愚痴いわぬ老いの一微笑いじわ

堺市 源田 八千代

懶祭酒と雲丹を供えて三回忌
喉仏納めに皆で京の寺
故人を称え本廟に納骨をする
編み込みと揃いの法被祭女子
北斎画展鋭気を貰う八十路翁

堺市 齋藤 さくら

一票を入れる政党見つからず
当落が先に出るからつまらない
選挙ある時だけ顔を出す友だ
寄附集めどこへ行ったかわからない
百歳を目ざす婆ちゃんよく食べる

堺市 坂上 淳司

二度三度手洗いに立つ出番前
解散の声そわそわと風見鶏
故郷が輝く夏の甲子園
旅先で輝いてます国訛り
秘湯の宿で満天の星見る至福

堺市 澤井 敏治

付度ができず出世に縁がない
大器晩成信じる海を胸に抱く
お名前が出ないときは間の話術
自我の我が赤ちようちんでくだを巻く
月こうこう身に沁みて聴くちちろ虫

堺市 遠山 唯教

身の丈に合った暮しを崩さない
ダイヤ婚に感謝のきもちわすれない
原発が過去も未来も奪い取る
老いてなお握った欲で抜けぬ壺
居酒屋で今日の空気を入れ替える

堺市 矢倉五月

茨木市 藤井正雄

水割というぞんざいも憎からず

友の計に逆回りする記憶あり

芸術品みたいカクテルファンです

障子破り猫の上いく孫元氣

才色兼備よりも情の解る人

左遷地の出迎えもなく降る氷雨

坂道で亡母のエールに抱かれてる

ご自慢の順は盆梅孫に嫁

裏事情聴いた途端に消えた虹

退屈を持て余して庭掃除

池田市 栗田久子

貝塚市 石田ひろ子

解散で追及阻止はやるせない

不器用に生きて神様見放さず

角切りの鹿の毛並みに見る季節

ひとり言がわたしの杖になってくれ

ふかし芋これぞ家庭の味だろう

小さな秋見付けた朝の蛇口から

寝込んだら老いは加速という不安

秋刀魚の値聞いて二人で半分こ

防災食もの珍しく試食する

物欲も食欲もありお蔭さま

和泉市 横山捷也

河内長野市 大島ともこ

指切りの時効も過ぎてもう八十路

舌の根も乾かぬうちの浮気癖

雨が好き静けさが好き病み上がり

遠距離の恋は韋駄天逃げ去った

過疎の村嫁来る噂暮れ間近

迫り来る老いにしばしと付け届け

診察で最初に酒の量聞かれ

何だかなあ貴方はいつもイエスマン

円陣を組んでその気になって来た

根絶やしをめざした草に力負け

茨木市 島田誠一

河内長野市 梶原弘光

肩書きは家長補佐です定年後

同好の士となら杯がよく進む

惜しまれて逝くより気ままにはびこる

食べ物に感謝空腹にカンシャ

立て替えた金をもらって礼を言う

無利息で貸すと言うから遠慮した

体力も気力も金もあと僅か

吹きだまりの枯葉元氣に風に舞う

暑い寒いのはやく割には四季を愛で

取り敢えず左手で握手をしとく

河内長野市 木見谷 孝代
旅プラン立てへそくりがばれました

へそくりを思い出に変え悔いはなし
生きんな虫を蹴散らし菜を間引く
無理強いはせぬと言いつつ仕事積む
少々の無理はかなえる子の頼み

河内長野市 黒岩 靖博
毎日の献立で変える主婦の知恵

一杯の茶の湯味わう至福どき
嫌なオベ終れば旅が待っている
早割りで八人分のおせち決め
公約の大風呂敷も出ぬ小槌

河内長野市 谷 久美子

若人が溢れ出ている秋祭り
台風が逸れて稲穂がよく実り
持ち前の親分肌は亡父譲り
終活に欲と未練が邪魔をする
主語の無い言葉年だと笑われる

河内長野市 辻村 ヒロ

短命の家系で生きる八十路過ぎ
締め切りに追い回されてペン走る
還暦をスタートライン立て直す
悩み事しつかり混せて自分色
懺悔しに一人ゆつくり墓参り

河内長野市 藤塚 克三
マイペース時代遅れも古い盛ん
自分流に気になりだした着地点
知ったか振り底の浅さに気づかない
あんなだけと秘密洩らした友が逝く
階段はヨイシヨの言葉杖になり

河内長野市 村上 直樹

平均寿命さあ楽しむぞロスタイム
肩ひじを張らずに生きて肥満気味
反戦を刻む摩文仁の鎮魂歌
悲しみを癒す時間という秘薬
天高く追う夢があるまだ八十路

河内長野市 山室 光弘

焼くまでは直らぬ性と見抜く妻
持て余すバブルに買った夢の土地
発泡酒に変えたと妻の鶴の声
持ち切れぬ金を残していく無念
空模様野菜の値段持てあそぶ

岸和田市 宮野 みつ江

十五夜を団子とすすき飾り待つ
亡夫と昨夜話したこと内緒
秋の蝶花もないのに庭に来る
ふと不安覚える町の静かすぎ
だんじりが終り町元の静けさ

岸和田市 雪 本 珠子

生きてれば笑える時が訪れる
平凡な暮しの中に幸せが
川柳がほくの心の栄養に
亡き娘との幸せな日日また想う
釣ってきた鯛を肴に飲む至福

四條畷市 吉 岡 修

魂にささやいてくるモノリザだ
ピリオドが利かぬ未練があるらしい
片手間にやつてる株が億らしい
爆音が遠雷かもう耳おほろ
大緊張曾孫を風呂に入れる役

吹田市 太 田 昭

晩酌は二合で止める腹八分
善人の仮面を付けて墓参り
悲しみに堪えて手足の爪を切る
うす紙を剥ぐじれったさ腰治療
摺り足も歩幅せばまる老いの秋

吹田市 木 下 敏 子

いい気候三連休を娘と歩く
長生きの足を鍛える朝の道
にこにこと朝の体操みな元氣
一病を提げて八十路の坂登る
晩学の手電子辞書秋の夜

吹田市 須 磨 活 恵

平凡に生きる喜び今日の幸
朝来ることを信じて米を研ぐ
夕日差す独りぼっちを抱きしめに
虫の音に思い出ひとつ疼く秋
オミナエシ漢字で書くとき悲しすぎ

吹田市 野 下 之 男

思いつき結構あるんだ大統領
台風が去れば快晴まあいいか
うれしいねテレビで会える西郷どん
敬老の日息子だらうかおまんじゅう
目をそらすよくしかられた父の背な

高石市 浅 野 房 子

もうみんな故人だ過去は忘れよう
とは言えど時時夢に出てくるよ
長生きとは友が少なくなることだ
心から笑える事が無くなった
鉛筆は今もナイフでけずるなり

高槻市 指 宿 千 枝 子

全没の脳に水やる宴の席
いただきますごちそうさまと箸を置く
難民のテント暮らしの悲しさよ
もしもにと作り置きするにぎりめし
もしもにと持ち歩きする子の住所

高槻市 片山 かずお

すぐします返事はとても良いのだが
玄関の靴に髭が顔を出す

児を抱けば顔をびったりつけてくる

物忘ればかり慌てることばかり

独り寝の耳にやさしい虫の声

高槻市 初代 正彦

あなたなら飛べると風に煽てられ

すぐ舞いあがるわたくしも紙風船も

行く先を思案しながら抱く子猫

変わらずに太鼓の響く里の秋

国難と波立て過ぎと深海魚

高槻市 杉本 義昭

左寄り右寄りもなく秋刀魚焼く

歌声は明日の扉をノックする

産科以外くるくるハシゴして元気

コンビニのトイレを借りて義理を買い

失敗を重ね明日へのばねにする

高槻市 富田 美義

肩書が失せりや欠伸が直ぐに漏れ

赤字にはならぬ原因記帳漏れ

リハビリにや強要ナシが基本です

認知症避ける策です五七五

目指すもの有って小銭を貯めてます

高槻市 富田 保子

クラス会昔の王子に会えるから
仲直り出来ないままの友がいる

あなたには愛の一句は死なないで

書架一つ捨てて孫子と足伸ばす

宿題も今じゃスマホが答えます

高槻市 原 洋志

水割りと今日の無念を妥協する

切り札のカードが欠伸ばかりする

泣けぬから焼酎飲んで深酔いす

強がりの仮面はずせば唯の人

昨日まできちんと出来ていたことが

高槻市 松岡 篤

インクの香電子本には無い風情

いまさらと言つて逃げると老いるだけ

二位なんて目指すと三位にも成れぬ

げんこつを呉れた手今は小さくて

泥棒に笑われぬよう片付ける

高槻市 安田 忠子

被爆者の叫び届いた平和賞

お父さんが親父に変わり孫二〇歳

荒磯のお早ようコール波の音

荒磯の大海原に癒される

幸せだなー荒磯館で娘と孫と

豊中市 上 出 修

運はまだ使い果たしておりません
大病のサインだろうか足シビレ
国富んで弱者の聲が遠くなる
大臣でそんなに魅力ありますか
ガチンコで取り過ぎたかな大相撲

豊中市 藤 井 則 彦

思いやりが仄見えてきた笑い皺
鼻の差の遅れをバネに生きる日日
添削に追われ続けて早や八十路
藤椅子が揺れてあの世も薄ら見え
真に受けて心に刻む褒め言葉

豊中市 松 尾 美智代

目標は平均寿命ストレッチ
雨宿りしなかったなら間に合った
あなたとめぐり合って私の今がある
実ろうと立ち枯れようと愚痴言わぬ
逝った人のやさしさを今懐かしむ

豊中市 水 野 黒 兎

ゆっくりでいい銀河への旅支度
老いてなお夢のかけらをポケットに
道の駅旅情育む土地なまり
月光という静けさを増す明り
大木は先ずじつくりと根をおろす

富田林市 片 岡 智恵子

知らぬ間に咲き消えてゆく曼珠沙華
手品師の鳩一羽だけ叛いたり
この選挙関ヶ原の乱に似たり
小鳥のように幸せの絵になる言葉
大波のこない入江で生きている

富田林市 関 よしみ

初めての使いで切符握った日
年齢を重ねるたびに座る腹
ふる里の風に今度を積んでいる
信じてる一途が変える風の向き
明日ひらく蕾ゆつくり匂い出す

富田林市 中 井 ア キ

昔むかしの夢を追うてる散歩道
残り時間ギリギリと攻めてくる
ため息のたんびに洩れる赤い嘘
背のびする癖に拍手をするわたし
感謝する時間殖やして老いてゆく

富田林市 中 村 恵

幸せをいくつ握っただろ母は
ときどきは家族の席を替えてみる
いつも背を向ける女神が振り向いた
人間の宴は果てしなく続く
研ぎ澄ました五感夜明けを遠くする

富田林市 山野寿之

仏壇の遠い所で遺産分け
ほかほかの飯は地の恩天の恩
鳴き切った蟬の軀は蟻の糧
老い二人ときめく孫の参観日
マンシヨンの秋刀魚はご法度の煙

寝屋川市 籠島恵子

カギカツコちよつと一息ついている
ジャングルジムのてっぺんもてっぺんだ
そうですよネエと呟く一行詩
カンパンを試食おいしくなっている
黙っている方から煙立っている

寝屋川市 伊達郁夫

コスモスが秋の命を遊ばせる
茶碗欠け時空の影に包まれる
逆上り土の温さを知る素足
にわか雨酒の辛さが腑に沁みる
無機質の風が運んだ枯れ落葉

寝屋川市 富山ルイ子

肥料やり水やり大地ありがたい
道で会う知らぬ人にも野菜あげ
脱力感日がな一日寝てばかり
脱力感としても何も食べられぬ
塔まつり年に一度の友に逢う

寝屋川市 平松かすみ

葬儀社と予約してから五六年
パパラッチされても強いのはおんな
好物も仏は食えずお裾分け
洗髪の後手櫛で足りている
湿っぽいニュース チャンネル変えましょう

寝屋川市 森茜

あの人がここに来たらしシャネルの香
ため息の貌がベッドにもぐっている
検温を忘れる快復の兆し
ケアレミスさてと丹田引き締める
黒電話あなたも去っていった里

羽曳野市 安芸田泰子

選挙戦無沙汰の友が顔を見せ
秋夜長老眼鏡の度が進む
豊作へ雀の会話弾んでる
帰省子を起こさぬように朝支度
病状は変らぬままの水中花

羽曳野市 宇都宮ちづる

女子会の次の予定は美人の湯
満天の星に見つけたはくちよう座
庭の花床に一輪凜とする
十歳で将棋バスケット釣りが趣味
漏れていたでは済まぬ原発の水

羽曳野市 徳山みつこ

秋深しデクレッシェンド虫の声

ダメですよほえむ妻の五寸釘

夜明けのスキヤット戦は好まない

余命表をアハハウフと食べている

落日に抱かれるたまゆらの命

羽曳野市 中川ひろ介

律義な国に擬装改竄似合わない

新蕎麦で新酒ちびちびやる至福

無人駅コスモス送る登山道

園児掘る歓喜顔よりデカイ芋

お隣の柿がたわわに塀を越す

羽曳野市 永田章司

近未来AI指示を人が受け

一強の驕りの弛み此所彼所

凶星には動揺するが記憶なし

満月に盃を傾け平和良し

墓守るお年寄だけ過疎の村

羽曳野市 仲谷真

新同人川柳祭り初参加

初参加新同人で入選す

日めくりがどんどんやせていく

総選挙自民大敗見えている

社会党復活したよ応援す

羽曳野市 藤原大子

誉め言葉人づて聞くも悪くない

頑張れる気がして赤いバッグ買う

咄嗟だった本音がポロリ落ちていた

わがまを言える夫がいてくれる

遊び足りぬ子のように雨の雀たち

羽曳野市 三好専平

生きるためあれこれ神を乗り換える

玄関を出ると行き先みな忘れ

曼珠沙華明日香に卑弥呼やってくる

鼻先で笑って殺す芸達者

早朝の半額弁当買いにゆく

羽曳野市 吉村久仁雄

分刻みで働く父を子は知らず

その時に備え覚悟もして夫婦

「ふるさと」を歌うかすかな国訛り

凶星指されて記憶が失せる官

城跡に雑兵の血がまだ匂い

東大阪市 北村賢子

健康と過信した鼻圧し折られ

ストレスは飽和状態風邪二十日

先を争い金魚に餌をやる二人

野良猫も居ず岩合さんの猫歩き

慰めた筈思い出させた悔いがある

東大阪市 佐々木 満 作

誇り持つ師の教訓を糧として
淡々と余生を過ごす趣味の道
名月の今宵は恋の詩を詠む
ひと呼吸間を置き難題に挑む
テレビ欄食番組が増えて秋

枚方市 海老池 洋

アメリカ第一日本守ると限らない
AIに投了近くなるヒト科
変なスーブ体によいと飲まされる
甘口辛口あって人生面白い
ひっそりと私も生きる昼の月

枚方市 小林 わ こ

免許返納老いにあっさり負けました
ダイエツトすっかり友を見違える
トントントン免疫力を刺激する
声潜めよう小鬼ただいま寝たところ
知らず知らず本音を言ってから孤独

枚方市 丹後屋 肇

でこばこ坂大揺れになるイヤリング
背信の過去が重たい寄席通い
おしゃれ着の犬に引かれるナツパ服
Jアラート蒲団に潜る外はない
難民の合流排除する掟

枚方市 寺 川 弘 一

あの世のことは経験せぬとわからない
後悔をしない人生ありますか
鼻歌はわたし音痴とわかるまい
十五夜は月見団子を食べて見る
幸せの数は繰り返して数え

枚方市 二 宮 山 久

窓越しに満月ながめ長い風呂
不器用に生きて人生友がいる
人はみな勝手なことを言いたがる
紅葉狩り見頃を待ちてハイキング
コスモスが揺れて広げる手弁当

枚方市 二 宮 紫 鳳

一輪の花に元気をもらう朝
ねぎらいの一言添えてにぎり飯
一呼吸おいて断る電話口
失敗が無駄でなかった趣味の道
カラオケが好きで長寿の響く声

枚方市 藤 村 亜 成

雑念に言葉の塵が舞っている
老木の未だ息づいている木肌
仮想現実で耽っていた少年期
懐淋し 月が冴えわたる
恋する人の瑞々しさに老いはなし

枚方市 山口 弘委智

吾が財は朝の青空妻の微笑
慰めが傷の薄皮削り取る
句のヒントわが行く処座す処
励むほど句の頂点は遠ざかる
刻む音母の愛情丸写し

藤井寺市 伊藤 アヤ子

畦道に凜と咲いてる彼岸花
あの人へ香り新米届けたい
子供から大人まで引くだんじりや
たのしいな芋掘りをする園児たち
さわやかな秋にぎやかに運動会

藤井寺市 太田 扶美代

手の甲で涙をふいた秋のはじまり
いつ死んでもいいなと思う波の音
まだ元氣人愛したり憎んだり
青ブドウ一度は通る反抗期
おまじないもう大丈夫だいじょうぶ

藤井寺市 鈴木 いさお

ご安心なさいと魔女が背をさする
ヒーローになった夜から不眠症
健康でいてこそ値打ちある長寿
ピカソよりモディリアニより北斎だ
鞭入れて入れて登らん老いの坂

藤井寺市 田付 絹枝

何時^{いつ}からが余生ですかと旅仲間
乱世も素直に笑う曼珠沙華
平成の子育てを知る待合室
待合室一家総出の賑やかさ
パパ抱っこママはスマホでうふふふ

藤井寺市 増井 ヨシ枝

金木犀香り亡母に会った朝
美しい人だイケメンの女装
何も言えず唯手を振って別れたね
子等の声ワイワイ若い町内だ
秋明菊見事ですよと亡母よぶ

藤井寺市 吉田 喜代子

伸び盛りの夏草あつた私にも
夕焼けの自然が醸す美しさ
風匂う旧友を待つ無人駅
舗装道思い出消えた通学路
川柳を一捻りしてまた眠る

藤井寺市 若松 雅枝

選挙戦慌てて読んだ政策書
決断がつかず黙って月拝む
満月に心癒されよく眠る
散歩だけパパが受け持つ犬の世話
枝先に蟬の抜け殻揺れていた

松原市 森 松 まつお

ほろ酔いの足に我が家が遠すぎる
新しい飲み屋見つけてマーキング
久々のミナミで人の波に酔う
ワンテンポ遅れて妻が笑いだす
秋夜長眠る力も落ちている

箕面市 大 浦 初 音

主婦という自由ありそでない立場
親の思いどっさり入れた荷が届く
空気よめず浮いてしまった影法師
短縮語孫との会話かみ合わず
いつかくるお一人様へ準備中

箕面市 酒 井 紀 華

着飾っても古稀の顔ですクラス会
どっぷりと古里訛やわらかい
すず虫と昔を語る長い夜
心の痛みそつと離して風になる
だんだんとゆるみはじめた靴の紐

箕面市 出 口 セツ子

インドネシアからの電話も近い声
ふけこまぬように着ている赤い服
セールスに生返事するときに無い
独りでは淋しがりやで寝つけない
傷ついた時ほど笑いパワー湧く

箕面市 広 島 巴 子

すすき生け月見の夫婦まだ枯れず
ちびっこは卒業と孫ブラモデル
選挙戦未来を託す器見る
シエルターを掘れば地下鉄走つてる
味覚の秋誘惑に腹九分十分

八尾市 寺 川 はじむ

孫来ると急に天使に変わる妻
当たり損ねが決勝点になる奇跡
体当たりすると難題蕩け出す
あの頃の天使の妻はセピア色
説得のつもり油に飛び火する

八尾市 村 上 ミツ子

昔からずっと髪型変えてない
覚えてもすぐ消えていく流行語
けんか買うほどへそくりがたまらない
あきらめることできりぬけられるかも
どの道通つても帰るのはわが家

八尾市 山 根 妙 子

行く秋を信貴山道の早もみじ
七五三神社もフォトも前倒し
吾亦紅雑草の中慎ましく
十五夜に月の砂漠を口ずさむ
朝の道またスニーカーに追い越され

大阪府 米澤 俣子

ふと思う今日は故郷の秋祭り
亡きひとの心残りか曼珠沙華
大らかに見える割には気が小さい
ナツメロに安らぎ貰うケアの午後
捨てきれぬ望み追いつつ朽ちてゆく

神戸市 上田 和宏

いつまでも一緒にいたいカレンダー
君の手に暖かさ知る愛を知る
断捨離はまだ身辺整理はちまちと
儉約は健康法と信じてる
句のいのち何と長寿であることか

神戸市 富永 恭子

良い事がありそう柿の実はたわわ
ノーマイク帽子真深に溝掃除
愛された事だけ記憶するノート
まびき葉の命戴く皮膚に血に
揺るぎないこの国作る黄金波

神戸市 能勢 利子

日記帳の私は少しすましてる
断捨離は業者に頼むことにしよ
さだまさし聞くと生まれる五七五
三食の時間きっちり守る老母
孫来るとぱっと明るくなる老母

神戸市 山口 光久

円満な家庭を護る床柱
わくわくと出掛けて行つた再会日
手間暇をかけた料理へ味音痴
がらくたを弄る無心になっている
いいひと日でしたと感謝する夕陽

神戸市 山口 美穂

秋刀魚とも言えぬ高値を言う夕餉
秋冷えに重ね着をして今朝凌ぐ
不注意の風邪秋空に笑われる
むつかしい話は歳が受けつけぬ
日本丸の反戦反核閣にいる

神戸市 山崎 武彦

ずるずると伸ばしても来る締切日
青い鳥探しに花野までぶらり
手探りのままで来ました喜寿の坂
わたくしのもしにも記す尊厳死
点滴の管が絡んでくる不安

明石市 糀谷 和郎

恋の続き栞挟んだところから
欠伸する姿はありのままだの君
急ぐなと私の中の笛が鳴る
リセットができたなら君の指止まる
浅漬けのシャキッと今日の覇氣もらう

芦屋市 黒田 能子

行き違い無口のままの二人です
時として子の言い分も一利あり
あつぱれだ反対の手を高高と
楽しくてしばらく時を止めました
同病の互いに今をさらけ出す

尼崎市 市坪 武臣

おはようと仏間に響くリンの音
同郷の先輩と呑む有難み
深海魚見上げてみたい青い空
歩かねば悲鳴を上げる膝小僧
男には出来ない長い立ち話

尼崎市 永田 紀恵

アクセルにブレーキになり共白髪
磨かれて目鼻が消えた道祖神
はずかしや表舞台に出たウンコ
教えます防空頭巾のつくり方
老いの坂すぐに出てくるありがとう

尼崎市 藤井 宏造

無人販売異かと思ひ迎ひ見る
不器用でカステネットを持たされる
若いなあ言われて役をさせられる
故郷の燃える夕日に会いに行く
手に入れた自由についてきた孤独

尼崎市 藤田 雪菜

リハビリに繋がる散歩惜しまない
スーパ―も駅も我が家の下にある
活字好き心に余裕生まれます
秋天を薔のままで立ち枯れる
おばあちゃんに旅の醍醐味教えられ

加西市 金川 宣子

下り坂注意喚起の軋む足
素直さが出てきたような丸い石
まだまだと心磨きに趣味広げ
口論の苦い後味消えぬまま
ひよつとしてひよつとしたらと弾む胸

川西市 山口 不動

むぎわらを野球帽子に変えて秋
お月見の飾りは遠くなりけり
ふり返るむこうで秋もふり返る
稲刈りの授業があると登校す
秋冷や鯉の出る日と隠れる日

川西市 大坪 一徳

人生をとつくに降りた俺の顔
乗り越えた試験が夫婦強くする
国会に嘘発見機置きましよう
記憶力無いなら議員辞めるべし
全没を免れやつと出る笑顔

川西市 岡 一心

王よりもかわゆい駒を抱え込み
歩の心たしかな一歩たゆみなく
何事もプラス思考で絶好調
ミサイルは打上げ花火自己欺瞞
立ち並ぶ屋並は古し城下町

篠山市 酒井 健二

ため息を見知らぬ方に覗かれる
煩惱を隠し巷をホロホロと
まあエエか缶チューハイで腹おさめ
清濁を飲むといつでも下痢をする
グルメとか卒業もして枯れて旅

篠山市 酒井 真由

サキソフォン少年の意志揺るぎなし
ハーブ奏でて乙女寂びゆく
五線譜にわが来し方の愛の詩
気色ばんでみてもどうにもならぬこと
君憶う遠き冬木をみるごとし

三田市 足立 つな子

遠慮ない阿吽の呼吸夫婦仲
孝行したつもりになって墓参り
お供えは人間さまの好きな品
不可抗力まくらを高く休めない
円満の思いはみんな一緒です

三田市 上垣 キヨミ

ヒザ掛けの嫁の手編みが暖かい
落葉掃く老いにお礼のことは降る
添えた手に小春日優し車椅子
人生のネジ締め直す八十路坂
テレビ消し五感ゆっくり休ませる

三田市 上田 ひとみ

結論は出ていたのではなかったか
本当の私ではないこの鏡
言い勝って荒れたころの音がする
淋しくて泣いたりなんかするものか
大切にしたいあなたとこの時間

三田市 尾崎 一子

芒に団子里の十五夜母偲ぶ
うっかりと吐いた言葉がうずき出す
泣いて笑うこの世が好きでたまらない
泣き笑う流す涙が美しい
転けるな呆けるなころははまだ青い

三田市 久保田 千代

ひたむきに曆重ねて今朝の水
無理に無理重ねても意地通す人
笑てたらいつかいいことあるさかい
健康のためと言い訳して出掛け
反省が浮き沈みして終い風呂

土瓶蒸し香りも嗅げず冬迎え
三田市 多田 雅尚

歳聞かれ何時も五歳は鯖をよむ
予定日に産声あげる律儀な児
10年前髪もふさふさパスポート
体育の日テレビ見ながらごろ寝する

三田市 谷口 修平

検診の結果出るまで止めた酒
新人のレジ段々と列が伸び
ずばずばと歯に衣着せぬ三歳児
イケメンの方に傾く浮動票
治つても捨てるに惜しい風邪薬

三田市 野口 真桜子

会長は寄付金額で決めている
地を刺したクギは錆びぬと意地をはり
虫くいの背表紙に棲む鬼は老い
取りあえず辛抱強い花でいる
品の良い棘がときどき痛む秋

三田市 福田 好文

足腰が紅葉マーク付けたがる
トランプの指さす先がきな臭い
エアコンのオンには妻の許可が要る
新しい靴が教える足の癖
古日記多くの人に恩がある

晩ごはんだんだん早くなる秋だ
三田市 堀 正和

孫からのハガキひらかな ありがとう
ほとんどが昭和のままの僕の部屋
遅れずに電車が来ると言う平和
参加賞ないので今日は手ぶらです

三田市 村田 博

イレギュラー何度苦汁を嘗めたやろ
負け癖が直らぬすぐに諦める
シナリオを途中で変えちゃいけません
駄洒落では胡魔化かせまへんアハハハ
獲れ過ぎた野菜嫁入り先がない

高砂市 松尾 柳右子

杖ついて頑張る男女高齢化
娘達頼れる日々の有りがたく
デイサービス不自由な手足助けられ
グループの似た者同士馬があう
明日を向き希望を抱いている独居

宝塚市 田中 章子

芯だけは見失わないよう生きる
時間かけ完熟目指すわたしです
ミスもします許し許されて夫婦
十本の指動き出す鶴を折る
フレンチを二時間かけて食べますか

宝塚市 丸山孔一

同意書と言われ治療を考える
演歌です月に二曲はマスターす
意地なのか信号隠す夾竹桃
ミサイルの殻で埋まるか日本海
付度は常識ですと平社員

西宮市 秋元てる

年齢の割にが何時も付きまとう
暇だから寝て居るのだと思っていた
首ったけそんな素振りも見せて置く
思い出は時の流れに色を増す
今一度恋に身を灼く蟬のうた

西宮市 緒方美津子

九十五母は五輪を視野におく
窓ガラス磨くと秋がこんにちは
不法投棄に睨みきかせて道祖神
毒舌も忠告ならばいただこう
臥す母に障子を少しあけておく

西宮市 亀岡哲子

どうせなら幸せそうな顔で老い
女一人越えねばならぬ百の坂
級長で出世頭でエライ人
若い日の言葉で話しませんか
情念の句は卒業をして小春

西宮市 福島弘子

二学期へ元気な声の小麦色
玄関に腹ペコ猫が並んでる
アルバムを開けば昭和輝いて
栗ごはん元気をもらう隣から
「日本食」老母の煮物の目分量

西脇市 七反田順子

鮭帰るふるさとがある由良川よ
時として子の優しさに安堵する
山車の意気の強さよ男はん
子規の句が浸みいる四時の深夜便
忘れ物よくしますねと認めあい

姫路市 古川奮水

瓶叩きビールに気合掛けて抜く
柿干せば鎮守の森は秋祭
妻徘徊探した頃がなつかしい
朝寝して今更自虐の事もなし
奈良漬が土産旅先まで言わぬ

南あわじ市 萩原狸月

草原に丹頂が居てバス徐行
鹿を見てきたきつね見て熊期待
国後が見えて国境線見えず
二人目を生んで移住者根を下ろし
江戸の風わが選挙区に届かない

奈良市 阿部 紀子

瀬戸の町窯元巡り一万歩

瀬戸焼のグラタン皿を孫が買い

グラタンが出来た写メール美味しそう

藤井四段突然スター瀬戸の町

墓じまい増え一面が白砂に

奈良市 大久保 眞澄

つい並んでしまうタコ焼き焼く匂い

いち早くりんごをもいだのは嵐

徘徊は居場所探しているんだね

自動ブレーキこれでボケても大丈夫

白票に決める卑怯で強い意志

奈良市 加門 萌子

本気出し見だしたら終わったドラマ

中島みゆきの主題歌誕生日に所望

台風も通過したのに政治闘

何てことついたり離れたり政界

増税をしても年寄りには使わん

奈良市 高橋 敬子

夕暮れの穂高が見てる露天風呂

白熱球に昭和の茶の間温みもち

起きぬけの緑茶体をしゃんとさせ

豪華客船見に来て客を眺めてる

施設やて聞くだけでドキッ同じ歳

奈良市 辻内 げんえい

妻旅行今日から三日自由人

やはり妻痛いところを突いてくる

また僕が含まれてない家族会

顔かたち四角いけれど丸ハート

目覚しより早く起こしたJアラート

奈良市 米田 恭昌

老妻はまだ白いエプロンよく似合う

アジアは亜細亜過去の悪夢がよみがえる

日本の未来を憂う小鹿の目

秋空に響く太鼓と走る鹿(鹿の角きり 二句)

神鹿を追いつ込む勢子の男伊達

生駒市 飛 永ふりこ

秋掬う腑抜けの我にぎよつとする

熱燗にぼとりぼとりと情が浸む

まず添うてそれで立ち位置計るのも

椎の実がコツンと叱る怠け癖

ヨイドン実りの秋はスニーカー

香芝市 大内 朝子

人生の迷路に亡母の道標

満月へしばしわたしはかぐや姫

上向いて歩けるけと天の声

飯の世にしてはいろいろある試練

精一杯日日慈しむ終の章

桜井市 安土理恵

ややこしい話は少し酔うてから
錯覚と誤解でまとまった話
女盛りねムラサキのフレアスカート
なりゆきで来た道後悔が少し
口火切ればきつと別れることになる

奈良県 安福和夫

徳利を抱いてあの世へ行くそう
年ごとに仲間が減って泣き上戸
飲み過ぎを言い訳にする稀な国
下戸ゆえの酒での苦勞誰が知る
アル中の自覚ない人世に溢れ

奈良県 谷川 憲

古代道稔る稲穂に彼岸花
知らぬ土地コンビニの灯にほつと
老犬といたわりあつて散歩する
ミスが増え手指し確認のハンドル
寝てたのに降車駅では目覚めはる

奈良県 中原 比呂志

溜め込んだ噂消し去る十二月
神様が身近古都に住みなれて
篝火のこれから先は新年へ
医療費の多出家計簿も病んで
占いが見事はずれて締めくくる

奈良県 渡辺 富子

塩満ちて明日へ向かつているやる気
ゆれ動く想いを抱いて逢いに行く
枯れていく記憶のあなた母の笑み
淋しさと向かい合う空に雲ひとつ
まっさらな朝がにっこり待っている

和歌山市 磯部 義雄

揺れ動く心鎮めた蝸牛
病み上がり妻念入りにする化粧
婚活の孫の心が揺れ動く
人と言う字そのものの孫夫婦
裾野から燃え広がっている紅葉

和歌山市 上田 紀子

野仏の隣に咲いて拝まれる
コスモスが人恋う形揺れて咲く
難しい言葉はよそうありがとう
鳳仙花弾けてからのもの想い
まず自分変える世間の眼も変わる

和歌山市 喜田 准一

夜明けまで飲んで昼まで二日酔い
先生に抱かれて泣いた夜もある
気の弱い男でほんろうされて居る
人生に判断ミスは二度三度
政権の余命数えて指を折る

和歌山市 楠見章子

以心伝心亡夫と秋をくみかわす
うっかりを確かめている日暮れどき
いわし雲何を迷っていたのだろ
ひと言が素直に聞けた風清か
茜雲岬まわりのバスに乗り

和歌山市 坂部紀久子

五六品並べて朝の一人膳
米寿まであと一息の身を癒す
孫という嵐が去って森の中
真つすぐ天向いて祈りの曼珠沙華
一番の敵です味方です自分

和歌山市 武本碧

運動は二の次おしゃべりに夢中
物好きと言われようとマイウエイ
他人には立ち入らせない親子井
好き勝手言ってるうちはまだひよこ
見た目ほど気楽ではない丸い顔

和歌山市 土屋起世子

お裾分けはっこりさせる栗ごはん
もう逢わぬ決めてすつきり天高く
母さんの寝息で元氣湧くと言う
茜雲あした履く靴決めている
甘えると私が溶けてしまいたいそう

和歌山市 福井菜摘

ゆとりある暮らし笑いの幅も出来
花を愛でいま穏やかに生きている
子の成長くつ下消えたイブの夜
この一年振りかえりつつ聴く第九
成るようになって静かな晦日そば

和歌山市 堀富美子

幸せと云われ頷くためらわず
最後かも柳句でしめた子の門出
いっぱい土産話で逝くつもり
独り居が蝶になつて今日もとど
孤独だと云えば私の負けになる

和歌山市 松原寿子

いつかする嬉しい日々の倍返し
その時は正座で本音聞くとする
言い訳を伏せて自分を振り返る
運命の壁なのだろう負けられぬ
方言で会話ストレス飛んでいく

岩出市 藤原ほのか

しがらみももしもの時は役に立つ
高らかに歌えば心澄み渡る
私を私らしい歌にする
核兵器ブレイキかける民の声
時間だよ背を押してる母の声

海南省 小谷小雪

紀の川市 楠原富香

蚊一匹まといつてくるよしよし
蟬合唱団も解散している

せめてものロマンの欠片拾う秋

大いなる野望か空へ蔓からむ

黄昏に祈るあなたの御健勝

海南省 堂上泰女

通販が届き断捨離引き伸ばす

栗御飯賞味天下の秋だなあ

美しい夕陽あなたを呼びにいく

北の国へ見せてやりたい平和像

生きてゆく方程式が解け暮れる

紀の川市 宇野幹子

三分粥食してくれた母を抱く

嫁がせて居間に心に寒い穴

二枚貝いつか別れが待っている

頂点の椅子に乾いた風が吹く

万歩計使い果たして風になる

紀の川市 北山絹子

実りの秋へ案山子の鼻も高くなり

雑草のような男に成り給え

ストレスが溜まりだんだん太り出す

ささやかなときめき紅の色を変え

よく笑う嫁で家族がほっとする

貧しいがいつも笑顔が横にある
真実の声を拾った多数決

スカウトの目を気にしない草野球

母を終え妻を終えての仕舞風呂

祝杯の底に渦巻く美辞麗句

紀の川市 辻内次根

切り花が売れる日本の彼岸前

残されているのは針のない時計

修正をして雨音を聞いている

一息をついて感謝をする時間

メモ帳に鉛筆今日が無事終わる

紀の川市 山東日出男

魚河岸にてんやわんやの夜が明ける

ロボットにしんどいことは任せてる

報われぬことを承知でする努力

惚れ惚れとする夕陽まる呑みにする

風下に立つてタバコに火をつける

田辺市 岡本昇

スマートに有り金使いたい老後

大器晩成だから時々鯖を読む

回り道あって人生リフレッシュ

米作り父の足跡踏みながら

遠雷が耳擦ってよい午睡

橋本市 石田隆彦

時時はわが行動に苦笑い
家族の輪つくづく思う男めし
夏バテの脳に激辛調味料
年年と疲労濃くなる畑仕事
人生の余白に無病への望み

鳥取市 池澤大鯨

真実を明かすとそこにつけ入られ
嘘などは吐きたくないので黙ってる
欠席理由嘘を言うのも面倒だ
追い込まれ言い訳したら真実に
次々に嘘を忘れて過去忘れ

鳥取市 奥田由美

美味しいからメカタの増加憂う秋
リストラの企業戦士に來ぬ移籍
ドライヤーも貸し借り嫌とハネムーン
食べるもの全てが旨く生かされる
掘りたての芋と団子とお月さま

鳥取市 加藤茶人

兄は兄どうあれ上座開けて待ち
スマホでは味も素っ気もない出会い
恥じらいがまだある老妻の風呂上がり
マイナスの先に必ずあるプラス
付度で出世が出来た良い時代

鳥取市 岸本宏章

レバナラが旨いまだまだ大丈夫
総活躍私も数に入れてある
鈍感を度胸いいねと誉められる
忘れられないようにたまにラッパ吹く
やさしさが欲しいな自動改札機

鳥取市 岸本孝子

身の丈を時々忘れ愚痴が出る
惚けも病も好きでなってるわけでない
増えることない財布だがつい数え
おれおれに肝は据わっていたつもり
男は度胸昔ばなしになりました

鳥取市 倉益一瑤

風紋と夕日砂丘のおもてなし
鬼瓦の弱音に母性くすぐられ
薄情におなりと風にささやかれ
作り話とつてもうまい雀たち
ふる里の山には秘密基地がある

鳥取市 坂本とも湖

生めよ増やせよ少子社会はこれからだ
デモ隊に木霊返ってこない基地
死ぬまではずっと笑顔で老いたいね
人間を試す悲劇は神が組む
歳だから今年は跳べぬ水溜まり

鳥取市 田 中 天 翔

玉音を昔話のように聞く
楽な方へ流されぬよう戒める
老いるのは愉快ブレーキ要りません
百歳までこの世の時間使いたい
いい知らせあつて風邪ひき自然治癒

鳥取市 棚 田 大

おお寒いあつたかい夏よかつたな
台風も俺を睨んで戒める
自己中のおいらに気付き戒める
皆メール会話ストップ時代かな
コーヒーを漢字で書いて睨まれる

鳥取市 谷 口 回 春 子

シベリアの大地に眠る父の骨
胸元で善意の証しそつと揺れ
妻の戒め夫を磨く砥石です
買い出しは昔闇市今道の駅
山陰線瑞風走り全国区

鳥取市 永 原 昌 鼓

ユニバース美肌自慢の揃い踏み
赤ちゃんの美肌羨むお年頃
親馬鹿と知りつつ孫の肩を持ち
政治家も芸能人も親譲り
少しだけある方がいい向かい風

鳥取市 中 村 金 祥

大嵐貧富構わず通り抜け
茶飯事にしてはならない恐怖心
憂鬱の訳はコーヒー切れたから
野良仕事頑張る美肌黒光り
ユーモアが薬味井戸端盛り上がり

鳥取市 夏 目 一 粹

今日も無事終わるとこまで続くやら
アナログの恋がもとめているスリル
窓際の椅子にも慣れてよく眠る
記憶していたのに忘れゆく齡
たつぷりと注いだ愛が戻らない

鳥取市 平 尾 菜 美

どんびしゃの薬器の自画自賛
粗相なく包む器の値が高い
どんぶりの太っ腹には参ります
受け売りの自慢あなたと笑いこけ
死の恐怖信じるお経読み散らし

鳥取市 福 西 茶 子

どちらにも一理中立する卑怯
エネルギーくれる夕日とバラの赤
四歳に負けたカルタもトランプも
優しさで度胸は修羅を踏んでから
不発弾くすぶったままもう師走

鳥取市 前田 楓花

アジ秋刀魚高くなっても食べている

さつま芋南瓜栗食べ尽くす秋

三角四角丸にならないのが個性

いい朝だ鼻歌までも透き通る

自分だけ生き残りたい北の核

鳥取市 山下 凱柳

平均寿命百歳なるか近未来

過疎進み鹿に猪熊も出る

奇麗ですね言葉の裏にある嫉妬

大義ない解散総理何故するか

人柄に触れてぞっこん一目ぼれ

鳥取市 吉田 孔美子

どうするか丸坊主明日は面接

どうするって一人で産んだ訳じゃない

可愛いねばかり賢いはなかった

テレビならもちっと賢く喋ってよ

子は産めぬ記念果実を植えまくる

鳥取市 吉田 弘子

満杯にやがてなりそう涙壺

遺された日記通りに秋野菜

残高と余命贅沢許されぬ

心技体節目感じる八十路坂

災害地初めて知る市町村名

鳥取市 両川 無限

大粒の涙はきつと虹になる

未完の絵夢追人のまま老いる

ブレーキがゆるみ涙が止まらない

ひと休みしようか虹が消えるまで

情けなどいらぬ冬木立の気迫

倉吉市 猪川 由美子

ジコチュー解散安倍氏どこまで逃げられる

価値観の違う人とは暮らせない

マイペース傍目気にせず生きてきた

人は死で疎遠身内の縁戻す

マイお墓川柳意匠モチーフよ

倉吉市 山中 康子

四世代ピンクに染めるひい孫よ

顔色に動じぬ凡てマイペース

食べて寝て歩き足らぬか骨密度

杖無しで歩くわたしの当たり前

手を借りず身仕度できるありがたさ

米子市 後藤 宏之

二時間が孫と葉の話です

肩のこる話は終わりやつと酒

頭の上とおるだけでもこわいです

伝説の土曜夜市とアーケード

夢ばかり追って片づけ出来ぬまま

米子市 後藤 美恵子

帰省の子に古里の味てんこ盛り
塩か生か秋刀魚の好みある夕餉
城の維持年金減でお手上げだ
雨ざらしの表札哀れ朽ちた家
笑い皺増えてきれいな顔になる

米子市 竹村 紀の治

微笑んでいるから辛いツーショット

適量のセンサー騙し二日酔い
妄想とお酒で今日を締め括る
安息の椅子がときどき夢の中
晩酌の催促にくる腹の虫

米子市 中原 章子

初さんま高くて通り過ぎてゆく
冷凍庫手抜き品の詰めておく
百歳に手の届く人増えている
マイナンバー身分証明都合よい
愛着のコップがこわれ未練増す

米子市 吉田 陽子

七十余年何が効いたか生きている
居るだけでいい妻になどなれません
栗むいて置いてあるので栗御飯
高齢者手厚く監視されている
新人の獲得に出るかごめの輪

鳥取県 石谷 美恵子

死ぬるまで畑と仲良く汗をかく
ボケ防止などと娘に使われる
フレッシュヤー喉の渇きが輪をかける
半分は私にもあるボケチェック
雑草の中へ素直なマンジュシヤゲ

鳥取県 斉尾 くにこ

絵手紙にポストの口がほころんだ
ひとりだけ時差があります笑い声
知恵出すか時間を出すか金出すか
落ち着けと味方の声が落ちてきた
お返事は少し離れて考える

鳥取県 竹信 照彦

朝日背に出勤夕日背に帰宅
骨のない労組トップ会談する
元組合員も退職し白髪
趣味に手を染めても根性曲がらない
朝日浴び夕陽の沈む海を見る

鳥取県 西谷 悦子

五十年やさしい夫ありがとう
恋という字が遠のいた老いたねえ
身心にやる気をもらう顔洗う
移動する白い雲何考える
世の流れ年取る毎に難しく

鳥取県 細田裕花

雨降つて突然秋がやつて来た

風の音秋を配達して淋し

ゆるんでる体にハッパかける秋

収穫の秋は二人の歩が揃う

ドリンクバー女の熱い舌冷やす

鳥取県 松川行男

秋なすび嫁に食わせと言ひ伝え

大根を間引いて食わず捨てられる

人に分けニンニク明日は植えようか

頼るのは戦前習ったいもの苗

ニユース見て値上げの油買いに行く

鳥取県 山下節子

足の裏土の感触忘れてる

買って来た土で花やら野菜やら

どじ踏んだ悔いトラウマになっている

道それた子を戒める親も泣く

いじむじと家業継ぐ子に育てあげ

松江市 川本 畔

チラホラと秋の叙勲の風が吹く

ウメモドキ疲れましたと裏返る

含み笑いわたしの背を逆なでる

ほんやりと浮いているのも愛のうち

肉うどん幸せ色の音たてて

松江市 松本文子

花束を上げるに邪魔なネックレス

さよならと聞こえたようで振り返る

まだ生きるつもりママチャリ修理して

仮の世と実感しない生ビール

何しようか雑草を掻き分けて

出雲市 伊藤玲子

数多の出会い大切にしてお蔭様

ヒト科の特権笑うこと忘れずに

長男も還暦絆太く絢う

俎板に潮の香満ちて祝ひ膳

ハッピーな気分になせる秋の彩

出雲市 小白金房子

里山の風情こがねの綾をおる

風は秋馬頭観音祀る庭

角砂糖今日の疲れがとけてくる

嘘つかぬくらしへ今日が動き出す

わたくしの迷い打ち消す波の音

出雲市 竹治 ちかし

止むをえぬことは運命と切り捨てて

老いを主張する肩腰を叱咤する

生き甲斐を今日もくすぐる好奇心

生命線伸ばしてくれた良い出会い

世の邪念入れると消えていた品位

雲南市 菅田 かつ子

紅葉狩り背なを伸ばしているつもり
じいちゃんの耳は都合で聞いてない
しっかりとした嫁さんの部下になり
過疎のバス一人を待っていてくれる
元気かね元気で通院しています

雲南市 松本 昌

人間の良さ酒があり詩があり
酒の味知らぬ家系で恙なし
通販で買うよろこびや過疎の町
今生きる父を越えたと手を合わす
齒の痛み初めて知った八十路

島根県 伊藤 寿美

ポケットに明日のジョーを休ませる
頑張った昔を喋るネギボウズ
少しずつ煮こぼしている自己嫌悪
皇帝タリや支える茎の男前
認知症のルポ見て我が身つまされる

岡山市 工藤 千代子

わたくしの祭りは髪を染めてから
吠えること忘れた犬が欠伸する
味方ならたくさんいます風も止む
人形を眠らせ涙すぐ乾く
矢印に逆らう癖はもうやめる

岡山市 丹下 凱夫

壇蜜とハゲをしたのは夢でした
一日中掛けて思案をする下五
木犀の香と喪中ハガキが届く
少しずつずれてピツタリのふたり
秋風が吹いてるマネキンの股間

岡山市 藤成 操江

強引に加齢のせいにするカルテ
プービーの椅子なんとなくいい心地
考えぬ時を楽しむ秋夜長
息子への宛名ばかりがあるポスト
寺社詣で階段見上げ諦める

岡山市 前田 恵美子

氏神様に不安あずけて前を向く
鱗雲そろそろ種を撒けと言う
夫と手をつなぐ坂道お遍路さん
もの忘れ母の遺伝子でできたか
川柳の本ができたと抱きしめる

笠岡市 藤井 智史

バラバラな日々を手料理にて結ぶ
砂場からわたしの夢は始まった
満面の笑みは時計を止めている
わたくしを絞っただしは薄すぎる
トンネルを掘って未来と握手する

岡山県 池田 たか子

メモをして安心したが見当たらず
ひとときの静けさ欲しい耳すだく
木犀が祭りまつりと急き立てる
嬾やかにゆれるコスモス意地つ張り
下手がいい一途な虫の子守歌

岡山県 高岡 茂子

十六夜の誘いを受けて行く茶会
床の間で主役はつてる山野草
羅針盤狂つてきてる日本丸
生きている証に送る当地梨
友と体調きづかい合つてはげまして

岡山県 田中 恵

遠い日を追えば転がる泥団子
朝昼晩秋茄子食べて黒びかり
年金に尻尾預けている命
知恵袋母の小言も詰めている
梵鐘を合図に仕事切り上げる

岡山県 紫 しめの

太古より女は自分ファースト党
ポケットにアメと言ひ訳入れてある
コンビニの弁当全種制覇する
遠雷か不満か低く鳴っている
老眼鏡かけても見えぬ裏表

岡山県 山縣 のぶ子

大声の子とはらはらのミュージアム
腹八分がいいか満腹がいいか
天と地も実りの秋に満たされる
椰子の実一つに馳せている思い
晩鐘のミレーさながら国分寺

竹原市 岩本 笑子

よく見ればカマキリじつと耐えている
薄衣の軽さへ秋はすぐそこに
それぞれに求婚虫のコーラスよ
三度目の手術痛いと言わぬ子よ
アメリカの孫から似顔絵送られて

岩国市 上村 夢香

新しいページ始まる今朝の空
手に汗を握る日々いつまで続く
長崎に生きる世界のイシグロ氏
パワフルな命に笑みが止まらない
初恋は小さく燃えてまだ独り

宇部市 平田 実男

入院が変えた私の人生譜
権力を握り自分を見失う
七回忌仏へそっぽ向いて飲み
無記名と記名こんなに差が生まれ
トランプのスーツ鎧が見え隠れ

下松市 有海 静枝

長年の憎しみすらも消す惨事
進化するオレオレ詐欺と知恵比べ
胸中はさて置き握手する笑顔
責められて空気が薄くなつてゆく
ややこしい事はさて置き飯仕度

防府市 坂本 加代

夢を追う情熱続く背伸びして
カラオケで喉と腹筋鍛えます
この世からふっと消えても探さずに
崖っぷち覗いたあの日セピア色
夢に出て愛しているか問いかける

東かがわ市 川崎 ひかり

おひとりの量にも慣れた一周忌
無理するな今日も亡夫の声がある
バグだつて飼えば愛着もてる顔
地方紙に秋をくるんで娘に送る
病室に少しいびつな紙の鶴

松山市 栗田 忠士

力には力を笑うカタツムリ
丸い背引きずつっている影法師
AIに愛の涙は分かるまい
反骨に生きた親父の骨拾う
立ち読みも許した書店また消える

松山市 古手川 光

永田劇場見てストレスを溜めている
憂さ晴らし水戸黄門を今日も見
ゆつたりのでんでん虫に嗤われる
達筆で書くといい句に見えてくる
年賀状今年も出せる有難さ

松山市 宮尾 みのり

変わらねば割り切らねばとネギ刻む
思春期と対峙へ味方電子辞書
用件のみ互いに生きているメール
喪の家を静かに御興通り過ぎ
別格にされてそのうちひとりぼち

松山市 柳田 かおる

収穫はいっぱいあった塔まつり
北斎ブルーへ大行列の渦の中
きれいごとに思えてしまうわたしの句
ライバルが眩しい負けていられない
そのつもり無いのに指は削除キー

西予市 黒田 茂代

家事は怠けていても旅行は忘れない
日御崎灯台真白群青色の海
ウミネコ一羽も居ない経島の初秋
灯台階段無理岩を噛む波を見る
睡眠薬要らない幸せと夢に

高知県 小澤幸泉

秋空に希望をさがす老いの窓
晩秋の道を友逝く振り向かず
神の国へ古い上着を脱ぎ捨てて
若者の胸にしっかりと愛の羽根
菊人形に初恋のひと見つけたり

北九州市 小松紀子

喜寿迎えわたくし色はまだ未完
気持ならまだまだ若い喜寿になる
テンションを上げて脳をだまして
出来ぬこと嘆いて得るものがない
お祭りの雰囲気が好きイカ焼きも

唐津市 坂本蜂朗

棺桶に片足入れて旅に出る
いにしへの祈りに倣う熊野道
酌むほどに本音が溢れ出る安堵
生き過ぎた証しのように飲む薬
恐ろしい鏡に写る朝の顔

唐津市 山口高明

傍聴の席で遺影と泣きくずれ
要らぬよに成って出てくる深仕舞い
諫めても訊く耳もたぬ北のドン
肩書きが消えたら唯の好々爺
絵手紙の温みほのほの胸に染む

熊本市 杉野羅天

サルヴァトーレが見える銀座の挙式
おとこの影無用今日の美味しい酒
ゆつくりと早一年が経つ焦り
引き潮に乗ろう波打ち際に立つ
宇宙へと我を誘いし曼珠沙華

沖縄県 森山文切

心臓の音に応援されている
上の子が寝言で嗤う僕の夢
簡単に憎いと言ってしまう鳩
味噌か醤油か日本武尊
みんなが賢かった卑弥呼の時代

札幌市 小沢淳

答弁につまると発すカタカナ語
法定を守ると全て遅くなる
譲られた席で老人らしくする
乗り越してハッと気が付きにが笑い
お宝がないかと覗く古本屋

弘前市 浅田隆樹

枕木の砂利にも秋の陽が映える
歩数計驚いている観光地
そば処三食そばとなりました
連れ合いが恋しい帰路の一人旅
名月が都市の明かりを愛でている

弘前市 稲見則彦

言いかけたその唇が震えてた
見覚えが全くないと言う鏡
穏やかな海だにつこり陽が沈む
女神のようなたおやかな岩木山
滑らぬよう転ばぬように今朝の雪

弘前市 岡本花匠

あれこれと語り笑福老夫婦
埒もない話に笑いふれあい日
気楽さを言って淋しさ言わぬ意地
津軽富士へ今年の感謝礼拝す
わがいのちみつめ感謝を良妻に

弘前市 今愁女

毎日が食事毎日スーパーへ
少しずつ身辺整理歩らぬ
自転車を通捨離車庫が少し空く
北の大将逆拉致すれば平和なり
抱きしめたい垣根に咲いた昼顔を

弘前市 高橋洋子

目先より足元にある智の泉
私の愚かさを知る古日記
旅に出る母の写真も道連れに
さっと出ぬ言葉に揺れる喉仏
百人百様夕日に今日を眠らせる

弘前市 福士慕情

大阪と津軽を結ぶ五七五
今は昔 新子 薫風 五楽庵
披講する三〇二名僕を見る
北斎展しゃきつと背筋伸びている
大阪が好き 遠野さん美籠さんがいる

青森県 松山芳生

ふるさとの山河にふれて旅終る
錯覚のようだ光つてくれません
ささやかに生きた旨いライスカレー
じわじわと傾いてゆく尾氈骨
錠剤をほくほくと光らせて

塩竈市 木田比呂朗

来年へ躊躇いもなく先送り
調理酒のつなぎにされた吟醸酒
目玉焼き黄身のいびつな日の不安
小銭入れふくらんで母思い出す
愚痴不満言わぬガラケーだけ味方

第163回 大阪川柳の会

日時 12月14日(木) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「はかない」矢沢 和女 △「深追い」本田 智彦
△「丸い」初代 正彦 △「数」森中恵美子
会費 1000円 欠席投句 12月13日まで 会員に限る
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦宛

川柳塔の

川柳讃歌

⑮

上方芸能評論家 木津川 計

恥ずかしさ捨てたら人間になれた

鴨 谷 瑠美子

永六輔さんは含羞の人だった。お父さんは輪をかけた恥ずかしがりだった。「夫と妻」でこう書く。「うちのおやじは、親子であることが耐えがたく恥ずかしく思ったりする。おやじとかお父さんとかいう付き合いは全くなくて、たとえば浅草で向こうからおやじが来るとするでしょう。すると向こうも「あつ、倅が来たな」と気がつく。すると次の横丁で必ずどつちかへ曲がつちゃう」。瑠美子さん、含羞の人は並の人間にならないのですね。

診療所くらいが丁度いい病氣

森 山 盛 桜

大抵の病人は「診療所くらいが丁度いい」訳をやはり永六輔さんが「病院に来る患者の、多いときは半分近くが薬局の薬のんで、ゆつくり寝てれば治るんです。そういう患者を相手にするから病院が混むんです。多いんです

よ、ただの寝不足で疲れている人が……。さらに、なぜ「診療所くらい」か。「死因ですけれどね。ホントのところは病院のなかの派閥によります」「二度目の大往生」。だから盛桜さん、死にたくなければ派閥のない診療所へ。

出る幕がまだありそうで生きている

竹 山 千賀子

「猫撫で声」や「猫舌」などのネコ言葉「面の皮が厚い」や「太っ腹」などのからだ言葉「同様に日本語が慣用句を量産していた上昇期、芝居言葉が一杯生まれた。「チョンの間」「早幕でやる」「のべつ幕なし」「大見得を切る」「間が悪い」「引つ込みがつかん」野次ることを「半畳を飛ばす」と言ったのは敷いている小さい座布団を下手な役者に投げたことから。千賀子さん、「出る幕がまだありそうで」よかったですね。終幕はまだまだ。

僕だつてテニスしました軽井沢

山 崎 武 彦

宮城まり子さんが帝劇へミュージカル「オリバー」を見に行った昔、劇場の係が教えてくれた。「お席は二階の正面、浩宮様のそばです」。ええーっ?と思つたが「まあいいわ、わたし、宮城だから」と。それが武彦さんだった。た、「まあええわ、おれ、山崎だから」と言えるか。お気の毒だがそばの席には座れない。

い。天皇は皇太子時代、軽井沢のテニスコートで美智子さんと出会った。武彦さんも軽井沢でテニスはしたが、風が頬を撫でただけ。

二番手の流した汗は語られぬ

三 浦 強 一

名作「沈黙」を書いた遠藤周作は講演でこう言った。「私は慶応の仏文科を二番で出ました。皆感心してシーンと聴いていると、「卒業したのは二人です」に拍手が起つた。つまりはビリを「二番」と言つたユーモアに皆は手を打つたのだ。こういう運のいい二番手は例外として、ことにスポーツの世界は0・01秒差で二番になつてもけつして語られることなく、一番が脚光を浴びる。強一さんも二番手で涙を呑んだ拍手なきくやしい記憶か。

今年は昭和の人が消えて逝く

富 田 保 子

「石川五右衛門が煮立つた釜に入られて死ぬ間際に何と言うたか知ってるか」「辞世の歌を詠んだんやろ。石川や浜の真砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」と「ところが、新説が出たんや。女の名前を呼んで、死んだというんや」「ええーっ? 何ちゅう名前を?」「イマニエル。保子さん、明治の人は絶滅し、大正もほぼ。今年は「イマニエル夫人」を知つた昭和の人が消えて逝く。

自選集

小島蘭幸

振り向いてばかり私の中の鬼
鬼の形相一度は見せておくことだ
悪戯鬼の頃の愛称誰も知らず
新子展ひとりにさせてくれないか
姫路城仰ぐ新子の眼を思う

西出楓楽

誕生日重ねて増えるまあいいか
来年のことは確約できません
三歳が上手に使うオノマトペ
インスタントの味噌汁捨てたもんじゃない
頭から足から老いは容赦なし

仁部四郎

ありがたやテレビで拝む除夜の鐘
寺町のマンションで聞く除夜の鐘
戦争の場所御存知か除夜の鐘
除夜の鐘人生相談休載日
除夜の鐘謎かけごっこしているか

前 たもつ

忘れ上手人間らしく生きている
ちよつと照れ五歳児くれるハイタッチ
弱いほくに神様声をかけてくれ
観光客平和な国に満たされる
最高の一日でした言い聞かす

三宅保州

鍵持っているのはあなた自身です
肩書きで呼ばれるだけのお人です
人生もかくやと思う阿弥陀くじ
楽ばかりしていると錆びてくる身体
噂でもされてるうちが華である

村上玄也

よその娘にお爺扱いされ出した
医者も僕と同じ症状あるらしい
長いことほろ酔い気分忘れてる
何故飲まぬと根掘り葉掘りを質される
お迎えが閻魔様なら逃げ回る

八木千代

この歳でも心に余ることもある
椿にはいつも相談持ちかける
木の精も老齢なれど誠実で
月の出を待つてしずかに語り出す
欠けながら月もことばを置いていく

山 本 希久子

息切れせぬよう八十路の小休止
集中豪雨天に文句は言えもせず
越えられぬ自分で引いた太い線
あてもなく歩く小春日昼下り
過去へ過去へと戻る私の夢飛行

兩 川 洋 々

晩酌が危険水位をとうに越え
亡夫の汗吸った大地は裏切らぬ
予言より妻の予感がよく当たり
飢餓の子へ支援のミルクいつ届く
失業の胸に第九が突き刺さり

板 尾 岳 人

百年のいのちを刻む砂時計
人間も蟬も泣くだけ啼いている命
岳人です 蔑乃先生元氣です
ロゼワイン高くて芋焼酎に
死にたいと思ったことがない妻よ

奥 田 みつ子

座布団を敷いてどうぞ落語はすぐ出来ぬ
秋の空だーれも悪くないと言う
敵に回せば怖いと思う人ばかり
ベール被ればみんな綺麗な顔になる
動揺が一番怖い老いと知る

川 上 大 輪

祭笛ここから先は別天地
帰省するたびに手摺りが増えている
青空が広がっているレントゲン
秋ですね日暮れの早い後頭部
汚れてる部分が私らしくなる

木 本 朱 夏

鳳仙花はじいて爪を染めた日よ
顔いろの悪さにふれず手を添える
健康で農婦のような足だけど
キッチンに亀の子タワシ文化の日
何の種だろうか春が待ち遠し

小 西 雄 々

向かいから無花果となりから柿もらう
梟啼く夜となりでは子が生まれ
喪の塩も用意父の死を待った
ぬるま湯の中で結論できません
鬼嫁がいるのでわが家磐石だ

斉 藤 弘

訪ねると雛はとつくに巣立っていた
りんご挽ぐりんごの鼓動聴きながら
秒針の動くリズムで来る期限
茶碗蒸し好きだったなあ恩師の計
削除キー押そう白紙になりたくて

キヤビアにも夕張メロンにも飽きた
カツ丼を食べたくなつたいい日和
樹木葬してもらう樹を探している
神さまは問い合わせには応じない
渋柿の情けは干してから分かる

新家完司

津守柳伸

どなたにも賀状廃止でお許しを
茶が旨い独りの刻を噛みしめる
餅は餅屋でいと簡単に介護の手
デポコンもピオーネも来るお裾分け
運鈍根今さら何を鏡掛け

都倉求芽

どこまでも澄む空妻は昇りゆく
胡蝶蘭さえも哀しい顔棺
秋の陽の速さ線香も蠟燭も
霊前の花に命拾いの虫
車椅子呼んだ気がする隙間風

土橋螢

地獄にも人が入れる門がある
尻尾隠して善人の真似をする
美談ばっかり描いてみる設計図
燕子花しずかに鳥になつてゆく
友引がわかる暦を買つておく

森の句集



山彦

石曾根 民郎
いしそね たみ ろう

郷土色いちにち雪の降る灯なり
火葬場に待つ低語あり月去らず
骨壺を抱けば星座が待っていた
思ひ出のひと多くみな月のなか
白鳥の羽のいたみにわがいたみ
憎しみを消す一片の微笑たり
盃のなかに男の道つづく
喜劇なほつづけ渡世にあぐらかく
酔眼に灯がまたたけば人生か
酔へばわが文学貧しなほも酔ひ
一人づつ荷物を背負ひなにもいはず
ほころびに似てこの酔ひをたのしむか
思ひ出の向うで雪は降り積る
墓の片隅に残る風置いてきた
道祖神ちらつく雪に旅のゆくえ

(昭和45年4月10日 しなの川柳社発行)

前夜から雨であつたが、当日の朝には曇り空。道中で傘を忘れる心配から解放された。昨年は初参加であつたが、ラッキーなことに楯を頂いた。今回は二度目の参加。

締切時間が正午であるので、月例会に出席する時刻より小一時間前に出発。乗り継ぎもスムーズで予定の時刻に到着。エレベーターで四階へ。300名にも及ぶ参加者にロビーは人の波。然れども老老介護は斯くあるべしと受付、案内係の方々の零れるばかりの笑みに迎えられる会場に入れば既に到着の柳友の手招きに従つて無事に着席。

投句、昼食を済ませて数少ない愛煙家が伏し目勝ちに肩を寄せ合う喫煙室に足を運べば先客が一人。彼は「やつと仲間が到来」とばかりに笑みを浮かべて迎えてくれた。吾輩は名札を付けていたが紳士は名札を付けていない。柳友に違いないと思い「どちらからのご参加ですか」と聞くと「東大阪から来た。川柳には余り熱心ではない」とのご謙遜。吾輩も「老後のたのしみで指を折っているだけ」と二人で大笑いをして別れた。

講演が始まる時刻が近づいたのもう一服と思ひ喫煙室へと行くと、川上大輪先生と山東日出男氏と先ほどの紳士がいた。胸に真っ赤な薔薇。名札には講師とある。麻生路郎先生のお孫さんの西村哲夫氏であつた。

「先程はどうも、どうも」と再び大笑いをした。句会では二回名乗りができた。たのしい一日だった。

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

銭湯の河童 冬至の柚子に酔い
大阪の涙は今もあたたかい
中年やすこし汚れた雪だるま
月よりも星になれたらなと想ひ
噴水よ夏の疲れのないように
大丈夫ですか わずかな預金帳
バソコンに置いてゆかれる日が近い
丹波屋のおはぎを鬼が買つて来る
飾るものほかにないのか髪を染め
いくさから逃げる枯れ野の果てまで
たけのこを食べる今年も生きている
それなりの勇氣さんばつ屋をかえる
日の丸を嫌うわたしのあまのじゃく
日が昏れてまた日が昇る難儀やな
何をしに生かされている葦なのか
京橋の夜をなんにもせずに抜け
銀行が転んでは腹に巻き
毎日がいのち三年日記買う
一泊二日 鬼が薬を持ってゆく



川上大輪選

和歌山市 西川千鶴

大袈裟に笑ってあげた親父ギャグ

鶴と亀長寿のコツは非公開

それぞれの明日を乗せた終電車

運の無さ駄目押ししてる泣きぼくろ

建て付けの悪い我が家のオノマトペ

飼猫が仲を取り持つ倦怠期

府中市 岸田 武

とりあえず葉代りに領収書

八十路なお見栄も妬心も引き摺って

どの顔も生き生き笑う敬老日

ソーラーのパネルに変わる野菜畑

もう五十息子がおじん臭くなる

葬式に遭うたびどつと歳をとる

大洲市 花岡順子

ついでだと言われたことが気に入らぬ

自然体でいようススキの穂が揺れる

ゴミ箱のつもりで母の愚痴を聞く

売れ残りの品が欠伸をして並ぶ

祖父ちゃんの小言は直下型地震

コスモスの強さ倒れてから判る

横浜市 川島良子

良い人と言われた頃の良い笑顔

肩書きが猛威振るっていた時代

敵味方人間は保身に走るもの

用心棒に一匹雇いたいオトコ

理不尽な解散からの第二幕

ダイナーよりランチの似合うお付き合

尼崎市 清水久美子

銀杏のにおいが秋を深くする

食べ頃の柿わやにする百舌カラス

ハンドルの遊びぐらいいは羽目外す

のほほんと生きて知らない肩のコリ

見本より見劣りがするお取り寄せ

朗報にうそうそうそを連呼する

佐賀県 真島 久美子

真実は右脳で止めておくつもり
スタートもゴールも古里の匂い
そよ風に揺れて弱さを隠さない
ばらばらの秋ばらばらの交差点
群れて鳴く羊に溶けていいですか
ひっそりと咲いて誰とも競わない

和歌山市 定松 宏枝

特別な事もしないで生きてます
ふる里の山がだんだん痩せて行く
ワンコイン貯めて日帰りバスツアー
モシモシの儲け話に裏がある
名月を疎遠の友へメールする
食いしばる奥歯も今はありやしない

福井市 伊藤 良一

自分との間合い一番苦勞する
極楽はこんなものかと湯に浸かる
忘れたい過去は半音下げ歌う
五七五趣味で悩んでいれる幸
補聴器をつけたら仲が悪くなり
帰りたい施設の母に嘘も尽き

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

残照に生きる明日の風もらう
平成が昭和にもどる脳回路
新米の湯気に忘れる農の汗

気のゆるみ待ってとび込む風邪の神
人情も愛も地球も謎だらけ
老人の愚痴が福祉へ届かない

三原市 笹重 耕三

まだまだ元気で撒いてる加齢臭
地平線が呑み込む薄っぺらい記憶
ちよつとした嘘を吐いたと書く日記
ポケットの中で五七五が生まれ
メモ帳を忘れ忘れ物が増える

広島市 田桑 恵子

核のゴミ捨て場ないのに再稼動
孫子らに残してならぬ負の遺産
リーグ連覇ちようちん行列平和な灯
無人市コインひとつで句を買う
孫ら来て老いの日常かき回す
休刊日朝のスタート間が抜ける

豊中市 荒木 郁子

老いの影何だかんだと忍び寄る
お互いを添え木のように暮らす日々
恵まれた暮らしの中に出る不満
ボランティア手品のミスも拍手され
たいそんな讃辞は裏が有りそうだ
ユーモアで生き様綴り五七五

松戸市 山下 明子

ビルの狭間鼠一匹ひた走る

意外です都会のネズミ瘦せている

子守唄寝つかないはず こぶし入り

新ルートいつもドキドキ里へ向く

凜として赤い実ひとつ枯れトマト

横浜市 巖 田 かず枝

七五三ママのお古でハイチーズ

わんぱくもママが恋しい夕方は

惚けぬよう神に悩みを与えられ

北の人アンチ平和の主演賞

さあ選挙上手い話と熱い風

静岡市 渡 辺 芳子

ノ！天気干渉せずに生きている

逆らわず面白がつて生きて見る

老いが来る自分の花はまだ咲かず

今更に背のびをしても縮むのみ

二度とないこの人生を生ききろう

江南市 脇 田 雅 美

金婚式に夫が照れてありがとう

誘われてグルメ三昧したつづみ

駅弁に平和な景色動き出す

米一粒こぼさず食べて感謝する

モットーはどんな事にもありがとう

豊橋市 西 郷 紀美代

人様のことまで話す長電話

止めぬ酒自己責任という主治医

太った悲鳴を上げてくる秤

よく伸びる影に驚く月明かり

玄関の様子でわかる暮らし振り

豊橋市 藤 田 千 休

中古車がまだ現役の意地をみせ

栄転の椅子に妬みと媚が寄る

倦怠期妻の仕様書読み返す

春からの使者を自負する露の臺

非正規の渡る世間は鬼ばかり

大阪市 小 野 雅 美

好きなのに会話弾まず見る時計

私が去って会話が弾み出す

減らず口たたき真実悟らせぬ

足の爪お腹つかえて長いまま

大都会ビルは高さを競い合う

大阪市 柴 本 ばつは

道祖神の化粧直しをしてる秋

この土は美味しかったと芋がいう

叱られた女先生すきだった

恩師よりひと足早い僕白髪

人間にまた生まれたい笑いたい

大阪市 樋口 眞

萩桔梗咲いて夏ばて嘘のように
洪水と青空残し豪雨去る
屁理屈をいっぱい付けて再稼動
危機感を煽り軍備を増やすよう
ミサイルの避難訓練眉につば

大阪市 森 廣子

焦ったら虹の階段踏み外す
少しずつ秘密が増えて亀裂生む
押し込んだ嘘が穴から溢れ出る
磨き過ぎ地金の傷が現れる
終息のその日にまでも種を蒔く

堺市 小林 若芽

まだ米寿つまずかぬよう一歩ずつ
振り向けば半分ずつの不幸
火消し壺がゆいままに蓋をする
逢えるなら月が残っているうちに
気がかりが消え満月と笑い合う

堺市 羽田野 洋介

好き勝手やった昔をなつかしむ
無茶言うな近頃無理はしていない
まだいける目指す希望があるうちは
短くても心に残るご挨拶
いい話だけを心に刻み込む

堺市 松永 庄三

たこ焼が口でハフハフ踊ってる
自分史を仕上げお迎え待つばかり
褒めが七叱咤が三の名コーチ
床屋さん世間話で髪を切り
蟹這いで石段下るご参詣

池田市 上山 堅坊

ほんわかの空気をまとう人が好き
行く先が不安虎の子使えない
この浮世金がなければ地獄だら
身に残る宝を探る五七五
生き方のヒントをくれる趣味の友

池田市 太田 省三

子へ孫へ重石でつなぐ家の味
試着室洒落た服着て自撮りする
紅葉狩りお出かけ用の紙袋
ゆめ成って維新の志士の仲違い
旅終えて入る寢床のあたたかさ

泉大津市 助川 和美

ええなんでもまず年を見る計報記事
敬老の日の服装に迷う母
散らかった服踏むまいとついよろけ
投函後切手貼ったかどうかだっけ
萩の寺雨傘杖に歩く道

河内長野市 中島 一彌

豊中市 源田 啓生

北斎の荒ぶる波が富士を呑む

冗談は心の悩み隠すため

サンブルが本物よりも食そそる

寝る前に今日食べたもの言ってみる

世話好きは少し大きな軒かく

河内長野市 原熊 知津子

永遠を静かに抱いて少女逝く

恋と知り気のない素振りする二人

発酵が始まり秘密漏れていく

見ないふりできぬ男の泣きぼくろ

前傾姿勢いつも準備はできている

高槻市 三谷 白黒

咄家は顔付きだけで味がある

黒髪を残してくれた親感謝

耳遠いことわり言って話する

畑仕事頑張り過ぎてヘルニアに

恥ずかしさ無くなったのでとても楽

豊中市 貝塚 正子

ヤキモチをじっくり焼いて投げつける

警察は笑顔で違反切符切る

秘書だけが握る社長の裏予定

さわやかな酸味解らぬままで居る

一線を退いてさわやか取りもどす

愛と恋八十路過ぎれば置き忘れ

輝いた顔にもいつか錆が付く

泣き顔を仏はそばで嫌ってる

組板が朝の幸せ歌ってる

痛さにも耐えて他人のつらさにも

寝屋川市 岡本 勲

あと少し泳ぎきれるか傘寿坂

目の合図だけですみます老い二人

そこそこはいけるといって虎になり

燃えつきた恋の灰すらない傘寿

正論が足を引っぱる会議室

羽曳野市 磯本 洋一

心配は老後でなくて半年後

早期解散財政赤字民意無視

新党ごっこ政治忘れた永田町

栗拾い靴の痛みは無頓着

老い独り秋の夜長がいとおしく

箕面市 中山 春代

予定表追いかけている秋の蝶

だし巻きへ夫婦でもめる塩砂糖

崩し字を指でなぞって歌碑の丘

鈴生りの柿健ちゃんの家跡

夜も立つボクのお下がりが着た案山子

大阪府 神 野 千恵子

忘れたい過去が大きな顔をする
暇余裕 市松模様の日が続く
努力して明るいニュース探してる
白を切る顔がだんだん青くなる
国税も国土も私物化する驕り

大阪府 高 木 道 子

お彼岸を終えてぐったり彼岸花
稜線に一ひらの雲へばり付く
見栄はつてはって貴女の場合は何処
柿あかく空あおくして里寂びて
クラス会みな健やかに老い給う

大阪府 畑 中 節 子

年重ね自分が見えてくる不思議
脳のメモすぐ消え去りて大あわて
あるがまま人生気儘に自主自演
かぼちゃ煮る代用食を思い出し
坂道の傘杖となる雨上がり

神戸市 田 本 古 鈴

屁理屈も理屈のひとつ言ってみる
夢ひとつ捨てたら今が重くなる
口づけは時々苦い味がする
美人顔ずい分得をしましたか
あなたゆえこの身をけずる月になる

神戸市 山 根 弘 華

老いた脳やる気にさせた此の一句
通院のカードばかりのから財布
あの世にも愛した友がたんといふ
百歳を目ざす老女の底力
ありがとう言えないままに夫が逝き

伊丹市 延寿庵 野 鶴

邂逅へ肩ふれて行く福の神
夢追って玄関の靴明日へ向く
カサブタをめくって覗く猜疑心
ハプニング軽いジョークで切り抜ける
スマホからスイッチ入れる炊飯器

加西市 山 端 なつみ

仏壇に留守を頼んで老いの旅
ブラジルは地球の裏と言うなかれ
パスポート切れないうちに旅に出る
立派な実つけさせたねと土誉める
新米が採れても農家古米食べ

篠山市 長谷川 善 輔

才能はあったはずだが運がない
もてた頃知る人もなく自慢する
今さらに妻に配慮の悔い深し
天災が持つて行ったとあきらめよ
あかんたれでもここまで来ただよ

篠山市 藤井 美智子

宝塚市 井上 風花

語りたい会いたい亡夫に守られて
趣味楽し人生苦勞消えた老い
聴き耳をしつかり立てて好奇心
食事会リフレッシユして明日へ続く
この暮らし健康寿命へ繋げたい

三田市 九村 義徳

宝塚市 太田 としお

五七五落しています脳の錆
雑学を餌に右脳が光り出す
数独に占領された古稀の脳
時々脳は蓋あけチェックする
横文字が脳の若さを試してる

三田市 馬場 貴美江

奈良県 長谷川 崇明

外出は介護予防と医者通い
孫自慢表裏返せば我れ自慢
月見酒老いの至福は家族愛
やはりそう同じ話を二度三度
鏡みる皺の中から顔が出た

三田市 松本 ゆかり

和歌山市 北原 昭枝

娘住む街と思えば一人旅
ガムかんで周りを拒絶しています
老婦人凜としていて孤立する
ひろーい空マンション住みの身に余る
新米が届く浮世の義理も詰め

ロケットマン亡命先は宇宙圏
ポピュリズム辞書をひくには指痛し
総選挙小説よりもおもしろい
大義なき総選挙でもわが一票
閉店の理由は一つ人口減

魅力的打者と投手の騙し合い
一人残らず天国行きのキップ持つ
おもしろい仏の顔で悪さする
もうちよつとがんばりなさい蟬の声
何事も言わな分からん親子でも

公私共想定外が目白押し
相槌も本音言えないボランテニア
戦争で平和目指すという不思議
百均が出来て日本の使い捨て
氷山が溶ける地球の出す涙

苦も楽も拾って背負う駕籠の中
楽な道たどれば遠い山や川
愚痴言えぬそんなに楽な筈がない
菊の花ランク付けされ秋深む
配達音をきいてる夜明けまえ

和歌山市 福島 一雄

千余年慈悲の眼差し薬師仏
運慶はロタンに並ぶ彫刻家
ドローンで月の痘痕を見てみたい
紅をさし別嬪さんの七五三
夢でないお前百までゆけるかも

和歌山市 福呂 秀子

零時前過ぎ行く今日がいとおしく
生きて来た証の様に手が語り
人の恩山程貰いゴール迄
悟る事まだまだあつて日日新た
老いの影追い払いつつ日日多忙

岩出市 村中 悦男

コーヒーはブラックと言う卒寿です
無農薬野菜も誇る顔をして
体調記録ペンも軽やかいい目覚め
程々の欲を明日の糧にする
名月をすくってみたい水たまり

和歌山県 森下 よりこ

身体宥めてまだ出来るのは農作業
一人分のおかずはいつも作り過ぎ
二三日の冷気に菊も目を覚ます
冷蔵庫覗いておかず知恵しほる
将棋盤も碁盤も飾ってあるわが家

倉吉市 大羽 雄大

老人カー世話にはならぬ一万歩
友の名に釘付けとなる計報欄
姉老いて呼びすてた名にちゃんがつく
へらへらと嘘ついてる顔の艶
不用心どこか開けてるボクの家

倉吉市 堀 かずこ

打ち身して痛い分だけ気をつける
誰だつて楽をしたいと思つてる
大胆な筆のタッチが書を生かす
今日も暮れあしたはもつといい日だね
月見上げ思い出すのは亡母のこと

倉吉市 若松 由紀子

飛んでみた跳ねてみましたまだ傘寿
何もない平らな道で転ぶ老い
嬉しい事たまにあるので生きられる
金はない沢山あるのは笑顔だけ
溜めこんだ不満と愚痴が消化せぬ

米子市 池田 美穂

冷蔵庫腹いっぱいを受けつけぬ
白髪染め止めたら仕事一つ減る
新米が私のお腹破りそう
店先の松茸と目を合わさない
秋の夜長ひたすら栗と柿を剥く

米子市 川 本 美津子

コーヒーの香りに鼻が動き出す
諦めず夏の終りを蟬が鳴く
どの鏡見ても私は老けて来た
供物食べるカラスの墓供養
スローモーション杖つき歩く八十路坂

米子市 戸 田 真理子

この性格悪性なのか治らない
失恋へ苦いコーヒーちようど良い
感動が冷めないように保温する
茨道で拾った宝二つ三つ
秋風を知っているのか虫の宴

米子市 永 井 三津子

擦れ違うただそれだけで脈乱れ
頼りには元氣とあるが氣に掛かる
深呼吸姑の出方見極めて
弱る姑に元氣出しそな喧嘩売る
夏終り彼此浮かぶ日焼け跡

米子市 野 川 宣 子

てっぺんを目指した足が蹴躓く
目指す道あって惚けてはいられない
主婦の座が危うくなった物忘れ
女子会も焼酎組とビール組
腹の中探り合ってるふたりして

鳥取県 門 村 幸 子

逆縁になぜなぜなぜの計報欄
バカバカと自分に向かうもの忘れ
女三人寄れば雑学ほとばしる
街並みも人もなつかし小津映画
ジャンケンホイ真顔で愉快アイコデシヨ

米子市 雑 賀 美和子

内輪もめも笑顔で返し波立てず
核のゴミ捨て場候補地いらぬ世話
彼岸花誰を待つのか燃え盛り
議員さん不倫するより仕事しろ
海兵隊へヤンバルの森泣いている

鳥取県 橋 本 整

盆踊り唄に合わせて傘が舞う
図星され孫にへそくり少し分け
しくじりの汗をタオルがそつと拭く
五七五君は若いと大笑い
食卓に笑い転がす孫娘

岡山県 小 野 美那子

たつぶりの皮肉で顔が茹であがる
鉦ついて困りごとです仏さま
邪魔をする大事な時に出る寝ぐせ
夕焼けこやけさよなら言えぬ赤トンボ

玉野市 片岡富子

絶好調クイズの答えスラリ出る

夏太り秋の味覚が離さない

蕎麦食べていつかは打つと夫言う

後半はメトロノームでゆるり行く

ウォーキングさぼった付けが腹にある

尾道市 小畑宣之

熱々のおでんで一杯酒は冷や

若い頃火傷しそうな奴がいた

待人はついにあの世で僕を待つ

スクワット足踏みしつつバスを待つ

天高し血圧高し血糖も

広島県 日谷寛

思い出を崩せばなにが見えますか

にんげんの弱さに丸くたすことば

本質が流されていく多数決

斜めから人を眺めている軽さ

けじめだけつけて心を広くする

山口市 中前幸子

朱の回廊浮かべて瀬戸の海は風

スポットライトの死角で光る夜光虫

中天にぼっかり亡父の椅子が浮く

ブランコにひとりっきりの秋を揺れ

柘榴弾けて晩秋の貌になる

松山市 郷田みや

真っ直ぐな道まっすぐに歩けない

名刺交換すこし上手になりました

六十階あつという間に秋の空

楽しみは明日来る友へおでん種

来年の手帳えらんだのはピンク

那覇市 前川真

夢という魔物を未だ胸に持つ

終章に描き足してみる夢芝居

輪を抜けて事の次第は風に聞く

羽衣を買えたらすぐに君と逢う

夜更けよりすぐ眠くなる午後の椅子

白河市 鈴木たけし

弾まないボールは誰も拾わない

ブライドが小さな親切をはじく

病院で萎えスーバーで蘇る

未練なき別れは無言劇でいい

年の暮れ平均寿命が追ってくる

東京都 高岡弥生

ややこしいそれが家族というものよ

懐メロを楽しむ歳になつてきた

給料日財布眺めてあと少し

ストレッチしてから歩く股関節

佐渡市 高野 不二

京都市 櫻崎 篤子

若いねと言われる昔買った服
酒止めて建てる家なら止めておく
祝うよりたかる積りでいる米寿
回転寿司値札で出した手が止まる

名古屋市 富田 末男

大阪市 磯島 福貴子

子の為のチャンス逃さぬ親ごころ
情ないことを覚えにしておこう
苦しいが元氣を持てば越えられる
経験を生かせばすぐに出る答

名古屋市 山本 三樹夫

国の先何を期待の総選挙
新婚のやさしい妻に角を見る
我が息子たまのメールで金をくれ
解散で何を隠した安倍総理

豊橋市 小松 くみ子

大阪市 松田 聰

あいまいもこ良くも悪くも場が和む
とか言つて頼るお方はあなただけ
好きだから2日目カレーまだ食べる
趣味数多友のつき合い遠くなる

豊橋市 高柳 閑雲

大阪市 前川 善之

突然のキス心臓が噴火する
ドライアイ君が眩しいまま暮れる
本当は涙で暮れたチャップリン
振り上げた拳が遂に下ろせない

昼ドラにまばゆい生活教えられ
こんな世に猫で良かったねミーチャン
うかうかと実印の要る話など
猫ちゃんに三途の川が渡れるか
SNS何の事だか私には
若いねに乗せられついに役三つ
祝日が毎年移動なじめない
回らない時価と言う寿司つまみたい
背の青いお魚食べて頑張るぞ
母の愛捨て身で守る強いもの
行つたところ地図ぬりつぶし思い出す
思いやり彼の背中ににじみ出る
ひとつきがあれよあれよで四季巡る
国民よ主権者である自覚持て
日馬富士横綱の意地やつと見せ
夫婦船時々座礁することも
リカちゃんも時代と共に生きている
生きるのに柵絆は切れぬはず
健康ならもつと生きてよ孫の声
生きるなら貴女と共に何処までも

大阪市 横山 里子

河内長野市 森田 旅人

いつからか背中押されて生き急ぎ

ごまかしがきつと効くさと化粧する

生きてきた一年分のこの埃

天井裏いたち一家が居候

大阪市 吉田 知之

吹田市 岩口 のぞみ

新世界パリの心算で行ってみる

手をあわせ三度の食事一人食べ

無理にでもやめさせられた辞職です

人の事気にし過ぎると動けない

堺市 近藤 治子

豊中市 荒巻 夢

任されていますキッチン我がお城

運任せちよつと努力もプラスする

予定表せつせとうめて意気さかん

待ち時間長くぐつたりクリニク

堺市 大和 峯二

豊中市 木藤 こみつ

この平和守りぬくまで気がぬけぬ

百合の花築地で花を散らしてる

支持率が下れば増えるていねい語

あたたかい生き方上手学びたい

河内長野市 穂口 正子

羽曳野市 安本 美喜

AIがちよつと不気味になる昨今

たつぷりと醤油はかけた若かった

ユニークだが夫の料理は不経済

悩まずに考えろよと悩んでる

害虫の薬使えぬ老夫婦

靴磨き人をも磨く見る目持つ

モップ掛けリハビリ一年振り返り

解散へ万歳ばんざい言うてはる

枚方市 坂本 ミヨノ

秋香る金木犀が咲いている
枝豆を友と食べ過ぎ胃の薬
栗御飯焼肉が好き子に言われ
声自慢老人会で歌いたい

枚方市 佐藤 武紀

鯛雲焦げた秋刀魚が食べたいな
本棚が親父の思想見せている
断捨離もいいが思い出捨てられぬ
同総会病氣の話今日は駄目

箕面市 寺井 柳童

黄金の棚田に燃える彼岸花
塩加減ひとつで美味にシエフの腕
秋晴れに真赤に染まるリングウ園
目の手術やって変わった世界観

八尾市 田邊 浩三

結婚もクルマも要らぬ若い人
当たるとは思わずに買う宝くじ
食べてから教えてくれた河豚の肝
曾孫の笑顔は天使そのものだ

八尾市 前田 紀雄

知らぬ間に戦争出来る国にする
余罪なら叩けば出ます我人生
総選挙ガラガラボンで決めました
本人が気付かないのが国難だ

八尾市 山川 寧

おじぎ草ちよつとつまんでこんにちは
合同婚みたい岩湧山の秋海棠
つりふね草ゆらゆら愛のブランコ
花の名が思い出せないまま朝になる

大阪府 小栢 こずえ

いそがしい家族の中にひまな老い
娘の元へ翼がほしい老いの足
一人居に靴は一杯並べてる
習慣で用もないのに目が覚める

大阪府 中内 孚彦

無機質の白衣が包む人の愛
野良にしておくのは惜しい白い猫
ぼんやりは霊界からのアクセスか
歳の差を越えられなんだ恋もある

神戸市 興水 弘

福耳でえびす顔だが金がない
孫の手よ自由に翔んで掴みとれ
終の駅見えてはいるがのんびりと
飲み屋通い五十年まだ足軽い

神戸市 近藤 勝正

もの思う秋であるのにぼんやりと
年金で消えずに残る生命線
群れるより孤独が好きになりました
朝ドラに青春重ね懐かしむ

伊丹市 平井 富夫

アレアレと三人そろって名前です
うちの妻体細いが食太い

見に来てね発表会で孫跳ねる
ボケたのは何時からですか とほけてる

三田市 幸田 厚子

気楽さがズルズル延ばす妻さがし
月あかりきれいな夜は電話する

手をかけて育てたつもりこの結果
老世代互いお見舞辞退決め

三田市 辻 開子

半世紀昔と今を比べても
久しぶり誂え服で上機嫌

食の秋あれもこれもと手が出すぎ
あっさりの味に慣れてのメタボ腹

三田市 東内 美智子

結婚しよう言うた言われた御来光
病院のイケメン医師に診せられぬ

元は他人信じ委ねた夫婦道
夜長にはカボチャの馬車で来て欲しい

三田市 宗福 清司

何事も結果良ければ二重丸
この歳で暗中模索嫌になる

安全チェック指差呼称してますか
何事もプラマイゼロはおもろない

宝塚市 岸田 万彩

嘘八百ならべて浅く呼吸する
DNAがちゃんと働きドラ息子

問診票誰のことかとフト迷う
九条の国はミサイル仰ぐだけ

姫路市 中野 忠

顔色を見たり歩幅を合わせた
鯖すしに目のない妻の箸運び

どこでどう間違えたのか匙加減
ひょうひょうとススキは風と遊んでる

三木市 山口 久子

何回も話したはずが初耳だ
年重ねクシヤミするの命がけ

へそくりの場所を忘れて妻に聞く
衣替え去年の服ははでかしら

三木市 山口 ヨシエ

平気だよ見得を張ってる天の邪鬼
故もなく疲れがどつと渦を巻く

満ちた日茶飲み友達みぎひだり
幸せは日日好日の笑い皺

奈良市 尾畑 なを江

煮かぼちゃに戦い抜いた刃物跡
選挙カー出来そうにないこと叫ぶ

日は早く動きは遅く過ぎてゆく
虫の声はめてあげたいほど上手い

前後から妻と孫とで逃げ場なし
和歌山市 上野 寛

舗装され石蹴り出来ぬランドセル

金縛り醒めて安堵の白昼夢

忠節を尽くした今はボランテイヤ

和歌山市 倉橋 悦子

台風を待つように見る進路先

少子化を尻目にメダカ子沢山

秋色も濃く深くなる冬仕度

北斎に魅せられアベノハルカスへ

和歌山市 佐藤 まき

孫の画く芸術的な肖像画

芸術は遺影に出来ぬ青い顔

封印の嗜好独りになつて解く

腹時計の昼食アララ三時です

和歌山市 鍋嶋 澄子

開開岳黄花に埋れ裾野行く

色濃くしミヤマキリシマ軽い足

花と本こころ潤す湧水よ

独りの夜気遣い電話くれるひと

鳥取市 上山 一平

月さやか木犀の香に誘われる

銀木屋くすぐるころ知っている

漁火が息づいている丸い海

台風が去って朝めしかみしめる

鳥取市 大前 安子

方言で話し掛けます夕焼けへ
介護する宥めなだめの命抱き
沸いてくる母の笑顔よ助け舟
愛と知恵十一は三であれ

鳥取市 田賀 八千代

潮時が来たか火の粉は消しておく
コーヒーが旨い本日大吉だ
不感症になったか父が怒鳴らない
どん底を支えた母の分厚い手

鳥取市 山野 すみれ

大臣になって上手に嘘をつく
出かかった言葉奥歯で咬み殺す
味のある方言どれも手放せぬ
方便の当座の嘘を持ち歩く

倉吉市 岡崎 美知江

婆ちゃんの雑学役に立ったよう
退職ですっかり仮面脱ぎきつた
湧き上がる流れの元は雨しずく
抱いた子の重みに月日ふりかえる

倉吉市 田中 紀美恵

留守ですと貼り紙したが明かり漏れ
居留守つかいテレビガンガンはれている
神様に秘密のむがだめだった
晴れ姿嫁ぐ娘は頬染める

倉吉市 田 中 けいこ

確実に秋がきたのだ抜け毛ふえ
疲労感忘れた頃にやってくる
宿題が出来たよっしやと腰あげる
険しい道よけて通る癖がある

境港市 中 井 虎 尾

今日の日は良しと浮かんた丸い月
ああ眩し夕日を背に來た女
雨に出て晴れてお参り大社様
山の田で人驚いた脅し銃

米子市 生 田 和 之

手の平に書いたメモさえ忘れがち
あれそれで通じるうちはまだ惚けぬ
カタカナになると躓く老いの足
最後にはしっかり札を言う積り

米子市 伊 塚 美枝子

農業で飯は食えぬが米はある
プロ野球終り疲れたテレビ前
肝心な時に動かぬ脳に泣く
秋夜長あれもこれもと欲が出る

米子市 黒 田 紀美江

急ぎます ことわり上手またやられ
水もなく枯れた花立て忘れられ
助手席のナビにうるさく指図され
十五夜が今夜は皺もシミも消す

米子市 田 村 周 子

友との安否声で元気を計り知る
都会だな旨いものには長い列
旨いもの食べて浮世を楽しもう
手入れせずそれでも香る金木犀

米子市 見 山 温 子

お茶一杯感謝の言葉癒される
ありがとうに引く手優しく振りかえる
出不精の夫の手を引き食べ歩き
老い二人暗黙の日日今日も暮れ

鳥取県 飯 野 菖 子

焦らないゆつくり運ぶ老いの日々
老いて行く心の幅も狭くなり
過疎の村木陰うわさを聞いている
美しく老いとセットで生きている

鳥取県 児 玉 規 雄

川柳を始めた妻がライバルに
息止めて披露待つてるその時間
自信作抜けて大きく名を名のる
いつの日か全作抜ける夢を見る

鳥取県 下 田 茂登子

亡父さんの足跡全部憎めない
身代わりになれたら欲しくない命
バス仲間時どき茶店入ってみる
立派な子親見るなんてよう言わん

松江市 相見柳歩

初恋の揺れがようやくおさまって
最新の口説き文句を開発だ
人間もよくできている神ほとけ
朝が来る当たり前ではない命

松江市 中筋弘充

捨ててはならぬ物ばかり出る大掃除
いざという時に役立つビール腹
三面鏡が妻の機嫌をとっている
暇なので粗品もらえる列に居る

松江市 山根邦代

ふる里もあわだち草の花ざかり
美味しいよ振り向かせてる柿の声
突然の来訪笑顔あたたかい
シバグリが届き古里なつかしむ

出雲市 黒目ひでお

思い出がどっと押し寄せファイト沸く
人権を侵害されて知らぬ顔
記憶力元に戻って楽になる
世直しが終の仕事だ夢を追う

雲南市 永見安子

メ切りがあつて暑さを吹きとばす
趣味ちがう夫婦は今日も西東
味の良い酒は明日の汗になり
年老いて行く実感がひしひしと

岡山県 大杉敏夫

満面の笑みに転じて熟柿落ち
表札は亡き子の儘の古い二人
過疎進む猫語を話す妻と居る
葱坊主僕に元気を呉れますか

広島市 松尾信彦

偕老も温度差だつて黄金比
一病を宥め許して乞う明日
止まり木に邂逅ありき一人酒
秋の日に大きく踊るコンバイン

竹原市 土井輝恵

むくわれぬ亡母に捧げる吾亦紅
御褒美と受ける入選有難く
同級生に逢つて姿勢をピンとする
金木犀闇に香りてここですよ

竹原市 六田半徳

夜半にはコノハヅクブッポウと鳴く
五葉松近くに蜂の巣ご用心
気がかりは6年ぶりの火山噴火
通院の結果良好妻笑顔

府中市 田辺和子

秋の空ノルマを課している自分
三猿が潜んでからの穏やかさ
半世紀つづく庭師と家事情
大物を無理して呑んだ魚の腹

三次市 伊藤 寿子

福岡県 本田 さくら

薬指の指輪奥さまどんな方

30分待てど順番来ぬ不思議

ハローワークの訂正書類二度の足

深呼吸良いなわたしの小さい店

山口市 青木 隆子

コスモスが花瓶の中で皆開花

退院し家の畳に寝転がる

気が乗らぬ山ほどのこと置いたまま

使命終え土星に消えたカッシーニ

宇部市 高山 清子

卒寿すぎマイナンバーは持ちぐされ

孤独とは言わず自由と老いの意地

夕焼けになぜか老いても亡母を恋う

哀しく涙親友の胸には迷子札

今治市 渡邊 伊津志

ガソリンの売り値横目に一万歩

生かされて平和に浸る卒寿坂

合縁奇縁風の流れに逆らわず

収入の無い寂しさを知る余生

高知市 三谷 松太郎

おばちゃんよ そんな目つきじゃ猫も来ん

火振り漁立候補者の夢枕

規格もん私の腰が揺れている

枝張った櫓よ息子ら見ておくれ

彼岸花咲いて今年も父母に逢う

包丁を研いだはいが指けがす

正論はいつか実になるそう信じ

蟻さんよそう働かず休みなよ

佐賀市 清水 園實

雨にぬれ風邪引かぬようビールのみ

自治会で祝敬老のお茶もらう

置き薬食べすぎ夜はひとり飲み

脳ベル賞ひとり笑って過ぐす夜

唐津市 岩崎 實

その言葉光となって突きささる

わからないところがあつて出る意欲

とり出して器が何と生きてくる

花の種平和な土地へ風運ぶ

山鹿市 前田 幸子

選挙戦津々浦々に夜が明けた

瘦せたいと努力のあとに顔のシワ

ビール飲むグラスに夫の影写る

天国から切符送るか夫の声

山鹿市 柳田 白沙

大丈夫にするしかない いばら道

胸キーン風呂の介添え三歳児

今朝もまた活脳スイッチ孫が押す

本物の安心と価値次世代へ

沖縄県
禱
もと

年波の恋の切符は片道で
美白して七難隠す濃化粧
人類の世界共通笑い声
ジワジワ名残唱える蟬の声

沖縄県
宮
すみれ

代引きも小銭ばかりで数え歌
大家族でんやわんやの六畳間
久々の雨に庭木もしやしり出る
秋風が汗ばむ肌を抱き締める

シドニー
坂
上のり子

名月や灯りを消して月と飲む
マラソンや後悔しきり途中から
風鈴の音耳障りだと異邦人
意識ない友に聞かせる北帰行

札幌市
富
永恵子

遠い耳今朝の雷とび起きる
ちからなど何もないけど喜ばれ
洪水の去りて流木語り出す
スニーカー朝の空気を仕入れする

弘前市
高
森一呑

燃え尽きる愛ってそれは蜃気楼
歯車を逆さに一度回してみる
この結婚絶対うそと妻が言う
ふかし芋過疎の婚活盛り上げる

第6回 卑弥呼の里誌上川柳大会

兼題と選者（各題2句）

「自由吟」小島 蘭幸・森中恵美子 共選
「遠か」田中 新一・大西 泰世 共選
「固い」新家 完司・樋口由紀子 共選
「果物」梅崎 流青・赤松ますみ 共選
「信じる」江畑 哲男・木本 朱夏 共選

投句用紙 専用用紙(コピー可)またはA4大用紙
参加費 1000円(切手不可) 発表誌呈
締切 平成30年1月15日(月) 消印有効
投句先 〒842-0103

佐賀県神埼郡吉野ヶ里町大曲2426-2
卑弥呼の里川柳会 真島久美子
TEL・FAX 0952-52-1061

賞 各題特選1句・有田焼 一万円相当
各題佳作5句・有田焼 五千円相当
(その他サプライズ賞あり)

※ 男女を問わず、たくさんのご参加を
お待ちしております。

井笠川柳会誌上大会

「薬」ひこばえ

課題と選者（各題2句）

「ワイン(ぶどう酒)」
長川 哲夫・岸 桂子・西出 楓葉
「ひとり(一人・独り)」
小澤誌津子・久本にい地・安部 美葉

応募要領

便箋または所定の用紙に各題2句(計4句)
を列記し郵便番号・住所・氏名・電話番号・
所属柳社を明記し投句料と共にご送付く
ださい。

投句料 1000円(定額小為替)

締切 12月22日(金) 消印有効

投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡2289
井笠川柳会 TEL・fax 0865-62-6200

賞品 各課題毎に、天位獲得者3名のうち
から1名に句碑を贈呈します。

主催 井笠川柳会

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

青雲のこころに蜜柑まだ青く

春愁の階段ゆるく螺をなせり

風花の今日タイガースキャンプイン

クリスマスカードの雪はしずかなり

恩師の死 その夜眠しとも眠し

恩師の死 手に止まる蚊をただ見つめ

恩師の死 蟬殻の背は断ち割られ

恩師の死 油然と聞く浪花節

老詩人 ひとり渉らす天の川

寝められた思い出がなし師を葬送る

炎天に寒疣立てて師を葬送る

初盆の胡瓜の馬は師に似たり

濡はるか 近づきただけ遠のく師

氷柱に待す 正装のバーテンダー

大嘘について大きな笑い声

屈辱の紋章 女史に坐りだこ

ルンペンに王侯の鬚 詩人の眼

嫣然と舞妓酔うても襟かたし

コスモスのほったらかしの美しさ

ボーリング 恋のライバル鑒

断崖絶壁 断崖絶壁冬の恋

滝冰る 信ずべからぬささめごと

長靴の片方どうしてもこける

歩き初めの子を元旦の地へおろす

元旦や 齒の美しいお嬢さん

福寿草 父子兄弟に似たりけり

一人去り一人去る 聖堂にして

子の頭蛭のごとし 可愛ゆし 黒し

われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳

鼻先をつんつん歩く好きな人

誹風柳多留一二篇研究 54

小栗 清 吾・細井 龍 夫

伊 吹 和 男・山 田 昭 夫

石 川 道 子

清 博 美

452 薬師寺が来ぬと縣道具すでの事

小栗 「オ3」の続きの場面（『太平記』巻第

二十一 塩治判官讒死の事）。師直がしつ

こく手紙を出す、塩治判官の妻は仲介をす

る女に「重きが上のさよ衣」と言い捨てて部

屋に入ってしまった。これを聞いた師直が「こ

れは衣・小袖をととのえて送れということか。

それならどんな装束でも調製するぞ」と張り

切ると、薬師寺次郎左衛門公義が、「いやいや、

これは新古今の『さなきだに重きが上のさよ

衣わが妻ならぬ妻な重ねぞ」という歌の心で、

人目をばかつているのです」と教えてやつ

た。

主題句は、この場面を詠んだもので、もし

薬師寺が来なければ、師直はすんでの事に寝道具（さよ衣）を送ってしまうところだった。

小袖でハないと薬師寺にかわらひ 一三〇

清 賛。

453 ぐしぐしとなくのでこううはなれかね

小栗 ぐしぐしは、声をおさえて泣くさま、

また、その泣き声を表す語。しくしく。めそ

めそ（『日』）。

「四面楚歌」の際の項羽と虞美人の句で、「ぐ

しぐし」は「虞氏」を表す。

垓下で漢軍に包囲された項羽、もはやこれ

までと訣別の宴を張ったが、寵姫虞美人がぐ

しぐしと泣くので、離れたい気持ちでいる

ということ。しかし、虞美人は項羽の宝剣で

自殺、その血の滴った所から虞美人草が咲くストーリーと相成る。

恋はくせもの虞氏くくと泣わかれ 八六二三

清 賛。

454 乳もらいのから身で来る八目をおさへ

小栗 乳を貰いに来る人は、赤子を抱いてくるのが当然なのに、空身で来る人がいる。その人は目を押さえているけど、なぜだ？という句。答えは、突き目など怪我や病気の目に母乳を注してもらいに来る人。

柳雨氏は『川柳風俗志』にとり、「是迄折角戴いて居ました餓鬼もたうたう昨夜無くなりましてと袖を目にあて、おろく声」と長文の頭注があるが、そのようなただ無惨なだけの句が、万句合に通る更に柳多留にまで採られるとは思えない。前述の如く解してこそ川柳だと思ふ。

乳もらひの片目ふさいてひとり来る

安元智三

清 今度は柳雨氏のストーリーのつくり過ぎ。同じ篇の輪講を何回やってもいい。こうした訂正が出来るのである。研究冥利である。

455 おもてむきから茶屋の来る左りまへ

小栗 左前は、没落に向かうこと〔江〕。

吉原の遊客が散財のあまり左前になってしまった。そうすると、それまではなるべく人目に付かぬよう客の家の裏口から出入りしていた茶屋の人間が、回り構わず表口から掛け取りにやってくるようになる。金あつてのお客なのである。

恥な事茶屋盃も出さぬなり

傍五28

清 賛。

456 いとこにもしろよふくると旅の留守

小栗 亭主が旅行に出かけた留守宅へ、よくやって来る男がいる。聞けば従兄弟ということだが、それにしてもよく来ることだ。もしかしたら、従兄弟も従兄弟、義理のふかい従兄弟さんじゃないかい、などと近所の噂話。旅の留守伯父ハうるさく一寸くると来

明三満2

清 賛。

457 あざわらひなから出て代脉に逢ひ

小栗 代脉は、代診。多く見習生が師に代わって診察するという〔江〕。

古川柳では、代脉は全く信用されていない。主題句の御仁も「こんな奴に診てもらっても仕方がない」と嘲笑いながら会っている。代みやくハ何をこいつの気で見せる

五42

清 賛。

458 うへ木どのやふるまいぞとかやば丁

小栗 茅場町には瑠璃光薬師があつて、毎月八日と十二日の縁日には植木市も立つて賑やかであつた。また、傘屋が多いことでも知られており、主題句はこの二つの名物を詠み込んだ作句。縁日に植木を運び込んでくる露店業者に対して、店先に傘を干している傘屋が「破らないように気を付けてくれ」と言っている。

植木迄めの字に付る夕薬師

一六40

清 賛。

瑠璃色の日傘も出来る薬師前

七九30

459 出来た下女井筒のまへとなふられる

小栗 井筒は、木や石などで作った井戸の地上の囲い。井戸側〔日〕。
情事が顕れた下女が「よう、井筒の前」な

どこからかわれている図。「井筒の前」は、下女の仕事場である（あるいは情事の場所であつたかもしれない）。「井戸の前」を指すとともに、女性の名に付けて敬意を表す「前」（菖蒲前の類）のもじりで「井戸の前」とからかい、さらに井戸端の恋である「筒井筒」（伊勢物語）を匂わせるという技巧であらう。

清 これも一種の擬人名か。

460 平皿をやつとあくる日思ひ出し

細井 平皿を何処に仕舞つたのか忘れてしまひ、いくら探しても見付からなかつた平碗の置き場所を、事の終つた翌日になつて、やつと思ひ出した。「なあんだ、こんな所にあつたのか。」

愛想にいつたののに平をかへ

一三9

小栗 いわゆる「平」（煮物）のことだと思つた。

天六松3

ただ、句意はよくわからない。何の料理だったか忘れてしまつたということか。或は送り膳にするのを忘れたか。

清 酔つぱらつたのではなからうか。食べた平の料理の内訳を、翌日になつてよう／＼思ひ出した、というのは。

愛染帖

新家 完司選

(投句281名)

倉吉市 大羽 雄大

昼抜いて飢餓状態に置いてみる

(評) 難民たちの苦しみを体験し、この世界の矛盾と非情、そして、自分の幸運を悟る。リセットした腸に晩酌が込み渡るだろう。

長岡京市 山田 葉子

家庭内サービス残業減らしたい

(評) 句会が迫っているのに炊事洗濯に加えて雑用アレコレ。過労死せぬうちに労働条件を改善してもらわなければならない。

高槻市 片山かずお

真剣に折ろう叶うこともある

(評) 神仏の存在は不明だが、人智を超えた物の怪の気配はする。真摯な姿勢は鬼神にも伝わり、稀に叶うこと無きにしもあらず。

藤井寺市 鴨谷瑠美子

転けるなど言われただけの診察日

(評) 五臓六腑も脳も年齢相応。案ずることはないが骨が脆くなっている。転んで腰の骨でも折れると大変。くれぐれもご注意を！

松山市 栗田 忠士

まだ男前立腺はないけれど

(評) 広く世間に公表するほどのことでもありませんが、前立腺摘出後も男性機能は失っておりません。くれぐれもご注意ください。

榎原市 安土 理恵

「くるるさま」と切るセールの電話

(評) 「うるさいなあ」という腹立ちを抑えて相手を労わる。長年の修行を経て到達した達人の境地。見習わなければならない。

和歌山市 古久保和子

栗こはん皮剥く人と食べる人

(評) 秋の味覚の代表「栗こはん」。うまいうまいと食べてくれるのは嬉しいが、皮を剥くのが大変だということ、解っているのか？

横浜市 菊地 政勝

ラッシュにもひたすらスマホ見て耐える

(評) 右手に吊り革、左手にスマホ。ギューギュー押されるがまま、ひたすらスマホ画面に集中。現代を象徴するヒトコマ漫画。

鳥取市 山野すみれ

簡単に飛んで行くのね綿毛って

(評) 特にタンポポの綿毛。少しの風でふわりふわふわ軽々と飛んで行く。私たちが修行を積めばあのような心になれる、かも…。

寝屋川市 岡本 勲

言葉よりやつぱり金がありがたい

(評) 助言も慰めも有り難いが、金の代わり

にはならない。この世の困り事の九割以上は金で解決できる。人を生かすも殺すも金。

藤井寺市 太田扶美代

美しいスーツ見苦しい答弁

東大阪市 北村 賢子

一枚欲しい女性議員の面の皮

宝塚市 岸田 万彩

トランプに愚いたキツネを払いたい

三田市 野口真桜子

横車押せばお金が降るらしい

豊橋市 高柳 閑雲

気取り過ぎただのファッションショーじゃない

尼崎市 清水久美子

つまみ食いしてニンニクを撒き散らす

三田市 北野 哲男

クラス寝に帰る頃から出る元氣

横浜市 川島 良子

ハラハラと散っていくのか古希の恋

尼崎市 市坪 武臣

ゆるキャラの妻が必死にベダルこぐ

大阪市 田中ゆみ子

良いところ私にだつてあるはずだ

豊橋市 藤田 千休

外来種も歓迎します過疎の里

鳥取市 福西 茶子

片想いだけなら罪に問われない

神戸市 細川 花門

J Aで見積もりを取る家族葬

藤井寺市 鈴木いさお

お前もかそうかと笑い合ういは痔

海南市 小谷 小雪

皺の手にクリーム塗るとやる気出る

沖繩県 森山 文切

煽られて本気を出したウエブサイト

鳥取県 門村 幸子

やさしさに触れるとこぼれ出す涙

伊丹市 延寿庵野鶴

目のワイパー止まらず泪溢れ出る

加西市 山端なつみ

遺影撮りお棺も入り死に慣れた

川西市 山口 不動

この頃は畳に椅子が流行る店

図書館にくつろぎの席空いている

スイスにて安楽死する選択肢

岡山市 永見 心咲

釣り堀のさかな虫よりうどん好き

池田市 太田 省三

ウォーキング空氣の味も判りだす

無理筋が本筋破るへボ将棋

酔っぱらいの歌が痴漢を遠ざける

弘前市 今 愁女

ジェネリックにするか薬局訊いてくる

安くても未だ馴染めないジェネリック

豊中市 水野 黒兎

五、四、三そして二人に減る会話

十二月八日レノン忌午朗の忌

三田市 久保田千代

これからも個々の時計で一つ屋根

河内長野市 黒岩 靖博

何事もダメダメダメの妻のくせ

松山市 郷田 みや

地下街で飛ばないタンポポの綿毛

弘前市 高瀬 霜石

言い勝ってみたってロクなことはない

大阪市 平井美智子

手の届くところへ置いておく明日

堺市 羽田野洋介

心身を鍛え直せばまだいける

大阪市 大川 桃花

ご挨拶したつもりだが通じない

公約を信じた頃もあったけど

里山を歩くと治る不眠症

岡山市 丹下 凱夫

コスモスと秋刀魚なくてはならぬもの

休刊日新聞受けを確かめる

大阪市 谷口 義

おばあさんが相談に行くおばあさん

友だちが生きているなら生きてたい

鳥取県 竹信 照彦

何回写しても年寄りが写る

追いつけど平均寿命また伸びる

大阪市 岩崎 玲子

親戚が来る日仏壇チヨールきれい

誕生日いつも心を入れ替える

笠岡市 藤井 智史

児童たちお堅い頭割ってくる

佐賀県 真島久美子

革命が起こる前頭葉辺り

松江市 石橋 芳山

電波法違反の甲高い笑い

青森市 守田 啓子

芒ばやばや生き残るという罰ゲーム

鳥取市 上山 一平

祖母思う掬う銀飯でんこ盛り

岡山県 紫 しめの

ミシユランに載せたい母のにぎり飯

宝塚市 丸山 孔一

岩おこしリボンを掛けて喜寿祝い

東京都 川本真理子

番犬のままで惜しいうちの犬

堺市 加島 由一

手のひらにメモ書きをするいい言葉

鳥取県 斉尾くにこ

ギョツとする自分と出合う古手帳

奈良県 長谷川崇明

顔合わせ鏡の中で笑いあう

大阪市 栃尾 奏子

セールですショートケーキも私も

米子市 竹村紀の治

ぶらぶらと路銀が続くまでの旅

松山市 柳田かおる

人間に飽きたら雲と話する

息抜きのはずが虜に575
神戸市 山口 光久

川柳で生命線を絆いでる
鳥取県 橋本 整

川柳にもある傾向と対策
三田市 多田 雅尚

閃いて消えた一句を探す朝
高槻市 島田千鶴子

川柳の至福タイムは居酒屋で
沖縄県 禰 ももと

武者修行するたび増える没の山
鳥取市 谷口回春子

五七五で私の寿命延びてきた
鳥取市 山下 凱柳

年金日サンマ二匹を焼いている
和歌山市 北原 昭枝

バスワードずっと出てきたことがない
大阪市 高杉 力

好きということが私の駆動源
河内長野市 山岡富美子

太る質やつぱり食べているのです
尼崎市 山田 耕治

安楽死たのめる所ないかいな
香芝市 大内 朝子

丹前を掛けられ動く老いの夜
唐津市 坂本 蜂朗

蛇キライ悪さをすると食べちゃうぞ
鳥取市 前田 楓花

葬儀社はさすがカタカナ多用せぬ
京都市 都倉 求芽

オバチャンのしゃべくり路線不況無し
河内長野市 大島ともこ

一線を皆越えたがり多重事故
那覇市 前川 真

タクシー代惜しみやつぱり濡れ嵐
堺市 矢倉 五月

裸婦画前でサイドブレーキ引く老爺
河内長野市 坂上 淳司

バアさんを写す鏡の高笑い
三田市 上垣キヨミ

片耳で妻の文句を聞いている
神戸市 上田 和宏

鉄砲玉ねメモ一つでもおいてつて
枚方市 小林 わこ

横顔はモナリザ似よと笑う妻
福井市 伊藤 良一

目覚めよし眼科検診今日行こう
箕面市 広島 巴子

ライバルは自分と思ひ四股を踏む
田辺市 岡本 昇

べたんこのマクドナルドの肉とパン
豊中市 木藤こみつ

充分に間違いをしたこれからも
松江市 相見 柳歩

辛辣な言葉に折れた傘の骨
紀の川市 宇野 幹子

ミサイルの海に怯えている夕日
岡山県 山縣のぶ子

ミサイルがくるたびかぶるヘルメット
堺市 遠山 唯教

平和ボケ覚ましてくれる北の国
宝塚市 太田としお

北の国にお手上げですかCIA
大阪市 江島谷勝弘

核でなく蹴鞠で勝負出来ないか
大阪市 田浦 實

天気雨金木屋が匂いたつ
大阪市 森 廣子

害悪と貶すタバコを何で売る
唐津市 山口 高明

食欲の秋に備えてダイエツト
三田市 村田 博

ヘルシーが売り物足りぬバイキン
河内長野市 木見谷孝代

妻はデイ私は椅子で昼寝する
米子市 生田 和之

祭り馬鹿そんな男もいなくなり
和歌山市 上田 紀子

若者の耳にはイヤホンのバリア
河内長野市 森田 旅人

音痴でも持ち歌二三ポケットに
八幡市 今井万紗子

「戦友」を歌うと父母が顔を出す
鳥取市 田中 天翔

高槻市 原 洋志
秋どうぞまだ散らかしたままですが

三原市 笹重 耕三
そこそこの秋を肴にいい地酒

三田市 上田ひとみ
熱燗をひとくち含み「あゝ」の幸

橋本市 石田 隆彦
街チラシ不意の誘いに大ジョッキ

姫路市 古川 奮水
これからビール貴殿は灘ですか

鳥取市 岸本 孝子
今年また大吟醸で松葉蟹

岡山市 藤成 操江
秋祭りご神酒だから飲めと言う

大阪市 井丸 昌紀
三合で笑い五合で怒りだす

鳥取市 夏目 一粋
時計から逃れのんびり宵の酒

寝屋川市 伊達 郁夫
屋台酒騒いでみたい今日の首尾

岡山県 池田たか子
休肝日破る言い訳多過ぎる

大阪市 大治 重信
発泡酒 家内の葉によく合つて

弘前市 稲見 則彦
家飲み色気サービス期待せず

三木市 山口ヨシエ
満月の笑顔うれしいひとり酒

府中市 岸田 武
焼酎が唄ったあとが僕の番

羽曳野市 吉村久仁雄
いい汗とおいしい酒で日を満たす

貝塚市 石田ひろ子
代行運転券も添えて招かれた

京都市 榎本 宏子
午前様そろりそろりの音がする

羽曳野市 中川ひろ介
ゆつくりと熟成させる薬膳酒

塩竈市 木田比呂朗
飲み会の序列を付ける十二月

奈良市 尾畑なを江
寒いので熱燗飲んで早よ寝よか

鳥取市 池澤 大鯨
あきもせずまたも宿酔い傘寿なり

芦屋市 黒田 能子
どこだろううまく隠れた探しもの

鳥取市 大前 安子
忘れ物にこにこにこと現れる

堺市 村上 玄也
野球中継喋り過ぎるぞアナウンサー

豊中市 松尾美智代
雑草と格闘しては負けている

堺市 澤井 敏治
スチャラカな僕でも受ける内視鏡

米子市 中原 章子
不明の子見つかるニュース貰い泣き

シドニー 坂上りのり子
ちょっと寄られて困る友あり長話

熊本市 杉野 羅天
もう誰も豪快でない古希の会

弘前市 高森 一吞
ヤッコラセととぼ喜寿がやって来た

富田林市 中井 アキ
施設のはなし一寸息子に言うてみる

堺市 内藤 憲彦
記憶力維持するガムを大人買い

西子市 黒田 茂代
ランダムに咲こう狂い花のように

三原市 鴨田 昭紀
汗かかぬ人が定める労基法

宝塚市 田中 章子
うふふよりあははと笑う人が好き

高槻市 初代 正彦
LED慣れてはやける有り難味

沖縄県 宮 すみれ
腰掛けて団子になって見る夕日

男鹿市 伊藤のぶよし
釣れぬ日は鰯雲さえ知らんふり

防府市 坂本 加代
目覚ましも眠りこけたか遅刻する

松原市 森松まつお
戦略として振り撒いておく噂

大阪市 柴本ばつは
十二月やっぱり鯛のアラですね

共選欄

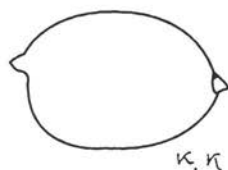
檸檬

檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 377名)



「頼る」 山口 光久 選

頼られても困る先立つものがない
スマホほど頼りにされぬ親である
父ちゃんは頼りないけど所帯主
子も利子も年金さえも頼れない
頼りない人だが子供には人気
食べて寝るだけの年金だが頼り
頼り合う だつてお互い要支援
夫同伴重い荷物を運ばせる
予報士が言うから布団干している
老いふたり親に逆らう子に頼る
点滴に頼り命を預けてる
頼まれてパンツのゴムになっている
独り旅ガイドブックに頼り切り
階段の手すが頼り寺詣り
頼られて困惑顔の膝頭

大阪府	古今堂蕉子	大阪府	寺川 弘一
大阪府	原田すみ子	枚方市	奥園 敏昭
池田市	能勢 利子	神戸市	岸本 宏章
鳥取市	川本真理子	東京都	若松 雅枝
奈良市	大久保眞澄	神戸市	山崎 武彦
横浜市	菊地 政勝	松江市	石橋 芳山
松江市	富山ルイ子	松江市	山下 明子
弘前市	稲見 則彦		

「頼る」 斉尾 くにこ 選

そうやったねなんて私に振らないで
仕置き人中村主水もういない
孫が来る頼り無さそな彼連れて
メカ一切孫に頼っている故障
妻の留守二日で頼るカップ麺
ロボットの目に人間は頼りない
頼られて働き蜂の役が好き
頼るより自分一人ですてしまう
頼りない我が家に私が入れる喝
頼むよとひとまず家族には呪文
頼られて困惑顔の膝頭
二人合わせて半人前で生きてます
頼られることで母親感じてる
頼つてた人の介護をする誤算
この拍手信頼してもいいですか

奈良市	大久保眞澄	高槻市	原 洋志
雲南市	菅田かつ子	寝屋川市	森 茜
鳥取市	加藤 茶人	大阪府	升 成好
鳥取市	岸本 孝子	堺市	齋藤さくら
生駒市	飛永ふりこ	羽曳野市	徳田みつこ
羽曳野市	稲見 則彦	弘前市	三好 専平
岩出市	藤原ほか	富田林市	山野 寿之
大阪市	柴本ばつは		

頼られる兄も借金かかえてる
頼られて母の役目は終らない
適当に頼る親子の車間距離
三途の川自分頼りに渡り切る
一人では何もできない年になり
助産婦に頼り切ってる初産婦
頼らぬと怒り頼ればすぐ逃げる
守るからと口説いた妻を頼ってる
頼るのは酒一合に万歩計
一本の薬を頼りに再起する
監視するカメラに頼る街の自治
好き嫌い言ってられない嫁不足
頼る人いっぱい欲しいおんな坂
貴方だけと聞けば財布もつい緩み
自制心だけが頼りの独り者
最後には頼られている太っ腹
ひとことが欲しくてただ泣いている
頼るのは夫とお金他に無い
幸せは寄りかからない自立心
頼られて繋ぐこの手が離せない
雑草を見習い人を頼らない
家を出た子も頼られる秋祭り
外国人頼りにしてる介護の手

佐渡市	高野	不二
和歌山市	定松	安枝
南あわじ市	萩原	狸月
西宮市	亀岡	哲子
羽曳野市	三好	専平
倉吉市	岡崎美知江	
寝屋川市	伊達	郁夫
四条畷市	吉岡	修
那覇市	前川	真
枚方市	海老池	洋
高槻市	富田	保子
岡山県	紫	しめの
三木市	山口ヨシエ	
三田市	多田	雅尚
池田市	上山	堅坊
大阪市	近藤	正
三田市	上田ひとみ	
鳥取市	前田	楓花
さいたま市	星野	育子
出雲市	伊藤	玲子
出雲市	岸	桂子
奈良県	長谷川崇明	
堺市	村上	玄也

母校から寄付金趣意書だけが来る
盲導犬スキンスリップでありがとう
白杖を頼りに今日も帰宅の娘
必要とされれば頼み受けて立つ
若者に頼られ自信取り戻す
食卓に明日の予定は貼って寝る
傘寿来て長男の俺全うす
断捨離も妹頼る闘病中
頼らない男の胸が温すぎる
凭れ合いじゃれ合い酒とふたり連れ
頼るのは酒一合に万歩計
頼られて欲しいほっといても欲しい
頼らない人だと言われほっとする
室外機に頼るしかない室内機
日の丸は頼りきってる星条旗
この足に一生頼る趣味があり
神は居る障害越えた金メダル
階段の手すりが頼り寺詣り
頼るのは僕しか居ない妻を見る
頼りたいひとには可愛い妻がいる
いやだとは言えぬ性格見透かされ
頼らない人だが子供には人気
両の手を親と息子に頼られる

神戸市	上田	和宏
藤井寺市	田付	絹枝
大阪市	藤原千恵子	
和歌山市	上田	紀子
奈良県	安福	和夫
奈良市	高橋	敬子
鳥取市	池澤	大鯰
大阪市	津守なぎさ	
和歌山市	古久保和子	
米子市	竹村紀の治	
那覇市	前川	真
三原市	鴨田	昭紀
大阪府	神野千恵子	
松江市	中筋	弘充
弘前市	高森	一吞
大阪市	榎本日の出	
鳥取市	坂本とも湖	
神戸市	山下	明子
弘前市	富士	慕情
鳥取県	石谷美恵子	
大阪市	古今堂蕉子	
神戸市	能勢	利子
高知県	小澤	幸泉

盲導犬スキップでありがとう
頼りがいありそう彼の厚い胸
頼ってはおれぬリハビリ励む老い
頑張って来ました後は神頼み
頼っていた大きな松が枯れました
メカ一切孫に頼っている故障
頼られて背骨が軋みだしている
まだ逝けぬわたしを頼る人がいる
これからは主治医頼りの癌治療
頼りたいひとには可愛い妻がいる
頼られて男の美学光り出す
頼られた脛が日に日に細くなる
究極は神が頼りの命の灯
信頼が老朽化して剥げ落ちる
いざという時の頼りは両隣り
難病が頼る i P S 細胞
瀬戸際でやっぱり神の戸を叩く
長男の扶養家族にしてみらう
頼られたばかりに闇が深くなる

秀句

藤井寺市	田付	絹枝
八王子市	川名	洋子
和泉市	横山	捷也
大山市	金子美千代	
枚方市	小林	わこ
寝屋川市	森	茜
豊橋市	高柳	閑雲
和歌山市	福井	菜摘
西予市	黒田	茂代
鳥取県	石谷美恵子	
広島市	松尾	信彦
和歌山市	磯部	義雄
松山市	栗田	忠士
枚方市	丹後屋	肇
鳥取県	児玉	規雄
鳥取県	伊藤	寿美
大阪市	升成	好
鳥取市	土橋	螢
鳥取市	倉益	一瑤
弘前市	高瀬	霜石
佐賀県	真島久美子	
紀の川市	宇野	幹子

頼らない字だが頑張りますとある
泣かせた子頼り苦労をかけている
生きているだけで頼りになるらしい
磨りガラス頼る少しの羞恥心
愛犬に猛犬からの盾にされ
末期延命どうぞ勘弁主治医殿
正信偈上げる回数増えました
被爆国頼みの綱は核の傘
外国人頼りにしてる介護の手
愚か者が最後に頼る核兵器
神様に頼ろう今日は大安日
居眠りの首は頼れる人に落ち
頼るのは上手くて手ぶらです私
長男の扶養家族にしてみらう
頼れないが君に貸す手はたとある
免許返納明日から頼るバス路線
眠られぬ夜に繙く哲学書
まだ逝けぬわたしを頼る人がいる
頼られる兄も借金かかえてる

秀句

東京都	川本真理子
大阪市	奥村
八尾市	村上ミツ子
堺市	矢倉
大阪府	中内
香南市	彦彦
香南市	桑名
大阪市	田浦
豊橋市	藤田
堺市	村上
弘前市	高瀬
大阪市	平井美智子
佐賀県	真島久美子
大阪市	栃尾
鳥取市	土橋
八幡市	今井万紗子
青森県	松山
河内長野市	村上
和歌山市	福井
佐渡市	高野
枚方市	寺川
大阪市	大川
横浜市	菊地
	政勝

英語 de Senryu ⑦②

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

君・君・憂鬱を配つてあるくのは 止せよ

Hey, you!

*stop pushing your melancholy
on your friends*

月末の 金さえ渡しや 出てあるき

he enjoys going out

*handing expenses to his wife
at the end of month*

<i>hey</i> (主に男性語、女性は通例 hi) おい	<i>stop</i> 止める	<i>push</i> 人に押し付ける
<i>melancholy</i> 憂うつ	<i>go out</i> 外出する	<i>hand</i> 手渡し <i>expense</i> 手当 経費

〜リバーウィローのため息〜世界の川柳・俳句⑫ 俳人でフォークアーティスト

スラワ・シビガ (Slawa Sibiga, Poland)

2015年にクラコウでスラワ・シビガに初めて会った時、旧友のような親愛感がお互いにわかりました。彼女の作る祖母伝来のフォーク・アートに魅了されました。特にレース編みの天使は素晴らしく独創的で近在に暮らす小学・中学生にも教えています。彼女はポーランドハイク協会創立時からのメンバーで、ポーランドのハイクコンクールの審査委員も務めています。ポーランドの著名な日本文学者、梅田アグニエシカによってポーランド語から日本語に翻訳した作品が日本の俳句結社誌「葛」に掲載されています。スラワはポーランド語による5冊の詩集と、6冊のハイク集の著者でもあります。その一つ *Dream about Japan* から数句引いてみましょう。

summer solstice—/ first night bath/ in the moonlight

(夏至 月明りの中で夏一番の入浴)

full moon/ our ways/ connecting

(満月 二人の道は繋がって)

garden session/ in the bridal bouquet/ a cherry petal

(庭での宴 花嫁の花束に 一片の桜花)

he charms me again—/ moon at dawn/ in the summer sky

(彼はまた私を虜にする 夏の夜明けの月)

「強 氣」

(投句 224名)

松 岡 篤 選



困っても顔には出さぬ母強氣
不安消すように強氣の眉を描く
豪傑も青葉に塩の癌告知
前後ろシングルマザー子を乗せて
発言は強氣ホントは無い自信
強情で強氣な祖父も孫に媚び
いつだって己を曲げぬ五寸釘
後ろだてであると大きくなる態度
優しさが強氣の妻に見え隠れ
出来ぬ子を強氣にさせたドラえもん
ツイッター匿名なので超強氣
諭吉さえおればなんとかなるこの世
一人居の強氣に忍びよる孤独
彼の電話に娘の強氣消えている
借金だらけそれでも笑顔してた母
叱咤する強氣の裏で手を合わせ
お洒落すりゃ鏡の中の腰も伸び
伝統を守り強氣でいる老舗
産んでから一步も引かぬ面構え
強がりが冷や汗をかく蛇に会う

豊中市 松尾美智代
神戸市 富永 恭子
富田林市 山野 寿之
八王子市 川名 洋子
高槻市 片山かずお
藤井寺市 田村 絹枝
高槻市 初代 正彦
防府市 坂本 加代
神戸市 能勢 利子
犬山市 関本かつ子
三田市 谷口 修平
宝塚市 岸田 万彩
三田市 尾崎 一子
河内長野市 原熊知津子
鳥取市 池澤 大鯨
高槻市 富田 美義
大阪府 畑中 節子
和歌山市 土屋起世子
大阪市 長高 俊雄
茨木市 藤井 正雄

欲しいもの何にもないと言う強氣
築百年にらみを利かす鬼瓦
懐に二次会までの軍資金
大丈夫コンビニがある妻の留守

迷いながら強氣で生きた子育て期
手遅れだが強氣で生きたかったなあ
借りた猫二日もすると主の顔

勝つんだと強氣で挑むへば将棋
強氣でも彼には勝てぬ棒グラフ
強引に意志を貫く三歳児

強氣でも後姿が震えてる
笑えない強氣が徐々に気にかかる

城守る強氣な寡婦の束ね髪
肩書きの強氣は昨日までのこと
まだまだと言った父の呆気なさ

大風呂敷広げて畳めなくなった
テレビ出て馴染みの店が値上げる

佳 句

神仏を忘れて過ごす絶頂期
あどけない顔で強氣の一手指す
百歳を定年と決め生きている
あの強氣酔いが醒めたら霧になり

人

地

天

軸

大阪府 米澤 淑子
紀の川市 宇野 幹子
札幌市 三浦 強一
三田市 堀 正和
松戸市 山下 明子
大阪市 江島谷勝弘
弘前市 稲見 則彦
大阪府 坂 裕之
大阪市 奥村 五月
岩国市 上村 夢香
高槻市 富田 保子
東京都 川本真理子
和歌山市 福井 菜摘
南あわじ市 萩原 狸月
藤井寺市 太田扶美代
大阪市 田中ゆみ子
川西市 大坪 一徳
三田市 福田 好文
河内長野市 中島 一彌
四条畷市 吉岡 修

「 笛 」

(投句 227名)

上 田 ひとみ 選



大の字で雲に聞かせる草の笛
鳩笛のとはけた音に癒やされる
復興の笛に太鼓でリードする
こころざしを貫くための笛を吹く
踊る日も切ない日にも笛を呼ぶ
秋まつり笛吹く孫を肩車
笛吹けば踊るかわいいおんなです
ピーヒャラ村はちよっぱり若返る
笛を吹く役が重たくなる齡
横笛が聴こえる頬に手を寄せる
スタートの笛がこわくていつもビリ
指笛で抗議している基地の町
酔う前に笛吹かぬ間に踊り出す
笛吹いて息をわたしの音にする
難題が解けて口笛そつと吹く
望郷の祭り帰心の笛太鼓
ホイッスルさあさあ恋を始めましょ
神さまと一緒に踊る祭り笛
枯渴した心を起こす笛が鳴る
姉さんの笛はやさしいドレミファソ

男鹿市	伊藤のぶよし
松原市	森松まつお
倉吉市	大羽 雄大
岩国市	上村 夢香
那覇市	前川 真
三田市	北野 哲男
京都市	榎本 宏子
羽曳野市	徳山みつこ
鳥取県	竹信 照彦
篠山市	酒井 健二
神戸市	能勢 利子
和歌山市	磯部 義雄
大阪市	古今堂蕉子
明石市	梶谷 和郎
池田市	上山 堅坊
富田林市	山野 寿之
笠岡市	藤井 智史
枚方市	寺川 弘一
神戸市	富永 恭子
三木市	山口ヨシエ

口笛を妻とデュエット退院日
笛吹いた人が責任とりましよう
笛ひとつ客を束ねるバスガイド
同じ笛持って聖者の行進だ
看取る手を休め聞いている祭り笛
口笛を吹いて寂しくなってみる
人界に文句あるのか虎落笛
笛吹いた私が消えるかくし芸
口笛がサイクリングを弾ませる
ハメルンの笛吹きがいる北の国
草笛が止んだ辺りで飛ぶホタル
笛の音はもはや迷ってなどいない

佳 句

スキップと口笛で行く初デート
麦笛を上手に吹いて独りなり
笛太鼓ふるさとの駅通過中
草笛に切ない恋を語らせる
辻褄を合わせるために笛を吹く

人

終了の笛にドラマが託される

地

ふさぐ日も寄り添って聞く胸の笛

天

売り切れで口笛吹いて帰る俺

軸

そろそろと仕舞っておいだ笛を出す

福井市	伊藤 良一
奈良市	大久保眞澄
豊中市	水野 黒兎
佐賀県	真島久美子
高槻市	原 洋志
大阪市	高杉 力
尼崎市	清水久美子
大阪市	笠嶋 恵美
広島市	岸本 清
弘前市	高瀬 霜石
弘前市	福士 慕情
沖縄県	森山 文切
横浜市	菊地 政勝
大阪市	田中ゆみ子
長岡京市	山田 葉子
唐津市	坂本 蜂朗
神戸市	上田 和宏
松山市	栗田 忠士
大阪市	小野 雅美
高槻市	富田 美義

初級教室

題一 ヒント

居谷 真理子

「外来語の題だと投句数が減る」、新聞柳壇の選者にそう聞いたことがあります。今月の課題は「ヒント」。作りにくかったでしょう。そんな時はまず辞書を引いて下さい。「ヒント」暗示。示唆。目的に至る助けになる情報。手持ちの広辞苑にはこのように書かれています。次に「暗示」や「示唆」を引いてみる。こうしてイメージを広げていくのも一法でしょう。普段使わない言葉にも出会えますし、どんな時も辞書は力強い味方です。

(原は原句 参は参考句)

原考えるヒント先ずは辞書を引く 孚彦
くだくだしい前文を一句にして下さいまし
た。中六が残念です。

参まず辞書にヒントもらって考える
原難問もヒントひとつですらすると 三樹夫
一字だけ変えてみました。比べて下さい。

参難問がヒントひとつですらすると

原多すぎるヒントはヒントなしみたい 敏昭

参多すぎるヒント結局役立たず

原考古学探す欠片で知る歴史 崇明

参考古学欠片が語るものを聞く

原九十歳にヒント頂くボケ防止 (高)道子

参九十歳にボケぬヒントを頂いた

原長寿へのヒントは食事腹八分 一雄

参腹八分それが長寿の秘訣とか

原長生きのヒント一病息災か 隆子

参一病がくれる長生きへのヒント

原補助線をひいて自立へヒント出す 旅人

参補助線を引いて自立へ送り出す

原原点に還り溢れていたヒント (小)雅美

参原点に還ればこんなにもヒント

原それとなくもらったヒント又迷う (東)美智子

参さがりなくくれるヒントが迷わせる

原川柳のヒントひ孫が考へる (山)久子

参川柳のヒントひ孫がくれました

原変わりゆくヒントを与えテレビ行く 勝治

参次々と変わるヒントがテレビから

原よく見ればヒントの山におはれてる 一平

上五が分かりにくいです。

参参真面目がヒントの山におはれてる

原先生は生徒にあったヒントする まさる

参それぞれの生徒に合わせ出すヒント

原かたむけて聞いた話にあるヒント 昭枝

「かたむけて」…何を傾けたのでしょうか。

耳を傾けたのなら

参じっくり聞いた話にあるヒント

首を傾けたのなら

参眉つばで聞いた話にあるヒント

原ゆるむ脳ヒントください活入れてくみ子

参活入れるヒント下さいこの脳に

原あのサインヒントだったか見落とした 雄大

参あのサインヒントだったといま気付く

原真つ直ぐに生きるヒントをくれた父 整

お父様の姿を大きく描写しました。

参真つ直ぐに生きるヒントは父でした

原羅針盤なき海進む日本丸 洋一

参羅針盤なく大海に日本丸

原ヒントなどいらぬと意地を張り続け 美枝子

意地を張っているのは私？私以外の人？

自分のこととして詠んでみました。

参ヒントなどいらぬゆつくり考える

原ノウヒントきびしい中に母の愛 (貝)正子

参ノーヒント母の厳しい愛でした

原着物服ヒント上手はめられる ミヨノ

参 着物からヒントもらって洋服に

原 読書して今後のヒントもらって ひと

参 読書から貰うヒントの二つ三つ

原 自然からヒントをもらい種を蒔く こずえ

農作業の句をよく作られるこずえさん。自

然の大きさを詠み込んで

参 天と地にヒントもらって種を蒔く

原 あにのヒント教えてもらいまた迷う 不二夫

参 あにのヒント僕を迷わすためだろう

原 孫に出すヒントは甘く打算的 一 彌

孫と説明せず読者に想像させましょうか

参 嫌われたくなくて甘すぎるヒント

原 顔の皺かくす眼鏡が派手すぎる 燭 節 子

投句された2句とも「ヒント」から遠いよ

うに思います。

参 皺隠したいなら派手なこの眼鏡

原 ノーヒント自分流の暮しぶり 由 紀 子

原 ひと言のヒントが私を前向かす 開 子

由 紀 子さんは中六、開 子さんは中八。音読

してみるとリズムの崩れに気付きます。

参 ノーヒントわたくし流の暮しぶり

参 私を前を向かせたワンヒント

原 笑い皺ヒント沢山秘めている 大 安 子

このままでもいいのですが

参 笑い皺ヒント沢山うずめてる

原 見逃したヒント探しの同窓会 み ち 子

参 同窓会いままら分かるあのヒント

原 頂きでヒントないかと四方見る 勝 正

参 天辺でヒント探して見る四方

原 助けより迷路に嵌り込むヒント 紀 美 代

参 より深く迷路に嵌り込むヒント

原 貴女だけにヒントを出すが無反応 清 司

参 貴女にだけ出したヒントを無視される

原 メロディがまざまざ情景呼び起こす のぞみ

参 メロディがまざまざあの日呼び起こす

原 百均の売場グルリでヒント来た 厚 子

情景を説明しすぎたようです。ある新聞の

柳壇にあった次の句をご参考に。

参 百均の棚にヒントが山とある 胡 内 敏 雄

原 ヒント出しそれでも次もヒント出す 高 弥 生

参 正解が出るまでヒント出し続け

原 あっしまったヒントのつもり先を言い 山 明 子

上五が面白いですね。

参 あっしまったヒントじゃなくて答言い

原 捜しものヒントをあつめ見つけた 田 廣 子

参 捜し物まずはヒントを探してる

恵 子さん、課題を勘違いなさったようです。

掲載できませんが悪しからず。

【佳 句】

献立のヒントを貰うコマージュナル (見) 温 子

私のドジをヒントに詠む一句 (生) 和 之

花言葉ヒントに贈る紅い薔薇 里 子

北斎にヒント貰ったゴッホの絵 のり 子

子育てのヒント子供からもらう 美 穂

雑談に生きるヒントの天ご盛り (門) 幸 子

やる気さえあればヒントはどこにでも 治 子

ライバルがくれるヒントは横に置く 真

【今月の推せん句】

第三ヒント出てもアレソレしか出ない

山 端 な つ み

金正恩に悪知恵つけている誰か

木 藤 こ み つ

抜け道は六法の中夜が更ける

長 高 俊 雄

平成二十九年初歩教室年間賞

どんぐりの格差ができて仲間割れ

返す気があれば千兆借りません 大 阪 市 横 山 里 子

池 田 市 奥 園 敏 昭

臘月夜キザなセリフの一つでも

河 内 長 野 市 中 島 一 彌

川柳塔鑑賞

同人吟 中居善信

—11月号から

百までも生きてひよっこり雲に乗る

亀岡哲子

おとぎの国へ母は還って行きました

鈴木いさお

人生五十年と言われた頃からすると随分と長生きができる、有り難いことだ。百までも生きて雲に乗る。おとぎの国へ還る、賑やかに通夜ができる。僕も出来ることなら、そこら辺まで生きたい。

ムスカシイこと言う底の浅い奴

高瀬霜石

そうかも知れない、知識の豊富な人は黙ってにこにこして聞いているのかも知れない。そして落とし所を心得ている。世の中そんなものだろう。

風の子が遊んでたんだ吹き溜まり

安土理恵

原風景は昭和の初期、僕たちの子供の頃だろう、まだ貧しいころの景色が見える。みんな風の子だった。

種のある方が巨峰の味がする

辻内次根

今市場に出ている野菜も果物も全部品種改良がされて、見た目にはおいしそう。だが牛蒡の持つ風味、キュウリのむん

むんするあの匂いはもう持っていない。確かに種のある巨峰が味は優っている。

自らを汚してしまふ百合花粉

居谷真理子

詠まれてみると確かにあの百合花粉は個性が強い。洋服に付着するとなかなか落ちない厄介な花粉だ。これを人に置き換えると確かに個性の強い人になる。

今ひとりでも反対の手を上げる

岩佐ダン吉

考えてみると僕も団子に成ることが好きでなかった。伊方原発の反対集会にも山鳥坂ダム建設にも反対を叫んだ。これは今後生まれてくる子孫に少しでも汚れてない地球を残してやりたいからで

あった。

正当化するのに喋り過ぎている

丹下凱夫

どこかの総理をふと思う。森友も加計も濃いグレーだと国民の大半は思っている。それを正当化するがために、的外れな返答をべらべら重ねる。お役所も見られては困る会議録なども、隠してしまう。これは真つ当な国とは言いがたい。

文句なしうまかつた福島の新桃

緒方美津子

思うんだ、30キロ圏に伊方を抱えている県民として、何かの間違いで事故でも起きたらどうなるのかと。

燃料の燃え滓の処理さえ確立されていない原発。だから反対と言ったんだ。福島を思うと胸が痛む。文句無しに旨かつた桃、福島が立ち直る切っ掛けのような気がする。

はしご酒締めは馴染みのラーメン屋

福士慕情

こんな事出来るのは元氣な証拠である。五十年前には月に一度くらいの間隔でやっていた、仕事にも張りがあった。傘寿にもなると無理が利かなくなる。特に心臓に欠陥が出来てからは無理をしない。

一度も役に立たずジスイズアベン

星野育子

戦後間もなく昭和二十四年ころ、これからは英語が国際語になるからと文部省が授業に取り入れた。ジスイズアベン、マイネームイズ、ヨシノブナカイ。教える方も教わる方も日本調である。あれから50余年、間違いなく英語が国際語になっている。

八十のハンドル捌きまだいける

早川遯行

八十の僕もまだ免許返納していない。前走るのろろを、見るとすぐ抜きたくなる。いえそれだけでは無いのです、過疎地で住んでいると、買い物、医者と何にも出来なくなる、軽自動車が手足なのです。

アンパンとビールがあればしあわせだ

江島谷勝弘

あんパンを三個も四個も食べていた、幾ら食っても糖尿には縁遠い。何を幾ら食っても血糖値は上がらない、ついつい食べすぎて八十キロ近くに体重が増えた。ダイエットしなくてはと思っていたら、胃ガンが見つかった。医者が言った胃の切除をしたら十キロは痩せると。そのとおり十五キロ痩せた、あれから三年半が

過ぎた。

再会は突然秋の交差点

栃尾奏子

再会と言うのは突然現れる。春であれ秋であれ、街角であれ交差点であれ。それはそれ。目があつた一瞬どんな目をするかが問題だ、昔のような目をすれば今夜は眠れない。

歯車の二つ軋んできたようだ

黒田能子

永い間使い古した五体、一つや二つ軋むのは普通、一〇〇人のクラスメートの三分の一は他界した。三分の一は重い病氣などしていて病院暮らし、後の三分の一が何とか元気でいる。クラスメートの報告です。

イブ・モンタンの枯葉が舞って街は秋

酒井真由

四季のなかで一番落ち着けるのが秋だ。特に枯れ葉が落ちて裸木になった風景は落ち着ける。まだ分厚いコートの要らない季節。柿の木には真っ赤に熟れた実が残る。写生ならB6で描いたスケッチのような風景。こんな風景は子供のころに誘ってくれる。母ちゃんは焼き芋をしてくれた。

背中にも表情のある反抗期

北野哲男

人間の表情は背中が表す。寂しいと言っている人。嬉しいと言っている人。背中が感情を表す。さて僕の背中は何と言っているんだろうか。

すきやきにしよう卵とネギがある

大久保眞澄

こんな物を句材にしてしまうのは、やはりペテランだからだろう。この頃のあるちこちの句を読むに、こんな軽さを詠んでる句は少なくなつた。塔だけにはこれが残っている。だから二十年も続けて詠んでいる。

切なくてただ切なくて曼珠沙華

懸命に生きていますと曼珠沙華

宮尾みのり

塔10月号にも「曼珠沙華君が恋しくなるのです」を発表されている。見送られた三人の近親者に対しての思いでしょう。曼珠沙華、この言葉にみのりさんの思いが込められている。

そこそこの美人と言われ気に入らず

西田美恵子

美人だよ、間違いなく美人だ。森久美子に似ている美人だ。笑顔がいい。

水煙抄鑑賞

— 11月号から

山崎武彦

疲れない距離にアナタがいてくれる

川島良子

好きだからだから文句も出てしまふ

伊藤良一

夫婦の距離をうまく捕えられました。

疲れない距離は人それぞれ、良子さんは阿吽の呼吸を心得ておられる。一方、良一さんは、文句が出るのは好きだからと言いつつ切られました。この二句からは、ほのぼのとした温かさを頂戴しました。

自転車のマナー免許を作らんか

上山堅坊

歩道ではなく、自転車専用道路を走れと学校では教えていると聞いている。車から見ると危険だと思うが如何でしょう。まずは自転車のマナーを徹底して教え、

交通事故を未然に防ぐことが重要と思う。

薄味に慣れてゆれてる正義感

横山里子

同感です。私も退院後、薄味に慣らされ、今では妻の手の中で踊っています。何だか自分の存在を否定された様で、一抹の淋しさが募ります。

道德教育センセイ方に要りそうな

長島亜希子

国会は倫理教育まずは先

山本三樹夫

二年生出来悪すぎる永田町

児玉規雄

三句を通して永田町の現状を余すことなく語られている。選挙が済んだから禿も済んだ訳ではありません。我々はこの国の明日を安心して任せられる人材を望んでいるのです。

体重計やせたら乗ろうとしまい込む

岩口のぞみ

解るわかる、その気持よく解ります。私なんか、腰とお尻の区別が付きません。

リンゴの様な私は、せめてラ・フランスほどでいいから括れが欲しいと願っているのです。のぞみさんご安心下さい。

核のない平和な地図を子に託す

玄番美恵子

危機管理磁石はいつも北を指す

九村義徳

前触れもなく、ミサイルが襟裳沖へ着弾しました。そんな脅威に曝されている我が国。このまま身の安全を米国に委ねていいのか、自問自答が続く。そして、我々世代の責任において核のない平和な地図を次世代に渡したいものです。

陽の恵み新芽と対話して飽きず

渡邊伊津志

ひこばえの新芽に背を押され、励まされている作者の姿が眼に浮ぶ。古木の切り口からまた新しい命が宿る。そんな情景をご自分に投影されたのでしょうか。「新芽と対話して飽きず」の下句が印象的です。納得の一句をありがと。



新子語録

今年は時実新子没後十年になり、各地で追悼の展示会などが催されていました。また、新葉館出版では「時実新子の川柳と慟哭」と題した作品集を刊行。その編集には川柳塔社同人の平井美智子さんが当たっています。

遺された膨大な作品から厳選された四百句余りも見ものですが、適切に配置された「語録」も興味深く、今回はそのいくつかを取り上げて感じたことを記してみます。

句意を正しく伝えるために、漢字を使うことに横着であつてはならない。

(1986年 秀句館)
作品の内容には時間をかけているのに「表記」に無頓着な人がしばしば見受けられます。例えば「あう」でも、「会う」「合う」「逢う」「遭う」「遇う」等があります。こまめに辞書を引いて、最適な漢字を使いこなすことも作句力です。

平凡を非凡に変えるのは、人の倍も三倍も人や物をみつめることである。心を隠さずに表白することである。正直に自分を出す。恥ずかしがらずに出す。裸になり切る。これがいつのまにか天分を作り上げる。(1988年 花の結び目)
ばんやり歩いていては何も発見できません。「人の三倍」も見詰めると疲れてしましますが、「何か発見してやろう」という気構えだけでも発見パワーが違ってきます。また、自分の恥を晒すことを避けていては川柳を生むことはできません。

「発想の目」「発見の目」が大切。魚眼レンズを持ち、諸諺の角度を素早く捕らえよう。(1988年 花の結び目)
「魚眼レンズを持つ」というのは、一つの方向だけではなく、多方面から見つめるということでしょう。また、「諸諺の角度を捕らえる」というのは、対象の中にある面白い部分を捕らえて突っ込む(穿つ)ことだと理解できます。

百人が百人に褒めてもらう句なんておおよそできるはずがない。(1992年 現代川柳)

人それぞれ性格も暮らしぶりも異なりますので価値観も川柳観も違います。複数の選者による共選の結果がバラバラなのはそのことを表しています。全員が褒めてくれる作品など有り得ません。半分の人が褒めてくれたら上等でしょう。

川柳は「もう一人の自分が自分を見る」という自己客観の文芸である。(1992年 新子座)

古川柳には「他人を見て嗤っている」内容が多く見受けられます。しかし、現代川柳は「今の自分の姿、今の自分の想いを表明する」のが主流です。自分の姿や自分の想いを掴むのはなかなか難儀なことですが、語録の「もう一人の自分が自分を見る」という意識がポイントなのかもしれません。

少し離れたところからジツと皮肉な目で見つめている「もう一人の自分の眩き」がそのまま川柳になりそうです。

新葉館出版・ベストコレクション・シリーズ「時実新子の川柳と慟哭」。新書版・98頁。千二百円＋税。

『川柳塔』の一行詩人・小島蘭幸論

—麻生路郎の人肌のポエジーを求めて—

文学博士・東京川柳会副主宰 平 宗 星

Ⅲ 一行詩人・小島蘭幸の一行詩

私は川柳の定型とは俳句の定型と異なり、「**在る**」ものではなく、「**成る**」ものである」と思っている。

俳句の定型は「五七五」という定められた音数を入れる「外在律」と呼ばれる様式をもった陶器のような器である。一方、川柳の定型は十七音という「一呼吸」の長さを定型と考える「内在律」と呼ばれる様式をもった風呂敷のようなものである。それは風呂敷のように句の内容によって変幻自在にかたちを変えるものである。つまり川柳の定型とは、「一呼吸」の長さの中で風呂敷のように句の内容によって様々な音数にかたちを変える「一行詩」の器なのである。

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

雲の峯という手もありさらばさらばです
私はこの二句が麻生路郎の代表的な「一呼吸の一行詩」であると考えている。

「子よ妻よ」の句では路郎の愛用語ともいえる「よ」の語が用いられ、子と妻に呼びかけている。この川柳のリズムは「三三八五」の十八音の「内在律」で構成されている。こうした「一呼吸」で詠まれた川柳を路郎は「一行詩」と呼んでいる。この句の底流には路郎の深い〈哀しみ〉がある。この「一行詩」こそ「人間の魂に点火する」詩性川柳なのである。

「雲の峯」の句を川上三太郎は路郎の「絶唱」と呼んでいる。路郎は自分の身に死期が近いことを悟り、この「一行詩」を作っている。これは「五七八」の二十音の「内在律」のリズムで構成されている「一呼吸の一行詩」である。路郎の「さらばさらば」の疊語は、それを読む者の胸を強く

く打つ。

小島蘭幸の次のような川柳は、こうした麻生路郎の「一行詩」の川柳観をよく反映しているものである。

風になるべきが一樹になるべきか

蘭幸のこの川柳では、ハムレットのようにな「風になるべきか」あるいは「一樹になるべきか」それが問題だと悩んでいる。この川柳は「八・九」の〈二句一章〉の十七音の「内在律」による「一呼吸の一行詩」である。

大好きな人と芒が原にいる

菜の花の中に涙は置いて来た

この二句も抒情あふれる「八・九」の十七音の「一呼吸の一行詩」である。

蘭幸のいずれの作品にも作者の深い〈想い〉がよく描かれている。私は、こうした作品に〈人肌のポエジー〉を強く感じる。

青空があるのに門が閉めてある

点滴のぼりと虹の輪になった

この二句は「九・八」の十七音の「一呼吸の一行詩」である。蘭幸の作品では、具象的な語に作者の〈想い〉が込められていることが多い。

「青空」の作品では、開放的な「青空」

の世界と閉鎖的な「門が閉めてある」世界が対照的に描かれている。

「点滴」の作品では、「点滴」のひとつ滴が「虹の輪になった」という表現に作者の「想い」がよくあらわれている。「ぼとり」の一語が、この句では効いている。

大往生の蟬が空から降ってきた

この川柳を読んで私はシェイクスピアの悲劇「ハムレット」で語られる「雀一羽落ちるにも天の摂理がある。」という科白を思い出した。この「七七五」の「一行詩」には作者の人生観が示されている。

走り続けて椿は赤く赤く咲く

この「七七五」の「一行詩」では、「赤く赤く」の疊語に作者の「想い」が強く表出されている。私はこの「一行詩」を読んで詩人・北川冬彦の「椿」と題する次の「短詩」を思い出した。

女子八百米リレー。彼女は第三コーナーでぼとりと倒れた。

この「短詩」は「リレー」で女子選手が落ちるように倒れる感じを赤い「椿」の花が「ぼとり」と落ちるイメージと重ね合わせて表現したものである。

蘭幸の「走り続けて椿」の川柳は、こ

の北川冬彦の「短詩」よりも一層、鮮烈な印象を与える「一行詩」である。

ベガサスも火の鳥も我が胸に棲む

この「五五五二」の「一行詩」では、作者の内に秘めた熱い「想い」がイメージ豊かに「ベガサス」や「火の鳥」の語を通して描かれている。

「ベガサス」はギリシャ神話に登場する天馬。この天馬は英雄ベルセウスが蛇の頭髮を持ち、これを見る者を石に化すというメドゥサを退治した時にその血から生まれたといわれる翼ある馬のことである。

また「火の鳥」はフェニックスと呼ばれるエジプトの伝説的な不死鳥。アラビアの砂漠に棲み、五百年生きるとその巢に火をつけ焼け死んだ後、生れ変わるといふ霊鳥である。

古い男でいいではないかなあ雲よ

この「一行詩」には、蘭幸のおおらかな人柄が「七七五」の「内在律」のリズムと語り口で描かれている。下五の「なあ雲よ」の呼びかけには詩人・山村暮鳥の詩集「雲」に収録されている「おうい雲よ」の呼びかけの語で始まる「短詩」

を思い出させる程の豊かな詩情がある。

ころんでころんでやさしい人になるんだね

この「一行詩」では、「人」以外はすべてひらがなで表記されている。そこには親が子の成長を温かく見守る「まなざし」が感じられる。「四四七五」の二十音の「内在律」のリズムと語り口に「人肌のポエジー」がよく表出されている。

一行詩人・小島蘭幸の川柳には麻生路郎が「一呼吸の一行詩」と定義した川柳観が正統に受け継がれているのである。

(敬称略。完。)

プロフィール

平 宗星 (たいら・そうせい)

一九五八年六月、東京都生まれ。本名・辰彦。玉川大学、同大学院修了。早稲田大学大学院在学中、現代川柳評論家の山村祐主宰「森林の会」に参加。現代川柳を知る。十五世脇屋川柳、十六世青田川柳(別号・煙眉)と出会い、東京川柳会に入会。同人、運営同人を経て現在、東京川柳会副主宰。著書に『撩乱女性川柳』など。文学博士。尚美学園大学講師。

『麻生路郎読本』余滴 (43)

「川柳職業人宣言」前後③

葉 原 道 夫

青 螺 然し生活のための職業の大半は、それが自分の氣持にピッタリしないもので、或程度自分の氣持を殺してかゝらなければならぬ現代に、自分の氣持にピッタリした川柳で生活を樹て、ゆくといふ事は、本當に結構な事だ。その意味で我々職業川柳人なりと宣言出来る人は羨しいよ。然しだ、職業川柳人が出なければ川柳が向上しないといふやうな事は言へないと思ふ。現に川柳を職業としてゐないでも優れた先輩は、川柳を向上させる好い句をドシドシ發表して行くぢやないか。

幻 樹 それは川柳の作品價值論になつてしまふが、職業川柳人であるがためには好い句を發表するといふ事も勿論必要條件ではあるが、それよりも先づ自分が食つて行くといふ事が、先決問題になつて来るか

らね。

青 螺 勿論それを宣言した結果その職業川柳人の作句態度とか指導精神とかいふものが、川柳を職業としなければ熱焼（筆者註「熱焼」か？）して來ないというものになつてしまふといふのなら、自ら問題は別だ。車 山 勿論川柳の向上といふ事は作家の素質と努力の問題だ。然しさういふ内部的な事でなく、對外的に働きかける場合、職業人があつてこそ、より積極的にやれるし従つて一般の認識も違つて來ると思ふ。

不 及 僕は好い句さへ出來れば認めて呉れると思ふ。

竹 緒 然し編輯者といふ者は何でも知つてゐるやうで案外何にも知らない人間が多いので、今不及君の言つた事は却々難しいよ。だからこの場合對手の編輯者を、餘程撰んでかからないと危険だ、徒らに大衆受けのするものばかりを望むだらうから……不 及 編輯者から低級な句を注文して來たら斷乎と刎ねつけるだけの氣慨や見識だけは欲しいな。

幻 樹 然し職業川柳人が出來れば川柳は自然向上するやうになるかしら。

竹 緒 それは輕々に斷定出來ない。

平 吉 却つて行き詰つてしまはないか

な。川柳の向上といふ努力よりは、生活の安定なる連續といふ方の努力が多すぎるから、その點から寧ろ退歩するかも知れないといふ懸念がある。

車 山 僕は職業川柳人として立つ人の勇敢さを認めるとして、その人が假に句ばかりを作らなくても、指導者として川柳に盡すと思ふ。

不 及 それは違ふ。指導者として大切な事は好い句を作る人だ。我が三太郎先生に師事してゐるのは、先生が屢屢好い句を作つて呉れるからだ。選者としての先生に従いてゐるのはその次の事だ。

車 山 句論指導者としては名作家である事も大切な條件には違ひないが、新しい作家を生長させる務も大きい。それに名句はそんなに生れるものではない。寧ろ自分で生むより周囲の人に好い句を吐かせる事が指導者の仕事だ。こんな意味でも僕は職業宣言をした人たちを、應援するのが僕達の義務だと思ふ。

不 及 好い句を作らぬ好き指導者なんて今の柳界にはないよ。川柳の評論家はあるかも知れない。然しそれは指導者ではない。

猫 三 この問題は指導者の價值に就て論

議すべきでなく、指導の方法に對する論議へ自ら別れるのぢやないか。例へば學校の老教師のやうに、自分は既に新しい學理の發見や探究に力を注ぐ氣力はなくとも、それを成し得る者を初歩的に善導するといふ事も一つの方法だし、又自ら青年學徒を率いて研究室に閉籠り、共に研究しつゝ、又後進を導いて行くといふ方法もある。何れが好いかは一概に言へないけれども、今の所謂職業川柳人の指導方針に就て言へば、この兩方を兼ねて行く他はないだらう。

青 螺 こゝで川柳が職業として成り立つか否かの、もつと具體的な問題に觸れてみようぢやないか。僕は嚴密な意味で川柳に關係したもののみの収入で、生活を樹ててゆくといふ事は、勿論その生活の程度にも依るが、却却容易な事ぢやないと思ふ。何か他に雜文でも書くといふやうな事がなければ——大體職業川柳人の収入は、新聞雜誌の稿料とか、自分で雜誌を刊行するとか、色紙や短冊でも書いて賣るとか、大體そんなものぢやないかね。

竹 緒 純粹な意味では句の稿料、或は川柳の論脱隨筆等の稿料だらう。色紙短冊

を賣るといふやうな事は、多少職業的なものから離れて來るだらう。それから前田雀郎氏が去年王子の蒼々亭居で川上先生と初代の柄井川柳は選者として入花料を取つて食つてゐたので、作品として生活してゐたのとは違ふと話されてゐたのを僕は側で聽いてゐたが、それも一つの職業川柳家の道だね。

路郎自身は、生活をどのように立てていくつもりだったのだろうか。

「川柳職業人宣言」に、〈著述業者としての麻生路郎をお忘れなく御後援を仰ぎたいのである〉とあり、〈選句に講演に、出張に際して特に御高配が願へれば小生のからだのあいてゐる限りはお使ひ下さつてい、といふことを御承知ありたいのである〉とある。「川柳雜誌」の収入・著述業・選句・講演・掛軸や短冊の頒布以外に、昭和11年7月に自らが理事長として創立した「川柳人協会」（「川柳人協会」について詳しくは稿を改める）の会費も当てにしていたようだ。「川柳雜誌」一年間の購読費は三円六十錢であつた。對して、「川柳人協会」の会費は一年間三円で「川柳雜誌」が配布される。「川

柳人協会」の会費を若干安くして「川柳雜誌」購読者の増大を図つたのである。

「川柳人協會と私」（「川柳雜誌」昭和11年9月号）で路郎はこう述べている。

「川柳雜誌」も川柳人協會の會員が増加すれば多少とも經營上にお蔭を蒙ることになる。しかしこのお蔭を蒙る點にケチくさい反感があれば何をか云はんやであるが、協會のために又私費を投ずることも考慮に入れていただかねばならないのである。

私の經營する「川柳雜誌」が間貸しをして多少とも稼いだと解釋されても私が川柳界に勤くと稱して自己の生活を保證せうと解釋されても何等はづるところはないのである。それは日本帝國の爲に一身を犠牲に供して戦ふ軍人にしても彼等は俸給をもらつてゐるのである。恩給さへもらつてゐるのであると言ふ事を考へて頂きたい。私は自己の從來の職業を放擲して柳界の爲に働く以上私が辛じて生活し得るものは當然柳界によつて與へられるものと確信してゐるものである。「川柳雜誌」の刊行によつて或は私の貧しい柳話や選句によつて或は私の自由な揮毫によつて生命の保全を期したと考へてゐるのである。（次回に続く）

七五調のリズム

石橋 芳山

教え

川柳を始めたころの、先輩の教えや、自ら例会・大会や各柳誌を見聞きして、肌で感じた川柳は、

- ① 話し言葉で表現しなさい
- ② 簡単に明瞭な言葉で表現しなさい
- ③ 十七音字のリズムは崩さないようにであつたように思う。今もこの③項目を、従順に守っているつもりです。

①の話し言葉で表現しなさい
川柳が、日常の生活での人生の機微を詠うものであり口語体での表現が、普通の成りゆきだと思えます。そして言葉というものの存在の根本は、自分の意志、考えを人に伝えるものなので、他の人に分つてもらえるものでなければなりません。

② 簡単に明瞭な言葉で表現しなさい

文芸の最も重要なのは、伝達性で分かり易い言葉で、言おうとする自分の意思や考えに最も適した言葉であることが必要です。

簡単に納得してもらえる明瞭さも必要で、まわりくどい言葉や、難しい言葉は避けるべきだと思います。人によつては、難しい知識を並べたり、難しい漢字を使ったりしますがこれも避けるべきだと思います。ただし、古い考えを払拭して、新鮮な伸び伸びとした発想での自在な作句が必要ですが、これが大変難しいものです。

③ 十七音字のリズムは崩さないように

もちろん川柳は、五・七・五の十七音字の韻文（作者が意識してリズムを持たせたもので、川柳・俳句・短歌・詩など）ですからこのリズムを守らなければいけません。

とは言つても、現実には破調があり、上五・下五の音字が変化しても、中七の音字は、川柳全体のリズムが狂うので、絶対に守りなさいとの教えである。この「十七音のリズム」とは何なのか、この機会に調べてみようと思ひ立つたわけです。

七五調のリズム

川柳、俳句、短歌などの「七五調」のリズムの最初は、農耕などにおける掛け声や、祭りの手拍子、奇声から始まったものだと考えられていて、大和言葉に一番合うリズムが七五調であるようです。韻律をつけて語り伝えられたからこそ、何千年ののちまでも残り、規則正しく整えられ七五調は和歌という文芸を生み出し、自由に歌われたものは民謡などとして、伝わったものと推定されています。

これは、川柳、俳句、短歌など韻律をつけることで、誰の頭にも入り易く、覚えられ易く、口ずさまれ易いものとなつていきます。この観点から歌謡曲・民謡・童謡を確かめると、七五調になつているものが多くあり、これがリズムなのだと感じられます。

中八は絶対にだめなのか

川柳文学コロキウム全国誌上大会の、入選句にこんな句がある。

中八がそんなに憎いかさあ殺せ

河合 大祐

この強く指導されている「中八はダメだ」「中八はリズムを崩す」の具体的な答えが

見えてきません。しかし例会や大会などで、選者が「中八の句」を選ぶことはタブーとなっていて、「中八の句」を選んだことで選者の力量が問われ作句者までもが、あたかも悪いことをしたように、冷ややかな目で見られることがあります。しかし、この「中八はリズムを崩す」「リズムが悪い」という具体的な説明を受けた覚えがありません。そして基本となるリズムとは、どのようなものなのかも分りません。

現実を見てみると、初心者が、五・七・五の基本的ルールを、守れないことが多い。

サラリーマン川柳の、1989年から2016年までの26回の1位の句で、7句の26・9%が中八となっています。口語体で作句された場合に、中八の方がリズム的に自然の流れがあるのかも知れません。

なぜ中八になるのか推測してみますと、
・韻文を理解していない

初心者の「字余り」の多くは、「て」「に」「を」「は」などの助詞が、余分に入っている散文になっている。

・仮名遣いの違い
歴史的仮名遣いと、昭和21年の内閣告

示による現代語の標準的な仮名遣いの、現代仮名遣い。両者には口語体の発音と表記のズレがあることは、当たり前な変化ではないかと思っています。それと言葉という生き物が、急激な情報伝達進歩により、日々変化をしていることも、基本リズムの変化点として見逃せないように思います。

・リズムの違い

ビートルズ以後8ビートに慣れ親しみ、リズム&ブルースやジャズ、レゲエ、ラップなどなど、さらに複雑なリズムやビートが溢れているのが現在で、幼いころからこれらのビートを肌で吸収してなれ親しんできているのです。しかし、皆さんご存知のように、七五調のリズムは失われた分けてはなくて、子供のころから頭に染みついている唱歌や、人気歌手などの流行歌、演歌など沢山あります。

・選者の披講方法

選者の披講ですが、作品を音読した場合五・七・五と区切って読むことは少なく作品または、選者によっては、それぞれに区切り方が違ってきます。これは新しい言葉や外来語によって、七五調のリズムが途切れ

たりしているかも知れません。

中八は、リズムが悪くなる、句に締りが無くなると思われる主要因は、これらだと思っていますが、いろいろな要因が複合的に絡み合っていることと、リズムは理屈ではなく個人の感覚的なものとも思われます。

終わりに

短詩文芸の韻律について、私なりに調べてみました。が、はっきりとした結論を得ることはできずに、むしろ疑問項目が新たに出てきたように思います。

中七は、句の重要な要で守るべきものではありませんが、中八を頭から否定するものでもないように思います。それは生き物のように自由に変わる言葉の広がり、容認せざる負えない何かが作用しているのではないのでしょうか。何よりも、句全体の衝撃や感動を優先するべきものだと思います。何も得ることのない中途半端な結論となつたことをお詫びして終わりとします。

参考資料

『川柳の理論と実践』新家完司著

(川柳叢書No.42より転載)



(投句206名)

一気に寒くなって来ました。

昔は夏の暑さはともかく、冬の寒さだけが苦手でしたが、このところ暑さも堪えるようになってしまいました。

しかし、人生百歳時代、川柳界の先輩方を拝見していると、最近話題のこの言葉がつくづく近しいもの思えて来るのです。

あちこち不調もゼイタク言えません。では、ナビです。

迷ったら明るい方に行けばよい

(評)迷うこと自体、何となく不安にかけられます。明るいうことことで救われ、不思議と解決に近づきます。

ポイントはおさえたつもりなのですが

(評)最後のツメが甘かった、ということ

熊本市 杉野 羅天

ころでしようか。人任せにしたり、途中で気を抜いたりはありません。

平和とはないものねだりかも知れぬ

(評)キナ臭さが世界中に充滿し、平和が脅かされるこの頃だからこそ、ないものねだりの声を大にしなければ。

単純な動機も恋も同情も

(評)同情から恋に発展する、ドラマなどよくあるパターンと言えはそれまでですが、単純さも時には威力を発揮。

金持ちとイケメンどつちしようかな

(評)うーん、これは迷いに迷います。金持ちでイケメンはなかなか見つからないでしようからねえ。

真ん中に満月を呼ぶ寂しい日

(評)満月の柔らかな光りにはどれほど和まされることが。寂しくても(呼ぶ)という積極さがあれば大丈夫。

積ん読の部屋で予定が狂いだす

(評)積み上げた本が思うように読めないように、予定というものはびっくりするほど狂ってしまうようですね。

左なら西方浄土なんです

(評)左はお浄土、だとしたら右へ行く

と何か待っているのでしょうか。生々しい人間模様、かも知れません。

飽きもせず恋を捨てたり拾ったり

(評)どうせ拾った恋だもの、なんて古い歌もありましたが、だからこそ女も男も夢を見られるのだと思います。

欲言えばきりなしうまいおみそ汁

(評)とりあえず、湯気を立てているおみそ汁を頂きましよう。現状に満足とは言えないけど、それはそれ、ですね。

時として女に戻るから怖い

夕焼けを背負って帰る三丁目

どこでどうひん曲がつたかは不明

女よりきれいな男多過ぎる

辻占いで凶が出たからやり直し

知恵の輪を弟先に解きよった

誰とでも仲良く出来る訳じゃない

偏らぬ答えはむしろ女かも

五十年やっとまゐるくなりました

大阪府 杉尾 奏子

大阪府 楠見 章子

大阪府 高杉 力

大阪府 石田ひろ子

大阪府 高瀬 霜石

大阪府 武本 碧

大阪府 大島ともこ

大阪府 松岡 篤

大阪府 坂 裕之

大阪府 八木 千代

大阪府 岩崎 玲子

大阪府 岩崎 玲子

大阪府 岩崎 玲子

大阪府 岩崎 玲子

大阪府 岩崎 玲子

八尾市 前田 紀雄
重力波電波障害脳回路

大阪市 古今堂蕉子
絵解き文字読めたら門を開けましよう

奈良市 中原比呂志
このバルブ締めてはならぬいのち水

四条畷市 吉岡 修
新しいカジノでお会いしましょうね

鳥取市 倉益 一瑤
森の樹に矢印つけたのは母か

唐津市 仁部 四郎
He & she 同床異夢が原則だ

佐賀県 真島久美子
アノ事もソノ事もあり距離を置く

札幌市 小沢 淳
どの道も六道の辻閻魔待つ

枚方市 海老池 洋
左から入り右へと抜ける耳

堺市 澤井 敏治
餃子よりうちらやっぱりタコヤキ派

青森市 守田 啓子
男女での友情なんて…たぶんある

富田林市 関 よしみ
わたくしにノックして吹き抜ける風

弘前市 稲見 則彦
ジェンダーの記号はきつとこうなるね

藤井寺市 若松 雅枝
良い季節一日何もせず眠る

大山市 金子美千代
AIの結婚式は神秘的

豊中市 藤井 則彦
紅白に知らない歌手がまたも増え

奈良市 安福 和夫
アダムにはあれ程言っておいたのに

大阪市 森 廣子
楽な方案な方へと行きたがる

江南市 脇田 雅美
停電に手旗信号交差点

奈良市 長谷川崇明
我が党は人は選ります悪しからず

弘前市 福士 慕情
本当は男なのよという噂

三田市 堀 正和
自分史の余白ピンクに染めようか

和歌山市 上田 紀子
占いに凝った揚句がこの姿

藤井寺市 田付 絹枝
天気図の台風進路蛇行する

堺市 坂上 淳司
ようやく同性婚も認められ

池田市 上田 堅坊
酒とろり女がみんな光り出す

塩竈市 木田比呂朗
定年後我が家も女系強くなり

鳥取県 斉尾くにこ
ふところの大きい人へ人は寄る

海南市 堂上 泰女
柔軟体操まだ着きますぞ胸と足

富田林市 片岡智恵子
「やってみなはれ」の精神まだ捨てず

大阪市 柴本ばつは
お互いにきれいな別れできました

鳥取市 吉田孔美子
出来過ぎた子で諦めるしかないな

松江市 相見 柳歩
おさまらぬ社長が謝罪しただけじゃ

堺市 遠山 唯教
結論のない人生がこわくなる

鳥取市 山下 凱柳
右脳左脳ちよつとバランス崩れまた

河内長野市 山岡富美子
鍵束を両手に持っている孤独

松山市 栗田 忠士
東京五輪リニョアルした表示です

岡山市 永見 心咲
あらっここに卑弥呼はピマスよく落とす

京都市 三宅 満子
さあおいでどの子もぎゅつと抱きとめる

大阪市 平井美智子
両の手でひとりジャンケンして遊ぶ

大阪市 平賀 国和
壊したら元に戻らぬ民主主義

2月号発表 (12月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳菱に2句

本社十一月句会

◇十一月七日(火)午後一時
アウイーナ大 阪

穏やかな立冬となった七日、十一月句会は百三十六名(内投句者十名)の参加で開催された。初出席は香芝市の山下純子さん。

今月のお話は加島由一さん。「川柳塔はあなたの力を必要としています。」という小出智子さんの「口説き」の紹介から「口説く」と題してお話が始まった。およそ生物は自らの種の保存と繁栄のために、仕草、声、匂いなどで自らを主張して口説く。人間は言葉で口説くことで言語能力を高め、その結果知能も高まったようだ。古事記のイザナギはイザナミを口説いて国を生み、北条政子は御家人達を口説いて戦わせた。「好きだった」と口説かなかった己を悔いる。口説かれない女は早く色褪せる、口説かない男は早く惚ける、とはチエーホフの弁。

月間賞は たむらあきこさん(和歌山市)
(司会)真理子・志津子(協取)すみ子・隆彦
(受付)唯教・わこ(懸垂幕墨書)耕治
(清記)憲彦

席題「敷く」

木本

朱夏 選

立冬の今日は絨毯敷き直す
バリケード敷いて迎える国の長
フローリングに布団を敷いて寝た昭和
スカートのひだを布団に敷いた頃
二歳児の尻に敷かれたジイ元氣
干し草を敷いてハイジになる娘
鍋底においしい昆布敷いておく
ランチョンマット敷いて一人の誕生日
親が敷く子等のレールに鯉がいき
銀河へと鉄道敷いたのは賢治
紅葉敷き寝ころぶ秋の真ん中で
敷くもよし落葉のしとね一夜きり
秋冷に論吉敷き詰め暖をとる
仮設には何を敷いてもこの寒さ
斟酌を下敷きにしたおせつかい
下敷きに好きな子の名を二人書き
座布団もないのに愛想だけはいい
御意御意と妻に敷かれて恙なし
おくさまのフトン敷くのはボクの役
金婚の妻と蒲団をつめて敷く
ひとり暮しやと花菓座片付けた
一面に枯れ葉あの日別れのこの辺り
草もみじ貧しい庭に秋を敷く
みよちゃんの小さな家になった菓座
敷かれ上手ひたすら励む妻の秘書
松本あや子
松尾美智代
大久保眞澄
山根 妙子
内田志津子
山本 進
小谷 小雪
藤井 宏造
今井万紗子
水野 黒兎
片山かずお
森 廣子
澤井 敏治
川端 一步
山野 寿之
三宅 保州
立蔵 信子
米田 恭昌
江島谷勝弘
山田 耕治
柴本ばつは
安土 理恵
柿花 和夫
栃尾 奏子
村上 直樹

女子トーク恋をいっぱい敷き詰めて
引退の花道喝采敷きつめる
母の棺ごめんなさいを敷き詰める
真つ赤なバラを敷いた棺に横たわる
ござ敷いて雲が友だち楽隠居
背水の陣敷く蒼ざめた絆
背水の陣敷き妻は攻めてくる
背水の陣あれからは下降線
敷かれてたレールの上で転げました
敷いたレールは八十歳で切れている
親の敷いたレール二十歳で踏み外す
コースターに何やら気障が書いて去り
住
ボスは俺だぞと座布団二枚敷く
御無沙汰に秋の言の葉敷き詰める
玄関の砂利は魔除けということか
散り敷く枯葉踏んで来たのはジャンギャバン
つかのまのヒロイン銀杏踏みしめて
人
一億円畳の下に敷いている
地
舟を編むコツコツ言葉敷きつめて
天
ブルーシート敷くと淋しくなってきた
軸
カーペットの染みは別れを知っている
栃尾 奏子
太田扶美代
小野 雅美
森 廣子
内藤 憲彦
西出 楓楽
渡辺 富子
岩佐ダン吉
石田 隆彦
奥澤洋次郎
鈴木いさお
島田 握夢
新家 完司
藤井 宏造
小島 蘭幸
西出 楓楽
山岡富美子
居谷真理子
山本希久子
小島 蘭幸

兼題「敵」 吉村久仁雄 選

好敵手だった男の通夜の席
身中の虫は鏡が知ってる
優しくて敵は作らぬお人好し
焼酎二合天下無敵にしてくれる
敵よりもわたしの方がちと若い
古希過ぎて敵前突破する勇氣
人間の味ライバルの温い塩
敵の多い人にもさりげない魅力
いらん事言うから敵がまた増える
七人の敵に据え膳用意する
許しても敵にしっぽは振らぬ貝
敵失で勝って醉えない大ジョッキ
敵を知り己れを知ったので逃げる
老いという敵がとこん攻めて来る
にっこりと握手にこめている敵意
時に敵時に味方になる論吉
正論を主張し過ぎて四面楚歌
玉入れのほんに無邪気な敵味方
身を護る銃が敵へと裏返る
外敵が来ればまとまる一ツ屋根
ライバルと明日はコンビを組む政治
ライバルに頑張り貰う趣味の会
やんわりと敵にはならぬ出雲弁
こうなれば敵も長生きしてほしい
酒呑みで句もカラオケもうまい敵

北野 哲男
仁部 四郎
奥村 五月
川端 六六
太田扶美代
坂 裕之
山野 寿之
藤井 則彦
森松まつお
山口弘安智
澤井 敏治
木本 朱夏
古今堂蕉子
山岡富美子
安土 理恵
西出 楓葉
永田 紀恵
緒方美津子
上山 堅坊
島田 誠一
藤田 雪菜
藤原 大子
松本 文子
谷口 義
堀 正和

どん底ではじめて知った敵味方
コンビを敵に出来ない買い忘れ

敵方のオウンゴールにほくそえむ
どうみてもエネルギッシュな恋敵
ライバルがいたからこそ今の地位
手の内を見せられ敵も幕を引く
弱目目のハブに塩塗るマングース
この歳でやつと自分が敵と知る
まだ敵はいない赤ちゃんの笑顔
趣味の道照らしてくれる好敵手
勝てそうもないので敵にまわさない
人間と言う宿敵に泣く地球

佳

心中に煩惱という敵を飼う
敵の眼の奥が許すと言っている
一歩ずつ譲れば氷溶けてゆく
本当の敵はうしろに居た不覚
この指に止まった奴はみんな敵

人

ライバルもわらん人形を買っている

地

難敵が前立腺に潜んでる

天

敵よりも恐い不満のある味方

軸

割り勘の席に酒豪が二人いる

山崎 武彦
榎本 宏子

加島 由一
初代 正彦
村上 玄也
藤原ほのか
富永 恭子
中原比呂志
小山 紀乃
山本希久子
森松まつお
升成 好

島田 誠一
青木 公輔
藤原千恵子
萩原 狸月
川上 大輪

小野 雅美

山田 耕治

鈴木 栄子

兼題「ベール」 藤原ほのか 選

剥がされたベールフツツの人やった
赤裸々な私にベールなど要らぬ
卑劣呼にはベールをかけたままがよい
ちよつとリッチにカマンベールの日曜日
ベールでは隠しきれない歳になる
ブラック企業の帳簿ベールがかけてある
辛い過去時のベールが包み込む
黒いベール何かしでかすつもりだな
ベールかけた妻の本音が発火する
ベール脱ぐまで絶世の美女でした
知りたいがベールとるのが怖すぎる
変身のできるベールを持つわたし
付度のベールの奥にある疑惑
純真と白いベールを信じてた
雨の日はハルカスベール被らされ
真相をベールに包み持つて逝く
突然にベールとられて苦笑い
幾重にもベールにくるむ罪ひとつ
酒二合ベールを脱いで出る本音
ただのおばちゃんを神秘的にするベール
春がすみほんとは黄砂というベール
こう見えてもベール被って僕は生き
花嫁はベールの中に夢を抱く
ベール脱ぐ父の日の母の日子供の日
ベール取り溜めたストレス天日干し

岩佐ダン吉
栃尾 奏子
鈴木 栄子
三宅 保州
龍島 恵子
油谷 克己
平賀 国和
安土 理恵
渡辺 富子
川端 六六
坂 裕之
小谷 小雪
大坪 一徳
安土 理恵
江島谷勝弘
松原 寿子
小林 わこ
小野 雅美
山口 光久
島田 握夢
田中 章子
前 たもつ
北野 哲男
松本あや子
内田志津子

ペール越しみんな美人に見えてくる
ボクは見たペールの下の妻の髭
ペール脱ぐチャンスないま義母看取る

九条をペールに隠す選挙戦
初恋は絹のペールで美化される
北朝鮮ペール被われ怖い国

マイナンバー今もペールの中にある
サントさんペールを取ればお父さん
脱がないでペールのままの君が好き

イスラムの美女のペールを剥がしたい
これからは記憶にペールかけておく
あるがま生きてペールは被らない

お互いにペールを脱いでいる妥協
終わらせる意志がわたしのペール剥ぐ
微笑みのペールに隠す下心

酔うほどにペール剥がれて本音出る
生き抜いた顔に安堵の白い布
人

五十年妻のペールが厚くなる
地

ペンひとつ政治の間のペール剥ぐ
天

薄すぎるペールに過去は覆えない
軸

おおわれたペールをはがし素に還る

片山かずお
大久保真澄
山本 昌代
肥山 一文
水野 黒兎
榎本 舞夢
川上 大輪
奥村 五月
福田 好文
米澤 俣子
小谷 小雪
谷口 義

ばらばらの家族繼めた父の骨
十人十色村出た若者の未来
悪魔より怖い人間切り刻む
解体は食肉だけにしてほしい
お風呂場でばらばらにしている秘密

ばらばらの野党見ていてもどかし
ばらばらを束ねて母の肝っ玉
老いるとはばらばら軋む骨の音
ボランティアの手話はちくはくでも温い
ばらばらでも記憶の中にある絆
原発に一家離散を強いられる

ばらばらな僕と妻でも同じ飯
ばらばらの記憶つないでみるあの日
主語述語ばらばらで良し悪い二人
人はヒト所詮まとまる訳がない
バラバラと雨の音するトタン屋根
多面体のきみがときどき掴めない
経歴ばらばらもママ友の絆

ばらばらの意見まとめた太鼓腹
ばらばらに散つても根づくこぼれ種
ばらばら集まるカラスの確かな目
ばらばらにして忘れた今日のミス
ばらばらがばらばらのまま老いていく
ばらばらを繋ぐクラス会の名簿
ばらばらに見えて秩序のある星座

上垣キヨミ
米澤 俣子
川端 一步
安土 理恵
森松まつお
大内 朝子
大杉 敏夫
酒井 紀華
三宅 保州
今井万紗子
山本 進
肥山 一文
小山 紀乃
柿花 和夫
川上 大輪
加島 由一
たむらあきこ
原田すみ子
加川 靖鬼
島田 誠一
能勢 良子
藤原 大子
田中 章子
山田 耕治
初代 正彦

故郷をばらばらにする原発禍
修理する気で分解はしたもの
ばらばらの服買わされる福袋
ばらばらの意見まとめたのはお金
意見ばらばら今日も永田町揺れる
父と子の絆組み込むプラモデル
人生のジグソーパズルまだ途中
古代史の謎は欠片を寄せ集め
ばらばらで退社集合は居酒屋で
ばらばらの参加も和むバスツアー
屋台骨ばらばら軋む核家族
家族ばらばら気丈な母はひとり棲む

同窓会三三五に集う顔
レジ前で小銭を数え出した老い
ばらばらの家族ひとつにする介護
ばらばらになった絆が寂しがる
バラバラの女体被疑者の名はピカン

ばらばらの記憶まさぐる夜の底
地

どنگりはてんでバラバラ夢を追う
天

ばらばらのようでどしりピカソの絵
軸

散骨のばらばら撒いている別れ

丹後屋 肇
大久保真澄
内藤 憲彦
澤井 敏治
青木 公輔
山野 寿之
水野 黒兎
木本 朱夏
油谷 克己
長浜 美籠
酒井 紀華
安土 理恵

江島谷勝弘
坂上 淳司
山本希久子
松尾美智代
大久保真澄

渡辺 富子
森 廣子
村上 直樹

村上 直樹

村上 直樹

村上 直樹

村上 直樹

村上 直樹

村上 直樹

村上 直樹

村上 直樹

村上 直樹

兼題「引く」 山口 光久 選

三度目に引いた夫が大当り
 これからも引き算だけの人生だ
 引導を渡す和尚の枕経
 引き算の暮らし潤い消えている
 引き算の美学家間光らせる
 平和だな波の引く音遠く聞く
 大吉を引いた今年もまだ独り
 たまご酒心が風邪を引いたから
 線ばかり引いて世間を狭くする
 任せたと笑う引き際いさぎよい
 点と線引いて刑事の目が光る
 真つ直ぐな線が引けなくなりました
 引き合うものあつて続いた夫婦箸
 男には引くに引けない時がある
 一線を引いて火種は絶やさない
 一步引いて見ると寂しい顔ばかり
 引く手あまた美しかった若かった
 子の自立に補助線ひとつ引いてやる
 潮時が読めず貧乏くじを引く
 いつまでも糸を引いてるのが絆
 貧乏神を好んで引いた訳じゃない
 引退の弁に未練が見え隠れ
 傍線が所どころにある日記
 引き算の暮しも板についてくる
 職人の親父引かない人でした

奥村 五月
 清水 英旺
 油谷 克己
 油谷 克己
 升成 好
 山口弘愛智
 柿花 和夫
 居谷真理子
 太田扶美代
 山田 葉子
 松本あや子
 藤田 雪菜
 松尾美智代
 大内 朝子
 川端 六点
 吉村久仁雄
 太田としお
 藤井 宏造
 清水久美子
 川上 大輪
 荒川 鈍甲
 西出 楓楽
 指宿千枝子
 龍島 恵子
 大杉 敏夫

引出しの中でうずうずする野心
 あれやこれ引き算続く老いふたり
 嫁が来て線引きました台所
 引き立て役密かに目立つ工夫する
 色づいた紅葉氣を引く嵐山
 満潮が引いて愛の果現れる
 水引きが際立つ孫の佳き日なり
 身を引いて良かった残り福だった
 見栄張つて引くに引けずに出すお金
 お隣は子に引き取られ越してゆく
 仏壇のお墓子を引いたのはだれだ
 断ち切れぬ想ひ引きずりひとり旅

佳

訥々と語る言葉が引きとめる
 立ち向かう女は太い眉を引く
 一線を引いて口出しせぬ同居
 百歳に向かつて太い線を引く
 紅引いてやさしい風に逢いに行く

人

母の手を引いて介護の森を出る

地

一步引き男を立てた処世術

天

一切を語らぬ引き際の美学

軸

数合せ右も左も引き入れる

海老池 洋
 渡辺 富子
 松本あや子
 能勢 良子
 森 廣子
 榎本 舞夢
 長浜 美龍
 細川 花門
 片山かずお
 奥澤洋次郎
 田中 章子
 渡辺 富子

兼題「動揺」 小島 蘭幸 選

開幕のベルにおたおたするばかり
 文春が後をつけてる気配する
 イケメンの視線を背なに朝の駅
 動揺を閉じ込めておく鉤括弧
 くやくして握り拳が開かない
 告白へわたしこんなに揺れている
 二番手で心の揺れを見るゆとり
 同伴でセカンドオピニオンを聞く
 君の視線心の奥でキュッと鳴る
 動揺がもろに目に出る膝に出る
 素つ裸の古稀の自分を見てしまふ
 一瞬だが思い出せない誕生日
 バランスがとれぬぞ余命預金残
 ものごとに動じぬための妖怪図
 動揺も見せずすつくと立つ芒
 抱きしめないできつとドキドキしまふ
 真理子さんから電話だと妻の笑み
 少し揺れ出した右脳こころが勝負
 動揺が激しく小指から零れ
 喪に服していますベットが死にました
 奴からは見える俺からは見えぬ
 動揺へ素知らぬ顔をする器
 父さんするい五歳始めての反抗
 あわよくばの想いに揺れる赤ワイン
 盲点を突かれ苦笑をしています

長浜 美龍
 水野 黒兎
 酒井 紀華
 川上 大輪
 藤井 宏造
 安土 理恵
 前 たもつ
 山田 耕治
 今井万紗子
 加島 由一
 中村 恵
 江島谷勝弘
 村上 直樹
 酒井 紀華
 森 廣子
 小林 わこ
 内藤 憲彦
 青木 公輔
 松原 寿子
 三宅 保州
 大杉 敏夫
 山野 寿之
 古今堂蕉子
 上山 堅坊
 立藏 信子

指定席隣りにマツコデラックス

堀 正和

動揺を笑いに変えて友見舞う

石田ひろ子

合掌の手から動揺抜けていく

海老池 洋

はっとする喪服の妻の手の白さ

村上 直樹

念のためちよっと抓むと医者言う

澤井 敏治

動揺を弟妹達にさとらせぬ

古今堂蕉子

へそくりがなんだか少し減っている

永田 紀恵

瘦せたねに心当りが無いのです

山田 耕治

腕すくには動ぜずひと言にぎくり

山本希久子

丹田に金魚一匹飼っている

居谷真理子

動揺を鎮める鶴が千羽いる

平尾 定昭

ピンチにも母は肉じゃが作ってる

柿花 和夫

佳

動揺も不安も見せてない躊躇

川端 六点

心乱れて少し歪んだ文字を書く

太田扶美代

クリアボックスを見ると動揺が走る

前田 紀雄

動揺を見せずに母は仁王立ち

中村 恵

大空の青よ 私も動揺はしない

松本 文子

人

風船が弾けたほどのことでした

木本 朱夏

地

パニックになった積乱雲になった

谷口 義

天

泥のように眠り師の計に耐えている

たむらあきこ

軸

握り拳で父の涙を見ていたよ

句会 燦 燦

川柳塔まつり句会を読む 弘 津 秋の子

新同人もしも入選したならば

仲谷 真

第二十三回川柳塔まつり句会は六百句余の中から五十九句入選の厳選であった。仲谷さんの感激の一日を思う。

ロボットが唄うヨイトマケの歌

竹村紀の治

先日「徹子の部屋」に大阪大学石黒浩教授が出演されていた。教授は自分にそっくりのロボットを作製されているという。ロボットは歳を取らない。そこで教授は友人の整形外科に自分の皺取り手術を頼み老けた顔にならないようにしているそうである。ヨイトマケを唄うロボットの句にゾクリとする。

順追って話そう酒を追加する

森松まつお

川柳の旨い人は、話を聞くことも旨い。相手が順を追って話せるまでジッと待つことができる。かくして川柳人に酒飲みが多くなるのである。

不倫願望だからブレイキ取り外す

両川 洋々

川柳塔祭りの懇親会に参加。空席を見つける。左隣は鳥取の方と知る。私の父は鳥取が郷である。雅号を告げると何と亡父の出生地もご存知で話が弾む。私は毎年父の命日に女人から届く供養のお酒の話をする。娘としては複雑な思いもあったが「十五年経って完敗です」と伝える。破顔一笑されたのが両川洋々さんである。洋々さんの句にも完敗である。

ランドセル私はとても忙しい

真島 芽

体操の白井健三君。スケートの宇野昌磨君。二人の演技は躍動感にあふれ私たちを魅了する。小学生の芽さんの川柳にも同じチカラを感じる。

金魚すくいの金魚は赤ちゃんなのです

柏原 夕胡

この見つけも新鮮である。夕胡さんは赤ちゃんの目を持っている人である。

ふしやゆづり

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

満たされたのですすみわり地に還える
名所巡り膝笑う前に済ませたい
聖地巡礼過去の邪心を削ぎ落す
フクシマの辞書に「期限」の文字がない
島巡り安寧願う両陛下
予定なし今日一日は僕のもの
子どもらよのびのび育て天を突け
くちびるに微妙な波動込めてみる
ガラス越しくちびる重ね原節子
延び延びになる返事ならチャンスかも
口びるに朝のメニューがついている
年金日待ち遠しくて指を嘗め
唇を真赤に塗って蜂を呼ぶ
投げキスをしてそれぞれの道を行く
世界の今ネットで巡る指の先
地球儀を巡らせ世界旅行する
夏休み最後の心境明日句会

久美子 芳生 吹喜 重虎 慕情 則彦 風来坊 一吞 京子 美鈴 夕香 隆樹 黙人 洋子 柳子 英子

ニンゲンを辞める期限を知らぬ神
おしやべりな人の唇じつと見る
目標を持つのに歳は気にしない
生きている証し堂堂巡りして
紅さしてやつと笑顔をとりもどす
巡り逢い切れてた過去を繋ぐ酒
親からの借金期限のない安堵
消費期限切れても家内僕の側
期限のない心の旅路五七五

山来好き熊と協定結びたい
陽と契り卒寿の余生白いみち
今日の予定朝食終えてからにする
肝臓を置き去りにした酒の味
体力が無いから猫と会話する
こっそりと生徒に隠れ吸うタバコ
居酒屋に沈没船の二、三隻
過疎の村おもてなしには茶碗酒
ピンヒール真夏に向かう赤い底

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

踏切の人を助けて身は犠牲
あとながら捨て身が奇跡よびよせる
不倫してました言うて人気を取り戻す
ライオンの我が子を守る勇ましき
野良猫も毛を逆立てて子を守る
一旗を掲げる気で発つバスポート
投げつけた絵も描きましたもう捨て身
必敗の覚悟捨てて身で意地を立て

ひとし 小とみ 規子 龍馬 のぶよし きよし 井蛙 吞舟 真由美 初枝 花匠 ふさあ 花峯 氏加子 一花 霜石 つとむ 和香子

命がけ徹夜で看病子を守る
無の心捨て身になって生きている
この先も地図ない道になるだろう
未来地図ないからこの世面白
まっさらな今日一日の地図を書く
地図を見て幼児の夢が膨らんだ
伊能図は歩測の一步一歩から
恍惚の母は自分の地図を持ち
頭打つたびに身に付く柔軟さ
バアバアと言えた曾孫にハイタツツ
僕は釘強く打たれて強くなる
窓を打つ豪雨独りの胸を打つ
嘘重ねガタガタ崩れゆくころ
菌も腰も脚も頭もガタガタに
ガタガタと笑いだしたか膝がしら
急がなきゃ核シェルターを造らなきゃ

和歌山三幸川柳会 楠見 章子報

直木賞へん先ばかり瘦せてくる
物は試し宇宙遊泳してみたい
ピンコロリそんな最期を迎えたい
半紙から飛び出しそうなかいかい夢
夢心地嬉しい朝の独り言
小さな夢つなぎ合わせて知る平和
口になど出さぬ男のかい夢
なあ貌上核の悪夢も喰ってくれ
宇宙旅行夢見てさんま焼いている
夢ひとつ捨てて女は強くなる

美世子 芳香 ダン吉 隆昭 満知子 公平 妙子 (矢)五 月 里子 舞夢 まつお 雅美 福貴子 日の出 勝弘 和子 昇 宏枝 澄夫 絹子 富香 よしこ 日出男 ひろ子 千鶴

カリキュラムにない少年の夢一途
愛情が特効薬となる介護

千振りのような意見に出会えない
一番の薬笑つて日を過す

頼られることが長寿の薬かも
うっかりを治す薬はないものか

山里の風が一番いい薬
薬漬けお陰で長く生きている

良い夢を見られる薬是非欲しい
無農薬なんです畑もわたくしも

食べごろに茄子が漬かった濃むらさき
いびつでも愛しくなつて来る胡瓜

朝つゆの野菜と対話する鉢
副食は野菜重きに医者知らず

大根の白に嫉妬をしています
余生なんて言うのは止そう未来です

熱燗の明日に賭ける乾電池
繕っているのに本音顔を出す

船乗りは泳ぎ達者と思つてた
世の中を上手く泳いだベン先の

ばあちゃんと言わせないと抜き手見せ
立ち泳ぎしながら待つているチャンス

泳いでも泳いでもまだ霧の中
離岸流の狭間で泳ぐヒト科たち

表情を持つシンクロの足の裏

川柳塔なら

大久保眞澄選

天気予報の次はミサイル予報です

保州

純子

保州

次根

明子

起世子

章子

あき子

義雄

一雄

昭枝

まき

当代

みね

美羽

ポケットの嘘が出番を待つている
正論を羽交いじめする多数決

曲り角右か左か困り果て
濃い髭が生えて困るとニューハーフ

困っちゃう貧乏神のストーカー
困難を越えて来たから今の風

理屈抜きにうれし日の丸が上がる
小池さん機を見て透かさず旗上げる

文春にスクープされて名を上げる
懸案は棚上げにして平和主義

美辞麗句削ぐと本音が浮き上がる
上げ底の言葉の裏がおそろしい

一本の薬でどん底這い上がる
冤罪を聞いて怒りが込み上げる

手を挙げた父に学んで手を上げぬ
夕焼けにやつと出来たよ逆上がり

ここの声悲劇喜劇の幕上がる
人生の最後の仕上げ大往生

ドン底より顔を上げれば朝日見え
痛み止め妻に頭が上がらない

鍵穴に酔うてますネと笑われる
近頃は金庫の鍵は妻が持つ

謎を解く鍵は私の中にある
生きたる鍵神に預けて悔いは無い

逆転の勝利を生んだ徳俵
枯れ葉よりイブモンタンを口遊む

待ち合わせ発車間際に乗ってくる
天地無用不意に止まったコースター

惠美子

富子

孝子

盛隆

ふりこ

萌子

理恵

和夫

貫一

薫

崇明

美智子

辰雄

堅坊

アルバムに貼れない人と逢っている
きつと来るヒトが戦に飽きる日が

万が一があつてはならぬ一の糸
控え目のコメント敗者への配慮

家庭内別居冷房寒すぎて
真つすぐに停めたつもりパーキング

左手の助けを借りてこそ右手
毎日を磨くエンピツ持つている

仏さま庭の菊です赤白黄
ギャグ二残しわたしのエピソード

ひろ子

紀乃

文子

久子

子

文子

子

子

子

佳句地十選

(11月号から)

川崎 ひかり 選

母の齢越してしみじみ母おもう
わたくしが我慢したからまだ夫婦

盛り付けに迷つた時の白い皿
生き延びるための水なら飲んでみる

追いかけて母がかぶせる夏帽子
結び目をゆるめて好きに翔んでみる

生きたるとはなんと儂い夕焼よ
重い荷を軽くしないと渡せない

頼りない杖だが支え合っている
のぼり切つたら手離す物は決めてある

(矢) 五月

野仏へ風が贈った花衣
はらはらと泣かせた子等も親となる
万紗子

南大阪川柳会 松岡 篤報

久し振り言われて不義理思ひ出す
松茸は十年前にそれつきり
お祝いをしたが何んにも言うてこぬ
おし蓋母の煮物の味しみる
瘡蓋の乾かぬうちにまた不倫
くさいものに蓋を閉めても週刊誌
口に蓋できず告げ口すると
蓋はずれ思ひの底が透けて見え
おばちゃんの口に蓋する鮎三個
落し蓋コトコト母の味になる
恥多き過去に蓋して明日にらむ
蓋のない胃袋を持つ成長期
錯覚か自信たつぷり濃い化粧
お湯割りは少し濃い目でゆずの香を
うす味もいいがすきやき濃い味で
濃いルージュ塗っては五歳鯖を読む
カンニングする目的でつくつく足
つついたら笑い転げる三歳児
爪楊枝歯間させるな音が嫌
アカゲラの連打が森に飢する
クイズでも東大京大出は強い
モラルなど無いが核なら持っている
三途の川の少し手前でひと休み
敬老の日幼稚園児に気を貰う

のぶよし
裕子
実子
栄子
シマ子
歌留多
ルイ子
益子
弘委智
和雄
弘子
俊雄
楓楽
ひさ乃
一步
直子
あさ子
柳石子
勝弘
忠昭
東風
修
恭昌
いさお
国和

無人駅小さなお座布秋だなあ
肝臓を鍛えるために今日も飲む
黒革の手帳度胸にあやつられ
ポケットの奥にもしもを忍ばせる
ホスピスの窓辺にやさし月明り
人間らしく老いる努力をしています
聞こえない振りもしました処世術
飛ぶ鳥を落とした父のおしめ替え
弱点は包み隠さず武器にする
最悪のシナリオひとり残される

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

強い揺れ妻しがみつく人の前
絵に描いた餅の数だけ除夜の鐘
窓越しに名月去年妻ありて
残り火を燃やして明日を生き抜こう
高明

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

名人の芸を花道から盗む
美肌へ遠くこやしをやれと言う鏡
核兵器神はかならず戒める
プレッシャーを指十本に教え込む
政務費をいじむじ使い首が飛ぶ
議事堂は恋の花咲く出会い場所
プレッシャー感じ人間やめました
いじむじをすれば不満の声あがる
触診の医者が美肌をまだ撫でる
隠し事持たずに逝った骨の白

洋々
美恵子
敏夫
とも湖
回春子
薫
彰夫
みゆき
秋月
仁

美肌より欲しい老後の笑いジワ
フルコース今日も三度の薬のむ
プレッシャー松の廊下も有りました
人を差す指が私を戒める
金粉を塗って美肌の阿弥陀仏
いじむじと家業継ぐ子に育てあげ
制裁を尻にお顔がでかくなり
縦走路だんだん幅が狭くなる
いじむじが過ぎて夫婦に隙間風
美肌作り特効薬はやはり愛
鏡みりや美肌はすでに後ろ向き
大根も美肌を見せて自慢する
運転を戒める旗よじれてる
ああ嫌い美肌遺伝と言った人
このバット入れば百が切れますよ
あなたなら出来るでないとプレッシャー
戒めだ葵の紋を持つて来い
学歴にこだわる親のプレッシャー
また金が入るうれしい酒が飲め
綺麗だな貴女的美肌楊貴妃だ
ミサイルだ防空壕が出来てない
何時までも親が出て来てまとまらぬ
潮時が来たか火の粉は消しておく
天狗の子に父の戒め愛の鞭

(方言「いじむじ」は無理矢理の意)

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

仏壇置き魂はいるマイホーム
幸子

野蒜
雅女
妻
無限
高鷺
節子
金祥
龍彦
凱柳
天翔
栄子
昌子
一平
明遊
隆浩
楓花
一瑤
蟹郎
清信
勲章
善平
稲佐嶽
八千代
一粹

置いてつた匂いに今も責められる
ひと呼吸置けば治まる腹の虫
本籍を故郷に置く次男坊

拉致は置きざりミサイルを弄ぶ
アナログを時代の波が置いていく
鍵穴のむこう逢いたい人がいる

一つだけ胸にはずせぬ鍵を持つ
夫病んで静かにドアの鍵閉める
解決の鍵をうすうす知っている

鍵一つ握っています強気です
先を読む少年達が増えてきた
祭旗読めると孫はほへんだ

読み聞かす民話の鬼が笑つてる
少子化の先を読むのは辛すぎる
読んでも読んでも読んでも歎異抄

野球欄左団扇で読んでいる
クーラーの下で読んでいるミステリー
深夜便音の絵本に目は冴える

良い人に囲まれてるのお裾分け
久しぶり海を見ました心晴れ
初盆の供養踊りの輪に入り

お灯明笑いなさいと夫の言う
三色の個性に振り回されている
失せ物が出て来た断捨離の途中

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

年寄りの自由はちよつびりの畑
百歳が益々増えて長寿国

茶子報

輝恵 弘子 栄香 敬子 昭紀 千代美 慶子 汎美 鬼焼 比呂子 半徳 規代 宣之 淑子 節生 笑子 夢香 歩美 栄恵 初音 厚子 史子 蘭幸

天の句を聞いて桁違い身の程を知る
度胸ない男が法螺を吹きたがる
唸り声産声聞くまで頑張って

マンモスもミニの組織で成る体
カタカナが益々増えて疎外感
大都会働き蟻が下支え

自由過ぎ自分の道が定まらぬ
この世はマンモス3匹の小鳥
自由もいゝ危険水域超えられる

余裕だらうか旦那様よくねむる
好きにせよ親の小言に動けない
又空き家益々過疎に追い打ちを

マンモスが残業せよと背でいう
上京してマンモス駅で迷いだす
懐で唸り声する年の暮れ

終活へ益々増えるゴミの山
マンモスは凍土の中で何語る
益々におんな磨いているのです

マンモスの団地に子等の声がない
マンモス都市に動いている善と悪
齢と共に益々達者妻の口

最近は大が喰ることばかり
働き者で始末屋そして子沢山
川柳茶ばしら(愛知)

釣り上げて目玉飛び出す深海魚
強面もやさしい父になる家庭
口笛を吹いて反省していない

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

釣り上げて目玉飛び出す深海魚
強面もやさしい父になる家庭
口笛を吹いて反省していない

大鯰 茶子 草文 綾子 和子 孔美子 弘子 富久江 実満 妻子 拓庵 重忠 すみれ 京道 文道 みさ子 満 小 恒 小 鹿 蟹 郎

制裁をどこ吹く風と北の国
誰にでもやさしい人は信じない
姿見に先ずはほほ笑む朝の顔

ブラザ川柳(大阪)

梶原

弘光報

コンビニで夕食選ぶ独居翁
雨の日の夕餼はいつもより豪華
あと何年と思ひ饅頭に買う

バック3米から高い御買物
婿養子借りて来た猫遠慮がち
村起こし案山子着飾り演技する

苦も楽も共に分け合う一つ屋根
買い過ぎて指に食い込むレジ袋
和睦など思いつかない国もある

星影のワルツで踊るズンタッタ
日の丸が虫干しがてら風に舞う
解散の二文字大きく舞い踊る

大仏がマスクはしがるお身拭い
川柳塔わかやま吟社 小谷 小雪報

訳あってちよつと高飛びしてきます
スポーツは苦手転んでばかりいる
一等賞ガッツポーズで目が覚めた

泳げない女水着で練り歩く
石仏に無事を祈ってゆくりユック
石仏の孤独をうす闇がつつむ

慈母恋し赤いべを着て待つ地藏
世の流れ見つめ石仏病んでいる
知香 大輪 まさみ 准一 径子 あきこ なる子 寿子

どこにも居る空気読めない石仏
野晒しとは耐えることなり摩崖仏
普通では居れぬ地球のせめぎ合い
並みで良いその普通こそ難しい
普通だと知らず識らずに蟻を踏む
考えがばらばらなのが普通です
迷惑もかけずふつうに生きてます
毎日が普通に生きるありがたさ
もう少しと言つて随分歩かされ
もう少し娘は派手に母地球に
もう少し味わいましょう世の試練
もう少しましな器量で生まれたい
もう少し少しと欲が言っている
もう少し遊んでよいと天の声

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

星の数たつた一人が見つからぬ
茶柱に期待ふくらむオベの前
朝顔の丸い笑顔に負けられぬ
虹の向こうは浮雲だけが知っている
追い詰めてみても詮無いうる覚え
本読める真昼の病室のベッド
安全確保口だけでしたオスプレイ
ランドセル買ったかせかす蟬時雨
ブライドの押し売り私大嫌い
少子化の逆三角に焦り来る
真つ直ぐな心で挑む垣根狩り
保身のために転ぶ議員は選ばない

陽子報

真帆 耕一 亜矢 海希 和之 節子 和代 葵 菜美 章子 陽子 美恵子

秋夜長喜怒哀楽を振り返る
桃色を抜けられなくて未完です
ザワザワワ沖繩の歌終わらない
がま口が小さくなって食べられぬ
非農家に縁なき黄金ゆれてみせ

京都塔の会

山田 葉子報

枯れ葉踏みイフモンタンになりすます
ドラマーのスイングに酔う秋夜長
音の無い世界に指の美しさ
叩いたらポコンと軽い脳の音
ビーポーの音に助かるかも知れぬ
眠れずに夜のざわめき聞かされる
日によつて感性伝わる電子音
瘦せた母の命を重く抱く介護
拉致家族安否わからず闇を抱く
若かったおんぶに抱っこ走つてた
白髪染め妻は女をまだ捨てず
確りと躡した子も反抗期
太陽と月のまばゆいご婚約
退院日窓辺の陽射しまばゆくて
青春と九秒すこし走つた子
盛装の母がまぶしく他人めく
手を合せてくい金ピカ涅槃像
靴音が止まる後ろを振り返る
音に聞く腕は信用できそうだ
音なしの構えで迫る妻不気味
語りつくいきザワザワと鳴り渡る

一眸 花蓮 安子 游子 公弘 朝子 朝子 福子 哲子 保子 雅美 求芽 公子 万紗子 五月 昭 千賀子 弘子 宏子 牛延 弘之 光久 英旺 とーな

中締めは一本締めの音がいい
辿り着き変わらぬ瀬音聞いている
解散で総理するずる居座る気
ずるずると何もしないで老いて行く
ずるずると何もしないで老いて行く
引きずつています初恋の欠片
様になるハグも握手も帰国子女
子も孫も抱いたひ孫を抱くつもり
児を抱けば首に巻きつく小さな手
天高くたかく少年風を抱く
十秒の壁突き破るヨイドン

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

ゆつくりとゆつくりと効く母の灸
少しでも役にたちたい老いの智慧
見守つてもらう先祖に手を合す
暁の波間に今日の陽が昇る
七福の笑顔に勝る母の笑み
酒グセも今はなつかし三回忌
川柳わかあゆ(鳥根) 松本はるみ報
どの花も自由に育ち自己主張
ほとほと生活三食昼寝つき
いつまでも意欲はもうその日まで
若人の集う球場意欲わき
呼ぶ声に今日も朝からぐずぐずと
世話役は貴女しかないと乗せられて
ほとほとが分かれぬままに酔いつぶれ

義昭 葉子 満子 泰夫 文代 多津子 正彦 美津子 かずお 千代 靖鬼 初恵 いさむ よしみ 弘 放任 ひかり 昌 好栄 恵美子

八尾市民川柳会(大阪) 中園

清報

結局は自分ファースト総選挙

釈迦三尊石に左に煤を受け

一升も飲んでしまった休肝日

ロウソクの千に祈願のレクイエム

振り向いた美人の喉に仏様

墨工房煤と膠で子を育て

真っ直ぐに生きて全身傷だらけ

愛犬の別れの刻は唐突に

秋には秋の少し濃い目の紅で待つ

唐突な風が生み出す冬の章

SLの煤を残して過疎の駅

ほたる川柳同好会(大阪) 水野

黒兎報

人生を左右している塩加減

塩加減で決まるミシラン星の数

特訓が実ったボクの逆上がり

孫生れ記念に植えた柿実る

庭先のすだちが実り初サンマ

さあ食うぞ実りの秋のど真ん中

コンピュータ君に多少が分かるかい

字は多少下手な人ほど親しめる

大家族多少の我慢強いられる

お年玉額の多少が子らの見栄

安全第一利子の多少は三の次

凡人も多少の才で夢を見る

多少だがしっくりいかぬ保険の菌

祖父の言多少の事は辛抱せい

多少なら持っていますがいくらほど
党選ぶそれとも人かまた迷う
選ぶほどないよ私の形見分け

守啓
柳童
正子

川柳塔さかい(大阪)

内藤 憲彦報

ライバル視され憎らしいけど笑つとく

男らしいいかつい顔が減つて来た

封筒のお金母さんくれたんや

新人りのヒントに活気町工場

犯行の手口サイトからヒント

蹟いた石が示唆する生きる道

ばあちゃんも暮らしの知恵をひいといとす

敗戦がヒントになった第九条

ヒントなど無くてはあちゃん百を生き

にぎやかな井戸端会議からヒント

それもヒント桜も蟬もいさぎよい

ドラ猫も猛暑木陰で昼寝中

電池切れ倒れたままのお人形

ぐつたりの花に詫びてる旅帰

お世話する方もぐつたり老介護

ぐつたりも生き生きになる缶ビール

半日を孫の相手でへこたれる

徒然草にヒントもらって老いの坂

こすもすの打たれ強さに見たヒント

解決のヒントを求め縄のれん

いつだってヒントは亡母の暮しぶり

欲すこし削れば見えてくるヒント

手を握りかえしてくれたのがヒント

余分な脂肪せめて減らすぞ一割は(糞)

世紀子

八千代

さくら

みつ江

玄也

敏治

憲

としお

澄空

ヨシ枝

佳子

素願馬

俣子

ひろ子

清晋

清

唯教

和夫

朝子

堅坊

志津子

好雄

時雄

清

よく聞くと先生だつてイケズだな
良いことは背伸びしてでも生かしたい
酔いつぶれ折角の寿司犬が食い

月子
廣子
玲子
誠一

夜もすがら潮音に寂し陰の節

欲持たず責を果たしていい顔

欲張りで世話好きでした居候

よくもまあ世界相手にいちびつて

様子見て晴耕雨読いいじゃない

羊羹と煎茶で秋を戴いた

世の中を性善説で生きてみる

川柳あまがさき(兵庫) 大浦

父の日にそわそわ待てど暮れていく

たのむから貧乏ゆすりやめてくれ

私の記念日今日は上にぎり

露天風呂若い女で目が痛い

敗戦のベナルティゴール痛いなあ

かわいいと言うまで着替え女の子

カバンの中出しては入れる旅仕度

後で来るカードで買った払う額

勿体ない仕立ての背広案山子着る

七五三以来着慣れぬタキシード

実家から新酒送ると言う電話

酒やめと言われないかと医者こわい

シャワーするひと日の余罪消したくて

産室の第一声をそわそわと

栗ごはん炊いてどっぶり秋の中

STOPとGO掛け合つて共白髪

父母の愛遠く離れてから分かる

みつこ

ばっは

妙子

憲彦

雅美

初音報

菊江

こみつ

柳明

ひろ介

真桜子

初音

たみえ

修平

英坊

宏造

純

千賀子

洋子

雪菜

紀恵

奮水

破れてるジーンズ穿くのわからない

靴の底あなたの癖は隠せない

今更に酒をやめろと言われても

撒き餌されまゝとはまる妻の罠

ノンストップ若さ一途に突っ走る

預金の残がストップかける余命表

心の痛みそっと離して風になる

寝違えた背中に声をかけられる

先にどうぞと譲り合ってるあの世行き

薔薇よりもデイゴの痛さ分かる歳

何もかもリセットしたい白を着る

虚も実も背負いゆったり秋を舞う

はびきの市民川柳会(大阪)永田

欠伸する稚児抱きかかえ練供養

足が出て三拝九拝割り勘に

幽霊もたまには足湯したそうな

琴の音も止んで虫の音聞く風情

転ぶなど日々筋肉を練っている

七十年使ってきたよ太い足

路地裏で琴の音流れ足止める

カマボコを練る職人の腕さばき

琴を弾く妻とふたたび赤い糸

転職の一子相伝練る蕎麦粉

水琴窟亡母の声する水の音

平成の終わりが少し近付くよ

巻き寿司の一番はしっ好きやねん

贅肉の悲鳴を聞いてスイミング

鶴彬教えを学び作句する

つな子

靖鬼

正和

祐康

美籠

公子

紀華

耕治

かずお

哲夫

ひとみ

ヨシエ

章司報

久仁子

洋一

シルク

高鷺

みつこ

かつ美

清

フジ

久仁雄

欣之

ヨシ枝

雄太

美喜

冬のト

真

練る程にいい案出ずにくたびれた

琴クラブサクラサクラであきらめる

なすきゅうり捏ねて糠床母の味

一本に練って絞った五七五

足裏も陽ざし浴びてのどかな日

どろ遊び好きで手伝うハンバーグ

春の海気分新たに屠蘇祝う

水琴窟の澄んだ音色に癒される

手の内に相手を知って裏をかく

川柳大阪

山崎

珠生報

うじうじとじめじめする奴きらいです

二人の仲のじめじめ孫がぶつとばす

原発は安全示す事できぬ

安倍さんの頭の中は過半数

胸の内覗き見される秋の月

内部保留ボツ穴から覗いてる

芸術の秋です国宝展覗く

食欲と比例してます血糖値

病癒えやつと食欲サンマ焼く

日々感謝だけで幸せまだ求め

フルムーンあの蜜月を捜す旅

すぐ側にあった四つ葉のクローバー

究極の愛を捜しにまだ歩く

日が恋し部屋干しの衣喚いてる

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井

宏造報

再手術したらと女医の優しい眼

気まぐれな不意の誘いに大赤字

千鶴子

喜久子

壽峰

朋子

大子

ちづる

ひろ介

いさお

章司

珠生

わこ

紀雄

志津子

福貴子

一歩

芳香

万紗子

かよこ

俊雄

まつお

雅美

福貴子

武彦

わこ

憧れのひとが流れ星になった

お大事に温い言葉で明日予約

手伝おか温もり感ずひと言で

避難地でも持てなしをする熱いお茶

凄い話よりやさしい話聞きたいな

そのバッグ置かれませんか膝の上

ダイエツト自分探しが終わらない

早く着き意気込みだけはみせておく

小学生の挨拶うれし小京都

神戸ジャズ今年も秋がやってきた

微笑みの薔薇に時間を吸い取られ

ちよつとした幸せ探し得意です

ありがとう胸襟開く合言葉

扉開き福を目標して猛ダッシュ

遺言書開けてびっくり負の遺産

胸襟を開くチャンスだ被曝国

臓器移植はつと開いた未来地図

胸襟を開きマグマを静め合う

ショック死に誤算があつた余命表

マドンナが認知症だという噂

万札を喰い荒らしてる洗濯機

ウォーキング人に抜かれるようになる

ショックです心斎橋の様変わり

母さんがばつりあんなは誰と聞く

肘鉄砲五人食らった過去がある

終章の頁は開けぬまだ八十路

ロボットも温もり持つ日やがて来る

台風に備えた窓が無事に開き

ドクターのエッセイ集を開く日々

いわゑ

千賀子

みよし

遠野

みつ子

洋次郎

千代

宏造

弘子

じろう

野鶴

敦子

利子

浩司

順子

和宏

光久

堅坊

武臣

一徳

美津子

恭子

光子

盛夫

勝弘

秋果

健彦

迪

惜しい人でしたと風が野を抜ける
ページ繰る音だけかすか秋夜長

長柳会(大阪) 辻村 ヒ口報

国訛りすぐに解け合う迎え酒
和陸して反対勢力いつまでも
鳩尾に意地住み和睦そっぽ向く
和睦せずあの世へ行けど墓は別
孫の恋商売敵と仲直り

今に尚高い理想を持つている

くに境抗争たえぬ無法の地

きつぱりと恋捨てにきた一人旅

結び目を少しゆるめて受け入れる

ごめんねと有り難うねが言えたらね

酌み交わしすべてを明かす無二の友

一滴の涙にハート射ぬかれる

ノーベル賞より番台に座りたい

人類の和睦願っている地球

指先と足袋裏で舞う阿波踊り

無理やり愛していると言わせてる

むかついて言い過ぎたかもでも本音

クツシャミでボロリと落ちた総入れ歯
宙乗りで海老蔵親子舞い踊る
いいいよ君ならあれもこれもチャラ
聞き入れぬ振る舞い怖い北の核
敦盛を舞うこともなし長寿国
無理難題満載蛇行日本丸
猛げいこ積んで掴んだ大銀杏
長年の伝統背負い舞う神楽

輝彦 紀乃

ヒロ

ゆき

三和子

たけし

明信

マサ

靖博

光弘

登美子

美二

洋二

ともこ

正博

和人

旅代

由夏

敬二

伝統の舞を受け継ぐ郷土愛
レジの前籠が知ってる暮らしぶり

城北川柳会(大阪) 近藤

残り火をそつと畳んだ台所
飯の世と思えば気楽八十五
へソクリと相談したらケチになる
いい夢をご飯ですヨで起こされる
ちろちろと胸の火種が燃えやまぬ
脈脈と今日も生きてる夜が白む
自立して距離遠くなる母の味
真ん中は今も昔も卑弥呼の座
宮仕え坐り直してご返杯
わだかまり静かに解ける角砂糖
やつと空いた席へ横から座られる
平凡が何よりだよと父の声
火の鳥で手塚ワールドのめり込む
日野原氏歳に不足はないけれど
今日をどう生きるか糞虫が揺れる
座っての大仏だから親しめる
国難といわれてびつくり平和呆け
火を付ける快感知ったおしゃべり魔
丸い輪のほどよい距離にある癒し
遠距離の里に逢いたい人がいる
座り込み今や昭和の語り草
ライバルをはめ損なつた落し穴
反抗期そつと見守る車間距離
フェロモンへ火に入る虫のごと男
限界九秒の壁走り抜け

残り火をそつと畳んだ台所

飯の世と思えば気楽八十五

へソクリと相談したらケチになる

いい夢をご飯ですヨで起こされる

ちろちろと胸の火種が燃えやまぬ

脈脈と今日も生きてる夜が白む

自立して距離遠くなる母の味

真ん中は今も昔も卑弥呼の座

宮仕え坐り直してご返杯

わだかまり静かに解ける角砂糖

やつと空いた席へ横から座られる

平凡が何よりだよと父の声

火の鳥で手塚ワールドのめり込む

孝代 和子

正報

郁夫

たもつ

勝弘

高志

修

賢子

弘委智

直樹

和夫

野鶴

かずお

節子

武彦

千恵子

星雨

寛昭

惜しかったそれでは食えぬプロの道
生き様のドラマ火の章水の章
遠出する日にはママチャリピカピカに
ありがとう感謝の言葉惜しまない
ゆつたりの時間を咀嚼する傘寿
どっかりと座る阿弥陀に慈悲を乞う
窓際に座ると世間よく見える
都構想堺が野望打ち砕く

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

札束でも買えないものを持つている

札束を積まれようと白は白

過労死の汗の宿していた涙

日曜で明け日曜で終る年

日日葉薄紙はがす程癒える

過労死に札束なんか欲しくない

巨人じゃない今や宿敵赤ヘルに

本当の金持ち札束なんぞ持たぬ

濡れ衣が溶かした日々は溶けたまま

いつまでも不正が宿る自民党

札束で怖さ知りつつ再稼働

札束に弱い部下に強い人

日の残り今日もしつかり汗かいた
あだ名呼ばば顔まで戻る幼い日
札束を積んで裏口門叩く
札束を軽々受ける退職金
札束に縁がないから今のどか
羊水がお守りします君の宿
トランプを選んだ民を嗤えるか

捷二 志華子

熊五郎

杵香

満作

あさ子

正

たもつ

朝子

黒兔

哲男

シマ子

一歩

福貴子

ひろし

冬のト

一文

善之

篤

すぐ臍を曲げる男の淋しがり
爺ちゃんに昨日も今日も昭和の日
地獄極楽話のへそに仏さま
木もれ日の小径ひとりの秋になる
アンパンの臍のあたりにある内緒
七年七日蟬は辞世の句を詠まぬ
九条がデンと心に根をおろす
秋の空独りぼっちの日曜日
小柄だが夕日背に受け影巨人
札束を積めば拉致の子帰るなら
臍下のネタで儲ける週刊誌
札束を積んでもやらん恋女房
札束で欲の器の底抜ける
へそビ―で雷さんもギョギョのギョ
大宇宙森羅万象神宿る
父母誇る遺伝子宿る新生児

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

栄子 茶助 克己 紀乃 浩子 義泰 廣子 一志 万作 隆昭 喜代志 秀夫 敏男 常男 壽峰 高鷺

重忠 清信 一平 一瑤 天粹 茶子 公子 美恵子 蟹郎 たぬ

罪のない没句哀れと慰める
風ふけど心のある党選びたい
この人と選んだあな星になる
知ったかぶりすれば赤恥かくことも
没句でも今度こそはと天目指す
先生はずいマドンナ妻にする
見栄はった知ったかぶりでケガをする
過去のこと今さら知ってどうなるの

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

真 福子 幸安 敏子 雅女 真理子 振作 彰夫 節子

いろいろと問題残し解散す
わたくしを剥がせばいろいろな色に
余生いろいろわたしは花を育ててる
いろいろ取りつくろって今日がある
議事堂の机で眠る罰当り
窓際の机の上に六法書
乱雑な机が僕の小宇宙
勉強が嫌で机だけ立派
みかん箱机に学び今博士
おばちゃんはしゃべりまくって飽ひとつ
美女の目尻カラス歩いた痕がある
亡親友の目尻伝つた一滴
選挙戦だるまの目尻定まりぬ
いい笑顔鳥の足跡が深い
お気を付けあそばせ目尻に歳が出る

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

萩江

席題は柿の予想が栗に化け
淡少し加えて栗飯色気出す
花からは想像できぬ栗の毬
廃屋の土台栗の木まだ元氣
人間が好きで居留守を使わない
婆さまは留守で爺さんは高軒
留守をして只今を言い戸を開ける
留守役についた昼めし昼寝つき
へそくりの置き場所変える妻の留守
留守ですと貼り紙したがり明かり漏れ
村は過疎留守が空き家か分らない
よつしやよつしや安請け合いの無責任
よつしややる掛け声だけの空元氣
よつしやあと前に出るのは氣持だけ
朝が来たよつしやと氣合入れ動く
接戦時敵のよつしやと呑み込まれ
好きなことやつてる時は疲れない
疲れても母の話は聞いてやる
くたびれたブライドを布団に包む
キー落し探し疲れたキノコ狩り
長時間待つて疲れる診察日
飲み放題奉仕疲れの慰労会
疲れると不思議だ腹が立つてくる
偶は良し長いと困る妻の留守

さんだ川柳大会(兵庫) 田中 章子報

次男 大鯨 玲子 風露 日出子 石花菜 けいこ 雄大 野蒜 紀美恵 妻一 鬼一 康子 由紀子 恭子 茂夫 智恵子 美知江 宣子 重忠 龍枝 祐子 醉美蓉 照彦 哲男 輝彦 正和

百歳が増えて子供が居ぬ時代
百歳の笑顔と皺に嘘はない
百姓をやめてマンション建てました

百迄も生きたらもつと嫌われる
草刈りの出来る自慢の足と腰
半世紀スリーサイズが変わらない
釣果言うたびにでっかくなる魚
下手ですがだれとんでもかよう抜ける
献杯をつい乾杯と言っちゃった
うっかりとご飯おかわりしてしまふ
タグつけたドレスでダンス踊りきる
言い訳に同じ話を二度三度
うっかりと京のぶぶ漬け食べちゃった
耳もとで裏着てますよとささやかれ
挨拶をしたばっかりに一時間
強度不足の鉄だつて許せない
側にいることしかできぬけど許せ
許さねばごめんと君が言ったから
妻となら握手もハグも許される
結婚式一緒に住んでから挙げる
しょうがないやつちゃと猫の朝帰り
店頭の松茸スマホで撮っておく
スマホ時代律義に届くお札状
得意気に取り出す真っ赤のスマホ
僕だけがスマホ持たない時が来る
団欒の時を奪つてゆくスマホ
スマホ失くした今日は学校休みます
百回のスマホより君に会いたい
さんまさんま煙もたてず秋の行く
その国に一人だけです肥満体
全没でも枝豆土産あるさんだ
食べ頃になったメロンへ不意の客

千津子 迪 和子 永筆 勝弘 宏造 ひとみ 千賀子 紀乃 紀乃 聖也 蕉子 かずお 恭子 俊昭 耕治 祐康 ひろ介 敏子 たもつ 修平 徹 一子 哲夫 美津子 利子 キヨミ

時々は誉めねば妻がへそ曲げる
高齢者ファースト党があつたなら
あと出しジャンケン 閻魔負かしてみたいもの
川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報
喧噪のこの世土竜になつて
土曜日の川柳だけは忘れたい
土日はねわたしにとつて宝物
一生を苦労知らずの土踏まず
古里は草が元気で威張っている
土砂災害全国ツアーしないですよ
海鳥も怖ず怖ずと飛ぶ日本海
酌み交わす二人で大きな海つくる
真実を叫びたくなる海の青
回遊にもう飽きたから独り旅
干満で地球の海の命知る
海坊主毛皮ダイヤは似合わない
アクセルをゆつくり踏んで来いと海
K点を狙うトンボの宙返り
脳回路点滅したら水枕
点と点空手チョップで対角線
つらい時流す涙はありつたけ
言われても滑舌悪いロバの耳
つらい時思いひとつでハッピーよ
泣いた過去今はよかつたことにする
つらいこととみーんな忘れバスツアー
つらいことあつて世の中進みゆく
ラミネートされ息ができなくなつた紙
ボランティアつらいつらいと言いながら

好文 花門 美龍 芳山 紗季 久絵 邦代 あきら 草庵 たけし 涼子 孝子 輝山 とも子 美智子 寿代 德利 哲子 桂子 青帆 朋子 雪代 静枝 ひふみ 弘充 柳歩

たいがいにつらさ知つたよお月さま
案じてる音沙汰もなく夏が過ぎ
ねむれない古民家の屋根音がする
調律の狂つたピアノ弾いている
エトセトラ老人クラブ音楽会
翠洋会(大阪) 佐々木満作報
平均寿命とつくに越えて魔女となる
平凡凡秋には秋の花が咲く
美女に踏まれ平気糞う鼻の下
平成の生まれも強いアスリート
あれ以来平行線を保つて
平行線の議論で過ぎた二十四時
泰平の日本に忍びよる危急
意地悪は廻りに誰もおりません
意地だけで生きられるなら世話要らん
雑魚なりに天辺目指す意地がある
煽てられ家事のノルマを課せられる
一日のノルマ果たした仕舞舞呂
死ぬというノルマを抱いて生き延びる
ノルマあつて初めてやる気湧いてくる
ノルマかけやる気起こさず処世術
真面目な娘過激なノルマ潰される
ノルマ達成花丸つける棒グラフ
短日へなお終活のはかどらず
理不尽は許さぬ何と言われても
慣れた家一人が楽とゆずらない
笛太鼓永田町でも秋祭り
夏は冬冬には夏が好きと言う

知恵子 ゆき 俊子 聡美 幸子 志華子 義昌 善之 良子 昭 満作 日の出 和夫 捷也 弘 楓 富子 げんい 舞夢 紀子 桃花 希久子 理恵 敬子 眞澄 公平

50年夫婦のいまだ未完成
大器だと伸び代があると信じた
蕉子 すみ子

富柳会(大阪) 関 よしみ報

夜十時夢を操る影法師
弾む息静まり切らぬ傘の中
明け烏一番鶏の座を狙う
田鶴子 文重

ちぎれ雲何れまとまる風が舞う
行雲と流水の中墨衣
澄子 伸雄

静寂のホールを凌賀親友の唄
コソコソと生きている都市砂漠
朋子 正治

ゴキブリは人目忍んで生き残る
静謐の社に響く息遣い
高 驚 清

コソコソと逃げるしかない赤い嘘
無駄飯を食べ飽き頭白くなる
慶 充 隆

札束を掴んだ蟻の不眠症
駆引きに負けてもめげず明日めざす
一文 常男

コソコソは寒くて心風邪をひく
保育器のまつさらな息無限大
寿 之 アキ

その昔私も赤い渦だった
千枚田一枚だけで稲を抜く
よしみ 欣之

コソコソが得手で仲間の鼻つまみ
雲は私を私は雲を抱いて夢
森子

秋本番果があんぐり大欠伸
長閑なる赤子の欠伸健やかに
芳江 妙子

電車内つられて欠伸昼下り
がまんして止めるあくびに涙出る
礼子

六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

吠えたとして返りくるのは木霊だけ
吠え方を忘れて今は好奸爺
ありがとうと小さく吠えてボチ眠る
和 郎 廣 光

面と向かい言えぬうつぶん海に吠え
売上げが増えた増えたとボス吠える
吠えている僕も負け犬なのですか
道子 京月

旅婦り土産取り合い俺はここ
財布見て慌ててやるおみやげを
孫というみやげに疲れ夏終る
弘 利子

鼻先の札束ノーと言わせない
秋日和妻に急かされ模様替え
赤ちゃんを見ると性善説になる
一 敏 邦子

ワイン抜き月にカンバイ一人酔う
吠えたとして何も変らぬ身の回り
笑うまで待ちます遺影カメラマン
博史 紀乃

手を合わせ拝んでみても神無月
お互いの夢織りあげてゆく余生
遠吠えは犬の男に似合わない
洋次郎 じろう

詩を編むやさしいひとになりたくて
閻魔さんに好みの土産思案する
つくり笑いがつくってくれる笑いの芽
ひとみ 和美

鼻の先であしらわれては引つ込めぬ
鼻の先であしらわれては引つ込めぬ
光 武彦

鼻の先であしらわれては引つ込めぬ
鼻の先であしらわれては引つ込めぬ
光 武彦

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

我に似て朝顔秋に花たわわ
スタッフを揃えて待つという閻魔
押すなんて冗談でしょう核ボタン
尚世 鈍甲

松茸の姿も味も忘れたわ
銀杏 薫

夜が明ける早く涙を拭わねば
白寿まで指折りながら逝く余生
スタッフを集め善意のボランティア
仁 高 驚

無心とはほろほろと秋こほれ
握手にも和解と責めがある怖さ
冗談を柔軟剤に処世術
西 壽 峰

手の届く距離にいるのに遠い人
一言でも不味いと言えば大変だ
寂しくてバラ二三買う独居
弘一 麗

七〇を過ぎててもふたが出来ぬ恋
言い訳はしないと決めた青いバラ
ヘルスメーター毎日乗って恙無し
信子 郁夫

傷つけた言葉へ唇がさむい
スタッフの心束ねる苦勞人
失言を直ぐ攻め立てる週刊誌
賢子 朝子

冗談で言えぬ心の底の底
スタッフがトップのやる気まで握る
A型の性で自虐癖がある
修 武彦

うかうかと離別死別を忘れてる
この人と決めもつ迷わないレース編む
離れてもすぐに引付く甘えんぼ
かずお 高志

赤トンボ歌うお人とすれ違う
赤トンボ歌うお人とすれ違う
恵子 秀雄

赤トンボ歌うお人とすれ違う
赤トンボ歌うお人とすれ違う
恵子 秀雄

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

護身用のナイフいつでも持っている
いざの時ナイフこっそりこの胸に
ステッキナイフ幼な兒うまく食べている
房子 いわゑ

ケーキ入刀興奮気味のナイフ
ケイキ入刀興奮気味のナイフ
智恵子 美美代

半額のピフテキにナイフが折れた
言葉のナイフ刺され生徒が致命傷
浮き雲のように私も自然体
ナイフより恐い言葉を持つている
胸の奥静めたナイフあばれ出す
切れ者と言われた鈍刀の昔
自分に文句言うことが増えたそがれる

川柳打吹(鳥取) 野口 節子報

壁の穴石目どんどん腫れあがる
バイキンマンアンパンマンにかなわない
ばい菌が腰を抜かしたベニシリン
マスクしてばい菌吐いて吸っている
ひとことが過ぎばい菌にされている
付度というばい菌が舞う館
酒とろりとろりばい菌やつつける
生あくび安倍おろしにもあきてくる
日なたほこ猫と一緒に大あくび
退屈な日が重なれば認知症
退屈で指を折ったり伸ばしたり
退屈という幸せが続いてる
退屈な国が軍歌を唄いだす
故郷は昔松茸取り放題
松茸の香どこへ飛んだか輸入品
ニハオと松茸日本へ上陸だ
モロッコじゃ松茸なんか猿のエサ
こっちからあつちの花へ蝶の舞い
都長さんひらり新党立ち上げる

昌 紀 久仁雄 光 久 たもつ 美智代 蕉 子 楓 楽 野 蒜 悦 子 清 重 忠 芳 光 美知江 美ツ千 みち子 公 恵 久芽代 貴 恵 泰 山 三津子 岳 人 節 子 紀の治 完 司 大 鯨 妻 子

溝川をひらりと飛べてまだ若い
カワセミのルリ色ひらり水しぶき
天国へひらりと飛んで行ってみる
ララララプチ整形をしてひらり
いい風が吹くまで待っている紅葉
ちひろの絵ひらりと心撫でてゆく
きやらぼく川柳会(鳥取)後藤

宏之報

老いの頭昔むかしを覚えてる
鈴虫の独奏聞いて和む夜
頭の上とおるだけでもこわいです
日記には出会った人と呑んだ人
うっかりと同じ傘下で濡れている
何をしにここへ来たのか妻知らず
香を焚き座して想うは五十年
もう少し楽しんで遊んでから逝くわ
朝顔が私の目覚め待っている
座が和む人にと話かしこまる
黄金の稲田をすそに伯耆富士
嵐去りほっと一息日照り待つ
台風も結婚式に駆け付ける
めんどろな人の取説ないのかな
やって来た選挙間近の囲み会
目指しても足から崩れ途中下車
しじみ蝶娘の命日も近くなる

多美子 治 代 宏 之 紀の治 恵 子 雨 奇 美智子 美 草 あやこ 美佐子 ゆたか 登美枝 美 穂 令位子 汪 日枝子 千 代 求 芽

内定通知郵便受けが草臥れる
独り言心の整理がまだつかぬ
ゆとりなどあれば不善に走りそう
風評にとほけた顔で泣く案山子
コスモスの迷路で人間に戻る
集まれば昔話が出来る友
リベラルの排除で向い風を産む
長生きもいねことしも柿実る
宝石たちは自慢話が好きである
凡人のゆとり情眼を深くする
気にさわる事は言わない寒い口
行間へ温い風吹くみずの詩
IPSのデカイ足音待つ患者
わいわいと騒ぎ寂しい目をしてる
ふるさとはゆとりをくれる風が吹く
イヤホーンに母さん留守とほけとく
いかなごの釘煮が着かぬ何かある
秋時雨老いのとまどう外出着
TPO今日は洪目で勝負する
ゆとりなどないがばらまくマニフェスト
繰越金そのまま残し役終える
人はふと後ろ姿を見て懐く
一瞬を重ね日となり年となる
着実に断捨離をして逝かはった
乗せ上手乗せられ上手でうまくいく
とほけても天は誠を照らします
笑いを渦にするにんげんのゆとり
ゴール迄のんびり行こう平泳ぎ

美智子 浩 子 真理子 千 代 葉 子 黒 兔 則 彦 耕 治 満 子 宏 子 正 彦 見 清 千鶴子 玲 子 雅 美 堅 坊 野 鶴 久 子 歌留多 (未) 玲 子 ヨシエ きらり 后 子 まゆみ 美佐子 健 二 武 彦 肇

第32回 国民文化祭・なら2017 (11月12日)

本年度国民文化祭は奈良県「かしはら万葉ホール」で開催された。

事前投句、事前投句は2,257名、当日参加は713名。大会各賞は下記のとおり。(太字は同人)

..... 一般部門・入賞句

文部科学大臣賞

椿守大地へかえる鐘をきく

国民文化祭実行委員会会長賞

憧れる像へブラッシュアップする

奈良県知事賞

にんげんの臭いで焼けるラブレター

第32回国民文化祭奈良県実行委員会会長賞

母に似た人は夕焼け小焼けいろ

奈良県教育委員会教育長賞

原点は焼け跡でした アツ螢

橿原市長賞

大海を知って帰って来る金魚

第32回国民文化祭橿原市実行委員会会長賞

憧れの高さに咲いたままの花

橿原市教育委員会教育長賞

古日記過去を悲しいほど喋る

全日本川柳協会理事長賞

Uターンの峠に響く父母の声

奈良県川柳連盟理事長賞

雲ほつと今日は大和へ流れきて

大阪府 森 中 恵美子

熊本県 徳 丸 浩 二

三重県 吉 崎 柳 歩

大阪府 森 中 恵美子

和歌山県 木 本 朱 夏

宮崎県 吉 井 楼 太

大阪府 田 中 美弥子

大阪府 伊 達 郁 夫

島根県 伊 藤 寿 美

滋賀県 松 延 博 子

二次選者 大野 風柳・竹本瓢太郎・小島 蘭幸・赤松ますみ・阪本 高士

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 飲む・終・へろへろ・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸 和 田 川 柳 会	16日(土) 12時30分開場 酒・頑張る・もしかして・ピリオド	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
和 歌 山 三 川 柳 会	16日(土) 12時30分開場 栄える・希望	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 (住所不要) ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川 柳 塔 みちのく	16日(土) 17時締切 煮込む・ぐっすり・募金	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	17日(日) 12時開場 チャンス・悲しい・天国・自由吟	寝屋川市産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	17日(日) 14時締切 奥・富む・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川 柳 ふうもん 吟 社	17日(日) 10時開場・受付 没句川柳供養大会 サブリマージュ日線電る余罪ずっと天皇敬者復活吟	新日本海新聞ビル 5F 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥 川柳塔誌参照11月号 125ページ下段
南 大 阪 川 柳 会	18日(月) 13時開場 仮面・断る・過去・欲しがらる	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
豊 中 もくせい 川 柳 会	18日(月) 13時50分締切 懐・舞う・たしか・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さん だ	19日(火) 13時30分締切 露出・持つ・テーマ・柔らかい 自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川 柳 たちばな	20日(水) 14時締切 席題・やれやれ・積る・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
はびきの 市 民 会 川 柳 会	24日(日) 14時締切 鐘・優しい・ヒント	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷺」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
京 都 塔 の 会	25日(月) 14時締切 大げさ・べちゃんこ・熱	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子
川 柳 塔 すみよし	12月は休会します	住吉区民ホール 〒558-0054 大阪市住吉区塚山東2-4-9 古今堂蕉子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北 川柳会	2日(土) 14時締切 飽きる・迂闊・ぼつぼつ・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪府城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	2日(土) 14時締切 鮮・和・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL・FAX0721-25-0603
倉吉 川柳会	2日(土) 14時締切 飲む・けろり・手袋	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 塔え社 まっ吟	2日(土) 12時30分開場 乾く・気まま・追う・安心	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
川柳 塔な	6日(水) 14時締切 協力・バタバタ・結果	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄「奈良」駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
あかつき 川柳会	8日(金) 14時締切 来る・枝・地上・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	9日(土) 14時締切 煙る・公園・天下	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪府都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六甲 川柳会	9日(土) 14時締切 誘う・だます・言いわけ・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11 山崎武彦
川柳 わかやま 吟社	9日(土) 14時10分締切 歩幅・過ぎる・しかし・答	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
川柳 塔打吹	9日(土) 13時30分締切 ポスト・過ぎる・シンシン	倉吉市上瀬町9 上瀬公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	10日(日) 14時締切 豪傑・あんばい・架ける・雑詠	八尾市渋川町・安中町集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0075 八尾市渋川町5-2-7 中 蘭 清
西宮北口 川柳会	11日(月) 14時締切 納得・忘れる・ぴったり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる 川柳 同好会	12日(火) 13時30分締切 輪・切る・すがすがしいこと	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール蛸池 蛸池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳 塔さかい	12日(火) 14時締切 力む・芝居・折句：ながい	東洋ビルディング4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月

柳界展望

★平成29年夏「龍ヶ崎川柳誌上大会」とり。同人成績。
 人成績。大久保眞澄
 舵取りは夫私の手のひらで
 ★「第5回ふるさと川柳・荒」は、45名の参加。同人成績。
 秀句 平井美智子
 荒海の奥に心療内科の火
 秀句 三宅 保州
 生態系荒らす報いはきつと来る
 秀句 森山 文切
 マカロンを食わねばならぬほど荒れる
 秀句 竹村紀の治
 ささくれた手の一票が届かない
 ★川柳研究者主催「川上三太郎没後五十年記念誌上大会」。同人成績。
 第一位入賞 平井美智子
 平凡がいい雨垂れは四拍子

★河北新報1110周年記念・川柳宮城野70周年「66回東北川柳大会」は、仙台市国際会館で271名の参加で開催。小島蘭幸主幹は日川協理事長として表彰状を授与した。同人成績。
 宮城県議会議長賞 新築 完司
 戦争は放棄しました日章旗
 全日本川柳協会会長賞 木本 朱夏
 呼鈴は壊れて誰も還らない
 ★「第69回西日本川柳大会」は、10月4日久米南町文化センターで開催。同人成績。
 秀句 両川 無限
 第4位 (当日出句の部)
 第3位 両川 洋々
 第5位 桧尾 奏子
 ★「第44回岸和田市民川柳大会」は、10月15日岸和田市立福祉総合センターで135名の参加で開催。同人成績。
 文化祭賞 西出 楓楽

新しい年号どんな風が吹く
 文化祭奨励賞 川上 大輪
 わいわいは私のサブリメントです
 ★「第5回さんだ川柳大会」は、キッツモールで102名の参加で開催。同人成績。
 秀句 山田 耕治
 父の日の父の似顔の黒い髭
 秀句 山田 耕治
 しょうがないやつちゃと猫の朝帰り
 秀句 長浜 美籠
 あと出しジャンケン閻魔負かしてみたいもの
 秀句 尾崎 一子
 百回のスマホより君に会いたい
 ★「第13回沖繩縣川柳大会」は10月19日開催。同人成績。
 全日本川柳協会賞 森山 文切
 核兵器棄てたら丸くなる地球
 △執 筆
 ○石橋芳山さん(理事・松江市)は、「葦群」42

号に「七五調のリズム」を執筆。

▽動 向△

○本誌に「英語で川柳」を連載中の吉村侑代氏は日本英文学会第54回学会賞(豊田賞)を受賞された。受賞論文は「イギリス生まれの日本文学研究者R・H・ブライス」足跡と業績。
 △表 彰△
 ○「河内長野川柳協会」は、11月3日、川柳協会発足10年にわたり河内長野市文化向上に不断の努力を重ねたとして、平成29年度「河内長野市市長表彰」を受賞した。
 △御 芳 志△
 ○故林瑞枝様ご遺族様から金一封を拝受しました。
 △雅号変更△
 ○野口晶子(三田市) ↓ 野口眞桜子。
 ○日野岡和之(川西市) ↓ 岡 一心。
 △訂正とお詫び△
 ○11月号、P82下段15行目 樹木宏子→樹本宏子、P85上段14行目、富山恭子→富永恭子。P86上段17行目、(同人・鳥取) ↓ (誌友・伊丹)。P96中段27行目の句、本人の申し出により削除。

▽新誌友紹介△

黒石市 北山まみどり
 紹介者 木本 朱夏
 鳥取市 葉研てい子
 紹介者 森山 盛桜
 常任理事会 11月7日(火)
 ①常任理事業務分担確
 ②第23回川柳塔まつり総括
 ③規約改定の検討④定例確認事項。
 次回常任理事会 12月7日(木)AM10時

新 同 人 紹 介

はせがわ 長谷川 崇 明
 一 比呂志・理恵・和夫・富子推薦

高野山川柳塔碑合祀祭中止のご報告

第二十九回川柳塔碑合祀祭は本年十一月四日（土）に実施予定でありましたが、近畿地方を巻き込んだ台風二十一号による鉄道遮断復旧の目途が立たず、止む無く今般のみ中止とさせて頂いたことと致しました。（南海高野線、高野下り極楽橋間の不通）就きましては次年度に併せ合祀法要とさせて頂きたく、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

平成30年新春 龍ヶ崎川柳誌上大会

題 『く い』 新作2句
選者 佐瀬 貴子・片野 晃一
相田 柳歩・岩佐ダン吉
楠根はるえ・大久保真澄
福田 恒産 他
太田紀伊子 謝選（得点対象外）
締切 12月10日（日）当日消印有効
投句料 1000円（発表誌送呈）
賞品 高得点句に茨城名産
投句 電話・住所・氏名
投句先 〒301-0043
茨城県竜ヶ崎市長山5-17-6
太田紀伊子 方
龍ヶ崎川柳連盟 事務局
主催 龍ヶ崎川柳連盟
電話 0297-66-1293

進化するホームページ！

川柳塔ホームページは、本社句会の日程・課題・選者のご案内、本社句会前月秀句などさまざまな情報を掲載しております。

また、一方通行ではなく参加型を目指して下記の企画を実施しております。皆さまお気軽にお楽しみください。

- ・WEB句会 外部選者と川柳塔選者の2名共選。毎月実施。どなたでも参加できます。投句フォームあり。
- ・ミニ句集 同人と誌友の50句のミニ句集を無料で掲載しております。掲載申し込みは応募フォームから。
- ・若手エッセイ 若手同人3人によるエッセイ。毎週土曜日更新。30代40代の同人でエッセイを書きたい方は、ホームページのお問い合わせから管理人にご連絡ください。
- ・掲示板 ご意見やご感想などをお待ちしています。

アドレス：<http://senryutou.net/html/index02.html> サイト管理・森山文切

編集後記

★十二月うれしい風も少し吹け 路郎

★言葉の恐ろしさを思い知らされたのは、一〇月の衆議院選挙での小池百合子氏の「排除する」発言だ。「騙れる者は久しからず」彼女は歴史から何を学んできたのか。使う言葉はその人の本性を現す。川柳人は「言葉」から様々な作品を生みだす。生まれた作品には魂が宿り、力をもつ。「言葉」をかるくみてはいけない。それをつくづくと教えられた選挙であった。

★福島原発事故をきっかけとして、原発がなくとも生きられるはずだと節電を始め、次々と家電製品を手放し最後には冷蔵庫もテレビも捨て、遂には朝日新聞記者という結構な身分も地位も手放した稲垣えみ子著「寂

しい生活」(東洋経済新報社・2017年6月発行)を読んだ。電気代は月150円台、暑さ寒さはただ甘んじて受け入れ、食事はカセットコンロで炊くご飯と味噌汁と漬物。ガス契約もやめ、二日に一度の銭湯が最大の娯楽という独身の51歳。

★こう書けばとても惨めな生き方に見えるが、誤解しないでほしい。彼女は貧しくはないしケチでもない。ユーモアたっぷりな文章からは究極の生活を楽しんでいる様子が伺える。プロメテウスが神の火を盗んで以来、便利な暮らしの名のもとに人間の欲望には際限がない。私が最も打たれた一節を紹介したい。

★《自分さえよければ誰かを踏み台にしてもよいという考え方が原発事故を生み出したのは偶然でもなんでもない。我々は

ひとこと

歌舞伎と川柳

無形文化財で四百年の歴史を持つ歌舞伎も元々はアニメやゲームと同じサブカルチャーでした。歌舞伎は河原乞食の所行、出雲の阿国の念仏踊りが娘歌舞踊りに発展、一躍アイドルブームと成りました。一方川柳が生まれたのは二六〇年前の江戸時代後期です。前付けで「俳諧」の点者柄井八右衛門が号を川柳として登場しました。この川柳という人は生涯三百万句もの作品の選をこなし大変な人気を博しました。川柳が現

在のように隆盛を迎えたのは、大正、昭和期に「六大家」といわれ活躍したイノベーター(革新者)の貢献が大きいいわれられています。歌舞伎の特徴のひとつに出演者は全員男のみということがありますが川柳は老若男女を問いません。最近イノベーターとしての女性の進出は目ざましくまさに女の出る幕といえるでしょう。

助六は綱渡りでもしそうな

高橋 散二
脇治郎ぬげた草履が生きている

岸本 水府
(中川ひろ介)

すでに誰かを踏み台にしてきたのだ。今や誰もが福島で起きていることを多かれ少なかれ「見て見ぬふり」をしている。原発事故は我々の中に大きな分断を生みだしてしまった。(朱夏)

□『定本種田山頭火句集』(S56年発行)を鑑賞した。山頭火は生涯1万句を遺している。『定本』は、そのうちの2千句余り。驚いたのは、五七五の句は約100句だけ。あとはすべて自由律。7音から二十六音まであった。なのに、山頭火が評価されるのは何故なのか。それは、やはり彼の自由奔放な生き様であろうと思う。数少ない五七五から五句を拾う。

いつ見ても咲いている花赤い花
いただいて足りて一人

の箸を置く
夕立が洗っていった茄子をもぐ
何もかも雑炊としてあたたかく
落葉するこれから水がうまくなる
もう一句、二十五音だが鶴彬とよく似た句があった。

足は手は支那に残して
ふたたび日本に

(勝弘)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(2月号)

地名

市都
道府道
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- (4)

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお問い合わせいたします。

檸檬抄投句用紙

「一大事」(12月15日締切)

2月号発表

齊尾くにこ 選 — 共選 — 山口 光久 選

B

A

B

A

地名

市都
県道府
姓雅号

地名

市都
県道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

2月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭 幸選
水煙抄 (8句) 川上大輪 選
愛染帖 (2句) 新家完司 選
檸檬抄「一大事」 (2句) 山口光久 共選
山尾くにこ
インスピレーション・ナビ (2句) 大西泰世 選
集「格別」 三宅満子 選
一路集 (2句) 「鬼」 栗田忠士 選
初歩教室 「短い」 (3句) 居谷真理子 担当

3月号
檸檬抄「もっと」
一路集「手抜き」「新品」
初歩教室「ピンク」

本社12月句会

とき 12月7日(木) 13時開場・13時40分締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06-6772-1441

おはなし「時代と川柳」
兼題「土」
「結ぶ」
「ふと」
「祝顔」
「素顔」

水野黒兎氏
井丸昌紀選
小谷小雪選
原田すみ子選
松岡篤選
大内朝子選
小島蘭幸選

会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社1月句会
9日(火) 午後1時から
兼題「和風」「たっぷり」「子ども」
「笑う」「トップ」

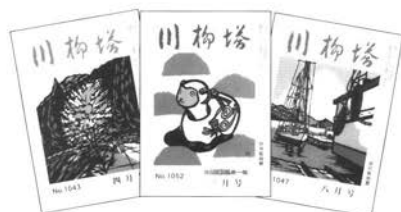
川柳塔WEB句会のご案内

課題「仲」 森山盛桜 共選
真島久美子
締切 12月20日 発表 12月25日頃
投句料 無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料83円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一七年(平成二十九年)十二月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 (06) 6772-1178
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの

一句を募集します。

兼題

「ごま」川柳塔社主幹小島蘭幸 選

応募要領 郵便八ガキに2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。

発表 本紙4月号にて発表いたします。

締切り 2018年1月31日(当日消印有効)

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

オニザキの

手作りの味わいに
こだわって
六十二年

ごま



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中心区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>